
IS <インフィニット・ストラトス> 異常

祿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラトス< 異常

【Nコード】

N8918S

【作者名】

祿

【あらすじ】

主人公の神風学園高等部1年神崎真央は秘密があった。

周りにはペットだと言っているタヌキのポンコツはISの待機状態であり

わけあってある人からあずけられたものだと言つことを

初めて書くのでちょっとおかしなことが多いかもしれませんが

プロローグ

「はあ」

ため息をつく少年、名は神崎真央かんざき まお
そして彼の幼なじみの天草鈴花あまくさ すずか、真央のペットのポンコツは神風学園の正門前で立ち往生していた

「ため息なんてついてないで早く校舎に入ろう真央、今年も同じクラスなのに」

「せかさないでくれよ鈴花」

「ポンポン」

「ほら、ポンちゃんもそういつてるよ」

しびしぶ校舎に向かって歩きだした

(いやなんだよなあ、神風学園は)

そんなことを思いながら教室に入り、席についた。

「まっおー！元気してたか？去年は同じクラスになれなかったから

寂しかったよー」

「真夏、落ち着け同じクラスなのか？お前は」

「うん、そつだよー」

この元気がいいのは坂井真夏さかい まなつ中学が同じで結構気が合う

「あとねえー、ちわわもだよ」

ちわわと言うのはきつと知和正人ちわ まさとのことだろう

「あいつもか、今年は騒がしくなりそつだな」

「真央はにぎやかなの嫌いなのか？」

「なにー！まっおーは嫌いなのか！」

（いや嫌いではないです、騒がしいのが嫌いなのです）

その時はまさかあんなことになるとは思ひもしなかった……

第1話「今日も明日もその次も」(前書き)

どーもナポリタンです！

性懲りもなく書きました。

よかったら読んでください！

第1話「今日も明日もその次も」

馬鹿がいる

朝っぱらからナンパを鈴花にしている馬鹿がいる。

「ねえ、これから俺達とどっか楽しいところかない？」

「こ 困ります…、これから学校に行かなきゃいけませんので」

「いいじゃんいいじゃん！学校なんてサボっちゃえばさあ」

ナンパが終わりそうになく、鈴花が涙目になってきた。

(鈴花かわいそうにそろそろ助けてあげるか)

ナンパ野郎の後ろから近づいていく

「俺の女になにちょっとかいかけてんの？」

そついうと足元にいるポンコツが威嚇し始めた。

「あー？、お前みたいなのひよろひよろな奴がこの子の彼女？」

「ギャハハハハハ、まじありえねえわコイツ！嘘へたすぎ」

ガブ

ポンコツがナンバー一号に噛み付いた。

「イテテテテ、なんだこいつ!？」

「シャアアアアア！」

ポンコツは威嚇し続ける

「いこうぜ、もう萎えちまったよ」

そういつて退散していくナンバー一号と二号

「ふう、ポンコツのおかげで何とかなっただな……」

緊張がとけ、体中の力がぬけた

「大丈夫!？真央、ポンちゃん！」

鈴花が心配そうに駆け寄ってきた。

ナンパの人の気持ちはわかる、鈴花はとても可愛いし、スタイルも

……

「うん、平気だよポンコツのおかげで」

そういうとポンコツは俺の頭に乗って得意げな顔をした

「そっか、ありがとね助けてくれて……カッコヨカッタヨ……」

「ん？悪い最後の方がよく聞こえなかった」

「ううん、何でもない！早く学校いこ」

鈴花が笑顔で俺の手を引いて歩きだした

(やっぱり笑顔が1番だな、鈴花に限らずみんな)

手を繋ぎながら校門を通ると視線が集まってきた気まずくなり……

「鈴花、そろそろ手を離さないか？」

「んー？教室まで一緒にいこっ」

「いやいいけど、手は離さないか？」

「エへへへー」

あーこりゃだめだ

突き刺さる視線を耐えて教室まで超上機嫌の鈴花と手を繋ぎながら一緒にいったら

「あー！まおんが鈴つちと手繋いでるー！」

嫌なやつに見つかってしまった……

「あんまり、見せ付けてるとく、殺られちゃうよ」

「怖いこと言わないで！俺不登校になる！」

殺されるくらいなら学校サボろう、学校より命が大切だ！

「大丈夫よ、真央が不登校になったら引きずってでも学校に来させるから」

「鈴つちばっかり真央つちにくつついてズルイぞお！」

「真夏、さっきから呼び名がコロコロ変わってるのはなぜ？」

「ず、ズルくないよ！それにそんなくつついても……ないし……」

頬を赤く染めちゃって鈴花のやつ

熱でもあるのかな？様子をみて保健室につれてくか

「アハハハ、顔赤くしちゃってえ〜カーワイイ！」

そういつて真夏が鈴花に抱き着いてほお擦りした

鈴花はくすぐったそうにしながら真夏の頭を撫でていた

（こんな日がいつまでも続くといいな）

そう

次の日もその次の日も……

第1話「今日も明日もその次も」(後書き)

読んでくださってありがとうございます！

これからも頑張るので応援よろしくお願いします

第2話「んー、いやしかし…でも」(前書き)

しゅーせいー!

第2話「んー、いやしかし…でも」

「んー」

大きな悩み事が出来た

最近、女と間違われてナンパされることがあるからだ

「どっからどう見ても、立派な日本男子なんだけどなあ」

そういつていると、鈴花が歩み寄ってきた

「何意味のわからないこと言ってるの？でも真央は女の子見たいに可愛いよね」

なんて恐ろしいこと言っただこの子

「全然嬉しくないよ！」

鈴花はあははは、と笑った

今日も黒い長い髪が綺麗だ笑顔も可愛いし、だからよくナンパされるんだ

「今……変なこと考えなかった？」

「ん？滅相もない、ただ可愛いなあって」

鈴花が顔を赤くし、俺の前にでて

「ばーか！」

俺が罵倒された瞬間

鈴花と10mほど離れたところが爆発した。

「あ、あ、ま 真央……」

目の前で何かが爆発したのを見て、腰が抜けていた鈴花の前にはたつた。

「鈴花、大丈夫か！？」

「う、うん」

まだ立てそうにないなコイツ

視線を爆発した場所に戻した、黒い煙の中からISを装備した人が出てきた。

「IS…？なんでここに……」

するとそのIS操縦者が口を開いた

「天草 鈴花を渡してもらおう、抵抗するなら容赦はしない」

「（何言ってるの？こいつ）なんで鈴花を？」

「お前がしる必要はない、素直に渡せ」

鈴花に目を向けると訳がわからなさそうな顔をしている。

「断る、訳もわからないのにわたすわけないだろ」

「なら……………消えろ！」

女の人が近接ブレードを出して突っ込んできた。

「くっ……………」

「はやい！よけれな……………」

するとポンコツが俺の頭にのり、光だし俺はその光の中に包まれていった。

気がつくと俺はISを装備していた

「なに！？」

女の方は驚いて距離をとった

「お前何物だ！」

「さあね、これで少しはあんたとまともに戦えるでしょ」

「私に勝てるだけでも？」

「勝てる気なんてないけど、鈴花が逃げる時間稼ぎくらい出来るだろっから」

女の方は鈴花がないのを確認し、こっちを睨みつけてきた

「こしゃくな！」

「豪快な人に言われたくないな」

とその時

『そのIS操縦者！何をやっている、直ちにISを解除しろ！』

気がつくのと、IS学園の教師たちであろう人物に囲まれていた

「これは突破はできないなあ」

そういうと俺は素直に解除したが、女の方は凄いスピードで急上昇して逃げていった

怖そうなスーツをきた人が寄ってきた

隠れてた鈴花を連れてその人に近寄った

「お前達は何物だ、何が目的だ」

鈴花はオドオドしてた

「神崎真央、神風学園2年、あの時は隣にいる子を守るのが目的だった、ISを使う気はなかったけど待機状態のこいつが展開した」

「私は天草鈴花、神風学園2年、目的はありません」

怖そうな人それを聞いて面倒なことになったって顔をしている

「私はIS学園教師の織斑千冬だ、面倒だからお前らはIS学園に転入しろ」

すごい人だ、この人

有名な学園に面倒だからって転入させるなんて

「手続きはしといてやる、明日の朝IS学園の前にこい」

「「はい」」

「それと全寮制だから、必要な荷物も持って来い」

そついうと織斑先生は帰っていった

「真央が変なことしないように私が監視しなきゃ!」

何言ってるんでしょうね、この子……

「確か、IS動かせる男子いたよね」

「うん、よかったね真央一人ぼっちじゃなくて」

男子一人はとてもきついからなあ
なんで男は使えないんだ?

そんなこと考えながら神風学園に足をむける

IS動かせる男子ってーっ下じゃん

第2話「んー、いやしかし…でも」(後書き)

続きは早めに更新しようとする努力します

応援してください

第3話「転入初日」(前書き)

真央と鈴花がちよっとラブラブな感じですよ

ほんのちよっとだけど

第3話「転入初日」

〳〳ISS学園前〳〳

「言われたとおり来てみたけど……」

「うん、近くでみるとすごく大きいね、真央」

さすがは倍率が毎年バカみたいに高い学園だ

「来ていたか、遅れてすまない」

織斑先生がやってきた

「いえ、今来たところです」

「そうか、さっそく事務所に案内する、そこで入居手続きしてから寮に行き制服に着替える」

「ハイ」

しっかりしてる人だなあ
統率がハンパなさそうだ

「それと、神崎と天草は飛び級していたそうだな」

あー、調べたのか

「はい、私と真央は中学の時に飛び級してます」

俺の代わりに鈴花が答えた

「悪いが2年ではなく1年に入ってもらおう、物足りないかもしれないが我慢しろ」

「てことは、あのISを動かせる男子と同じ学年ってことですか？」

「ああ、あれは私の弟だ」

へー、弟さんかあ

そうしてる間に事務所に着いた。
手続きを済ませ、寮に向かった。

織斑先生は職員会議があるみたいで事務所に案内したら、職員室に
いった

「真央は何処の部屋？私は1423号室」

そついいながら事務所で貰った部屋の番号の紙を見せてきた

「へー、俺も1423号室だぞ」

そついうと鈴花は嬉しそうに笑った

「同じ部屋かあ、やったね！」

「確かに知らない人と同じ部屋より、ずっと気が楽だな」

部屋に着くと

「うわああ、キレイー！」

鈴花の言う通り綺麗だ
でもね、鈴花さん

「ちと豪華すぎやしないかい？日本はどれだけココに予算だしてんの？」

シャワーもついてるし、キッチンもある

残念なことにトイレが……

ポンコツが先に部屋に来ていたみたいで壁を壊して作っています

完成まで後少しだと思う

いいのかな？

「まあー、ベッド窓側と廊下側どっちがいい？」

鈴花は気にしていないみたいだ

「鈴花はどっちがいいんだ？」

「私は窓側かなあ、夜景とか綺麗そうだし」

ふーん夜景ね、確かにココからだ綺麗……なのかな？

「じゃあ、俺は廊下側でいいよ」

「ありがとう 早く制服に着替えちゃお」

「そうだな」

貰った制服を取り出すとなぜかスポンがない

「……………」

「あれ？まだ着替えてないの？早く着替えなよ」

「これ女子の制服だよね？」

鈴花に制服をみせる

「そ、そうだね……でも時間ないし」

確かに初日から遅刻はいけないよなあ
仕方ない

思い切って制服を着た

「真央すごい！女の子みたいだよー」

「俺は男だ！」

「声も女の子っぽいし、いいかんじ！」

そんなことをしていたら後ろから話しかけられた

「あなたが神崎君ですね、すみませんが男子の制服用意できないの
で、それで我慢してください」

緑色の髪で眼鏡をした女性がいた

「えと、あなたは？」

「申し遅れました、私は1年1組あなた達のクラスの副担任の山田まやです」

「どうも、俺は神崎真央、それでこっちが天草鈴花よろしくお願ひします」

そっぴいなから頭をさげた

それにしても山田先生は天然キャラっぽいな

「織斑先生の言う通り、神崎君は女の子みたいですね！」

「ですよね！可愛いですよね！真央は」

鈴花がつられて盛り上がってる

「もう行きませんか？お二人とも」

「ああ、そうですね………それでは行きましょう！」

山田先生が少し慌て気味で歩きだした

「~~~~~」

隣の鈴花は鼻歌歌うくらいご機嫌だった

「今日は転入生を紹介します、入ってきてください！」

山田先生に言われ、教室に入り鈴花と並んだ

「それでは自己紹介してください」

鈴花は緊張している

俺からするかな

「神崎真央です、訳あって女子の制服着てますが立派な男ですので
よろしく願います」

続いて鈴花

「天草鈴花です、真央とは幼なじみです、よろしく願います」

自己紹介が終わると

「「「キヤアアアアアアア！」」」

クラスの女子から悲鳴が上がった

「男子よ！男子！織斑君とは違うタイプの！」

「うちのクラスに二人も男子が！」

「生きててよかった！もう死んでもいい！」

コラコラ命は大切にしなさい

「よかったー！俺以外に男子がきて」

おっ男子発見！

教卓の前とは残念な席だな

「君が例の世界規模で有名な……」

「ああ、俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ」

あう、フレンドリーなやつは好きだぞ

「俺も真央でいいぞ」

「よろしくな真央」

「こちらこそー」

軽く握手を交わした

その後、普通に授業をつけ寮に戻るまでの間、俺と一夏は女子にあ
とをつけられた

部屋に戻ると鈴花が先に帰っていた

「真央どうだった？」

「大変だったよ」

「よかったね、女の子にかこまれて！」

何故か不機嫌な鈴花
どうしたんだ？

「鈴花と一緒にが一番だよ、落ち着くし楽しいし癒されるし」

嘘ではない、可愛い子を見て癒されない奴がいるはずないからな

「そう……なんだ、えへへ照れるよー」

顔を赤くして鈴花が落ち着きをなくしていた

「一夏やポンコツも落ち着くし楽しいけどね」

「でも私だと癒されるんでしょ？」

「まあね」

そのあと鈴花はずっとご機嫌だった

第3話「転入初日」(後書き)

読んでくれてありがとうございます

次の更新はちょっと遅くなるかもしれませんが

ごめんない

第4話「クラス代表」(前書き)

鈴花にIS持たせようか迷っていたりします

第4話「クラス代表」

男子2名（1名は女子の制服）が教室の真ん中で女子の視線を集めながら雑談していた

「なあ真央はどうして女子の制服着てるんだ？」

「それが男子の制服を用意できなかったらしい」

「お気の毒に……、つらいだろ」

「急な転入だからしかたない」

入学式の次の日ってどんだけだよ

そんなたわいのない会話をしていたら……

「ちょっとよろしくて？」

金髪の女の子が話し掛けてきた

「へ？」

「まあ、なんですの？そのお返事は、この私に話し掛けられること自体光栄なのでから」「ごめんね、一夏がマヌケな返事して許してあげて」「……………くっ」

長くなりそうなので途中でさえぎっといたら……

「人がしゃべってるのに……………割り込むとは常識的にどうなのですか!？」

……………怒られた

「ごめんね」

「で誰なんだ？」

一夏は地雷踏むの好きだなあ

「知らない？セシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして入試首席の……」

「しつも「これ以上怒らせない方がいいぞ」……………なんでもない」

セシリアが何だかわからないって顔していた

「そういえば一夏、お前教官倒したんだって？限りなく事故に近かったらしいけど」

「ああ、突っ込んできたのをかわしたら壁に当たって動かなくなっ
た」

ふむふむ、運はいいみたいだな

「貴方も教官を倒したですって！！？私だけだと聞いていましたの
に」

「女子だけっておちじゃないのか？」

「なあ…！！？」

キーンコーンカーンコーン

「また来ますから、逃げ出さないでくださいね！」

おお、どごぞのチンピラ敬語バージョンの捨て台詞！

「だってさ、一夏」

「貴方もですわ！」

「なぜに？」

ゾワッ

ん？寒気が……

後ろを振り向くと……

「真央……何があったのか？教えてくれるよね？」

黒いオーラを纏った鈴花がいた

その日の放課後、寮に戻り鈴花に事情を話したあとにシャワーを浴び疲れたのですぐにねた

オマエ キル

(なんだ?)

オマエ ハ ワタダ

(ん？よくきこえない)

「真央！起きなさい！！」

びっくりして飛び起きると鈴花がほっぺを膨らましていた

「鈴花？どうしたのさ？」

「もう朝だよ、早く着替えてご飯食べよ」

(時間は17:30か…)

時間を確認したあと

制服に着替え、朝食を取りに行った

「ふぁー、まだねむい」

「昨日はやく寝たのに？まだ話したかったのに」

「ふぁぁ、ごめん」

あくびで涙目になった状態で謝った

「可愛い……」

誰だ！

男のNGワード言ったの!？

「はあ、俺はどこからどうみても男なのに……可愛いなんて言われるとは」

「言われたんだ、でも真央は可愛いよ」

女じゃなかったら飛びついてるのに！

「身長も162?だったよね?」

「違う!162.5?だ!」

まったく0.5?は大きな違いだというのに

ご飯をやく食べて教室について少したったらチャイムがなった

「これからクラス代表を決めてもらう、他薦でも構わん」

いつも通り織斑先生がしきる

ま、山田先生だと弄られる可能性あるもんね

「はい、織斑君を推薦します」

やっぱりね

「私もー」

「夏は予想していなかったらしく戸惑っていた

「じゃあ、俺は真央を推薦します!..!」

「この馬鹿野郎!」

「なんで俺の名前を出したんだ!

ひっそり隠れてその場凌ぎしようとしてたのに!

バン

「納得できませんわ!男がクラス代表だなんて屈辱を私に1年間味わえというんですか!?!だいたいこんな...!」

セシリアが続きを言おうとしたときに

俺はISを部分展開しGNソード?を突き付けた

「それ以上日本の悪口言うところで叩つ切るぞ!」

「真央落ち着け!それにイギリスだってたいしたお国自慢なんてないんだしさ、な?」

俺をなだめるように一夏がいうと

「貴方、私の祖国を侮辱しますの!？」

「お前が先に日本を見下し、過小評価した」

憎しみのこもった目で睨んだ

「決闘ですわ」

「いいぜ、しのこの言うよりわかりやすい」

そう一夏が言う

「一夏、きつとそれ俺の台詞だよ」

「真央すまん、でハンデはどれくらいつけければいいんだ？」

一夏の発言にクラスのみんなが笑う

「男が女より強かったのって昔の話だよ」

「今からでも謝ってハンデつけてもらいなよー」

屈辱的だな

そんな風にみられてるとは

「神崎さんはいい線いくと思いますわ、女性ですし」

「俺は男だ！！それに同じ条件で戦えば男の方が上だ！知識で劣ってもな」

「話は纏まったな、試合は次の月曜各自準備しておくこと」

「ふふふ」

「……」

余裕そうなセシリアを

一夏が真面目に見ている

そして

「真央を怒らせて、あの人ゆるせない！」

怒りを燃やす鈴花

「あの……鈴花、怒るのは俺で黙ってて！」「……はい」

ややこしい

さっきまでの怒りなんか吹っ飛んだよ

第4話「クラス代表」(後書き)

次回戦闘なのですが

描写がいまいちうまくないです

すいません

第5話「クラス代表決定戦」(前書き)

戦闘描写がうまくなくてすみません

第5話「クラス代表決定戦」

「あー、めんどくさいことになった」

ポンコツのファイティングポーズを見るたびそう思う

「こいつのパンチ痛んだよなあ・・・」

ドヤ顔してるこのくそ狸が憎い

ガゴォ

ポンコツの一撃で意識を一気に持っていかれた

バカ ナ

「真央！いつまで寝てるの！？今日はクラス代表決定戦なんでしょ？」

「うーん、あれ？鈴花
俺はどれくらい寝てた？」

「6日くらいかな？」

(そんなに寝てたのか、俺は)

急そつにベッドから起きて制服に着替えてると

コンコン

「祿ー、起きてるか？」

ー夏が部屋に来た

「ああ、起きてるぞ

モーニングコールご苦りよう様」

ちよつと舌がまわらなかった

恥ずかしいなあ

「今日はセシリアと対戦だからな、気合い入れてこうぜ」

「俺は軽く殺るよ」

(女だって言うのはNGだと教えなければいけないからね)

一夏の方を見たらちょっとひいていた

「殺るのはどうかと思っぞ、それにお前はIS起動時間どれくらいだ？」

「この前の合わせて9分くらい？」

「みじか！！」

ちよつとむつとしたら一夏が頬を赤らめたので脇腹にチョップをお見舞いした

そうしてると山田先生が駆け寄ってきた

「織斑君と神崎君、専用機が届きました！急いで準備してください」

それを聞いて少しワクワクしていた

（自分のISがどんな物なのか気になっていたんだよね）

一夏と少し早歩きで準備しにいった

「質素だな」

「ああ、セシリアのISの方が華やかだ」

俺のつぶやきに一夏が同意した

さつきから何故が一夏がこっちを見たらすぐ目をそらす

「一夏、さつきからなんだ？」

前に回り込んで、一夏の顔を見上げた

身長差で自然と少しだけ上目遣いになる

「いや、真央はISスーツも女子のなんだなって」

慌ててそういう一夏を後ろで物凄い形相で睨んでる筈がとても怖かったので頷くだけにしといた

バシンバシン

「織斑、岡山はやく準備しろ！」

鬼教官の一喝で一夏はすぐにISを装備した

「手慣れてるね、一夏」

ISを装備するのをポンコツに手伝ってもらいながらいった

「そうか？俺からしてみると、その狸の方が手慣れてると思うぞ」

確かにね

「まずは織斑とオルコットがやる、神崎は勝った方とだ」

一夏がピットを飛び出して、セシリアのブルーティーズと対面した

「何話してるのか全くわからない」

「それはお前が全世界の誰よりも、ISを使いこなせてないからだ」

織斑先生からの厳しい指摘に泣きそうになった

そうしてる間に戦闘が始まった

一夏はセシリアの攻撃を必死にかわしてる

オープンチャンネルを開いて、会話を聞く

『一か八か!』

一夏がセシリアとの距離を一気につめた

『無茶しますわね、ですがこれで終わりですわ!』

バシユ

セシリアはビットを飛ばして、一夏に攻撃している

(なんでセシリア本体は攻撃しないんだ?)

一つの疑問の答えを考えていると

『ビットを飛ばしている間、お前は制御に集中してそれ以外の行動がとれない』

一夏に答えを言われてしまった

どうでもよくなり

少し辺りを見回していたら

ドオオオオン

「まさか負けてないだろうな、一夏のやつ」

モニターを見ると

あら不思議、質素だった色合いが綺麗になっていた

「あれが白式のファーストシフトか」

感心していると一夏が動いた

『めんどろですわー!』

ドドドドオオン

『見える!』

ザイン

ガイイン

セシリアが放った攻撃を切り裂いた

一夏は一気に距離をつめた

『うおおおおおー！』

ビーーーーー

『勝者セシリア・オルコット』

『えっ？』

『なっ』

一夏とセシリアは何だかわかっていなさそうだった

俺もわかってない

「次、神崎いけ

それと織斑は私が負けた原因を教えてやる」

一夏はまだ不思議そうな顔していた

「真央、サバーニヤいつきまーす」

勢いよくピットを出た

ファーストシフトは完了してるから体にじっくりくる

『神崎さん、先程の方みたいに負けたくなかったらはやく降参することですわ』

ここまできて、意味のわからないことをいつてくるセシリアに呆れつつ

銃を構える

『どっちら、本気でやる気みたいですよわね』

『まあね、女つていった罪を思い知らせたいし』

『そうですか！』

ドシユンドシユン

そっついながら撃ってきた

『くっ！いきなりか』

何とかかわし続ける
いつまでもつかな

『そんな可愛い外見で男なんてありえませんわ』

そう言われた瞬間

殺意がMAXになった

『ライフルビット、シールドビット展開!』

ババシユン!

両手に銃を構えて、セシリアのロックを外した

『ロックが外れた?何をするつもりですの!?!』

何をする?

そんなの決まってるじゃないか

『乱れ撃つぜえ!』

ドドヒユン

バババババババ

『キャアアアアア!』

無数のビームがセシリアに直撃、シールドエネルギーを思いつ切り削った

隙をみて急上昇した

『くう!神崎さんはどっ!?!』

ドオオオン

『くっ、上!?!?』

セシリアが上を向いたがときすでにおそし

ミサイルの大群がセシリアを襲う

『こんなのなしですわ!』

敗者になる前の最後の言葉が聞けてよかった

ビーーーーー

『勝者 神崎真央』

「真央すごいな！代表候補生に勝って！」

ピットに戻ると一夏に頭をなでられながら褒められた

殺してやるつか、こいつ

「えっへん！本番に強いからな、俺は」

「それではクラス代表は神崎でいいな」

織斑先生が奥の通路から出てきた

「いえ、辞退します

一夏でお願いします」

「なんで!?!」

一夏が驚いた顔をしてるのを最近よくみるきがする

「わかった、クラス代表は織斑で決定だ

クラス副代表は神崎がやれ」

「はい」

副代表になったけど、代表じゃないから何の問題もない

「待ってくれ、なんで俺なんだ!?!」

織斑先生と俺はため息をついてから

「敗者は強者にしたがえ!?!」

一夏は不服そうな顔をしていたので
俺は笑顔になってしまった

「あ、んつうん！」

「一夏、何顔を赤くしてんの」

「すまん、ホントに」

なんとなく理由がわかった

「はやくなれてくれ」

一夏は努力すると頷いた

第5話「クラス代表決定戦」(後書き)

次の更新はすごく遅れると思います

テスト週間なので

第6話「ちよ、やめ」

「だある・・・」

俺は教室に向かって歩いていた
どうも、朝から嫌な予感がする

「んう・・・」

鈴花も朝からうなってるし
今日は危ない日かもしれない

「おほよー」

「おはよう、真央
てかおほよーって何だよ」

教室に入ると一夏が清々しい顔をしていた
すると近くにいた女子が話しかけてきた

「ねえ、知ってる？」

2組のクラス代表と副代表が変わったの」

どこからそんな情報を仕入れてきたのやら
女子の情報ネットワークは恐ろしい・・・

「代表は中国の代表候補生だって、副代表は普通の生徒」

代表候補生か・・・
セシリアに一夏は負けてるから・・・

「一夏、初戦惨敗はやめてくれよ」

「真央、お前も対抗戦でるんだからな！
絶対にサボるなよ！」

スツカリ忘れてたね
傍観者でいるつもりだったよ

「ねえ、真央」

鈴花が弱々しい顔で話しかけてきた
萌えるのですが・・・

「どうした？熱でもあるのか？」

「そうじゃなくて、私と真央のハッピーライフが今日崩れる気がするの」

いつからハッピーライフを僕達はおくっていたんだい？って言った
ら怒るよね

「まあまあ、気にしない気にしない」

「そうよ、ねっー夏！」

「鈴っちはかりいい思いさせないよ！」

・・・妙に聞き覚えがある声でした
鈴花はがっくりと肩を落としている

「そうか、真夏が副代表か」

「そだよー」

よろしくね、真央っち」

「鈴、何かツッコつけてんだ？似合わないぞ」

「なんてこと言うのあんたは！」

一夏の方がクラス代表か
見るからに元気ハツラツしてるね

「おおーっと！」

もうすぐホームルーム始まる、じゃねー真央っち」

「あっえっ？うん、またねー」

相変わらず元気だな、真夏は

鈴花は闘志を燃やしてるし、何があつたのやら

「ん？二人目の男子は来てないの？」

「俺だけど何か？」

「へ？」

不思議そうに顔を傾けた姿が小動物みたいに可愛いな、この子

「どっからどうみても姿、顔、声、全て女子じゃん」

「俺は男だ！」

クラス担任の無能な教師が男子の制服を用意してくれないんだよ！」

「鈴、こいつは女っていうのはNGだ！」

「夏の言うことに
頷いていると」

バキヤ！

「誰が無能だつて？」

「僕が無能で愚か者です、織斑先生」

「よろしい 鳳、お前も自分のクラスに戻れ！」

まさかあのタイミングで織斑先生がくるとは思ってもいなかった

昼

「真央っち！待ってたよー」

「真央は私とお昼食べるの！」

「なにをー！」

真夏と鈴花が唸りながら火花をちらしていた

学食にきたとたんこれが

一夏と代表さんはスムーズにいつているというのに
篤とセシリアの二人をのぞけば

「真央っち何たべる？」

「俺はラーメ」「日替わり定食食べよ、真央まっち」・・・カロリーか」

カロリーなんて気にしてたら好きなものを食べれないじゃないか

おぼんをもって席につく

「真央は少しくらいカロリー気にしたら？」

「そつだよ！カロリーは気にするべきだよ、真央っち」

「カロリー気にする必要性を感じられない」

バン！

後ろからいきなり大きな音がなり、3人ともびくつてなった

恐る恐るみてみると

「一夏、いい加減説明してもらえないか？」

「そうですね」

まさかこの人とつつつ付き合っていらっしやいますの？」

修羅場だ

他の男子からみれば羨ましいことこの上ない

だけど俺はそういうのないんだけどね

「真央っち、ここでも女扱いされてるの？」

「恐らくそうだと思う」

「神風学園で男子に告白されてたもんね、真央がうらやましいよ」

「鈴花さあん!？」

俺は女扱いされて辛いんだよ!!!?」

「真央、ち可愛いからねイケない方に目覚めちゃいそ」

何かおかしい気がするの俺のきのせいかな?

「対抗戦で真夏が勝ったら付き合ってね、真央、ち」

「ん? ああ、いいよ」

「ダメダメ! 絶対だめ!」

鈴花が慌てて否定してる

なぜなのでしょうかな

真夏が満足そうに教室に戻っていく

「真央、絶対勝ってね! 負けたら奴隷にするから」

「ええええええ!」

隣で器用にハシを使いながらラーメンを食べていたポンコツが吹いた

それくらい問題発言だった

第7話「同士の…」(前書き)

ねむい

目が疲れたみたい
しびしびする

第7話「同士よ!」

「「はあ」「

俺と一夏は同時にため息をはいた

「一夏も悩み事か?

放課後の訓練の成果出てないのか?」

「いや、鈴を怒らしたみたいでな、俺のことさけてるんだよ」

「代表さん怒らしたのか!? 命しらずだな、骨はどこにまけばいい?」

「勝手に殺すな!

で、真央はどうした?」

「実は……」

一夏に昨日の学食での一部始終を簡単に説明した

あれから鈴花が不機嫌でしかたないんだよね

「なるほど、俺達って似た者同士だな」

「そうだな」

空気をすって

お互いを見合ってから

「「同士よ！！！」」

男子ならではのハグというやつをしたら

刀を抜刀したような音と部分展開をしたような音が聞こえた

「一夏、貴様と言う奴は・・・死んでわびろ！」

「一夏さん！？

真央さんに何していらっしやいますの？オホホホ」

一夏は青ざめている

ブルーハワイがおまけ

悪い、一夏

俺の外見のせいで今日がお前の命日になりそうだ

「ち、違う！これは男同士の友情であってだな」

「「問^{ですわ}答無用！」」

教室が戦場になった

ギヤーギヤー

ガラッ

織斑先生登場

スタスタスタスタ

バシンバシンベキン！

「朝から元気だなあおまえら、グラウンド10周走って来るか？」

「千冬姉！俺だけ威力がちがう！」

バシン

「織斑先生とよべ」

うわぁ・・・

痛そうだな、俺はくらんないけどね

しかし一夏め、男同士か・・・

男扱いされたの何年ぶりだろ

顔がニヤけて元に戻らないよ

「一夏が神崎に抱き着いたんです！風紀を乱したんです！」

「そうですね！これは許しがたいことですわ」

それを聞いて千冬は真央の方を見た

真央はというと

満面の笑み

照れている

すごぶる上機嫌

鈴花に男扱いされたと報告中

「神崎は男だ、だが今まで女扱いされてきたから男扱いされてうれ
しいんだろう」

「真央まんなが男のはずがありません！」

（一夏と鈴花以外のクラス一同）

「神崎はこの先やっていけるのか？」

千冬の悩み事が一つ増えた
真央本人は嬉しさのあまり鈴花とじゃれていたのだった

対抗戦前夜、真央は今だに上機嫌だった

「えへへ〜」

「よかったねえ、真央〜」

上機嫌の真央を鈴花は後ろから抱き着きながら愛でていた

（やっぱり可愛いなあ、真央は私のもの〜）

鈴花も釣られて上機嫌になっていたが

コンコン

「はぁーい、どろどろー」

軽いノリで入室を許可した
ドアが開き、誰かが入ってきた

「あ、ごめん 出直してくる」

入ってきたのは2組の代表の鳳 鈴音だった

「別にいいよ、真央は壊れたままだし」

「そう？なら聞きたいことがあるの」

「なに？」

「真央ってホントに男なの？」

真央がピクツて動いた

真央の膝の上で寝ていたポンちゃんも避難していた

「どうも、こいつが男だと思えないのよね
可愛いし綺麗だし・・・」

「俺は男だ！」

真央は完全復活を遂げた

(こつこつという話をする元に戻っちゃうんだあ)

鈴花は少し残念そうに肩をすくめた

「で、どうしたらあんたらみたいに上手く・・・その・・・やっていけるのかな・・・って」

少し照れながら聞いてきた

普通ならいろいろアドバイスやら否定やらしたりするのだろう

しかし真央という男の娘は一味違う

「ん？ただ周りの人より多く一緒にいて、多く接して、より理解してるだけだよ？」

「ねえ、鈴花っていったっけ？こいつもしかして・・・」

「そうなの、これをどうしたらなおるのか知らない？」

「私もそれを1番知りたい」

真央の鈍感ぶりは織斑君並なんじゃないのかな？

「ん？何いつてるの？」

「なんでもない、まあ真央の言うことも一理あるわね・・・うん、ありがとう」

「どういたしまして」

「それではお二人さん、ごゆっくり」

それを聞いて鈴花は顔を赤くした
ゆでだこみたいに

「（、、）」

「鈴花、台詞で顔文字やめようか」

真央は鈴花が重症なのに気づき寝付くまでそばいた

（こんなんで明日大丈夫なのでしょうか・・・一夏何秒生き残れるかな？）

結構失礼なことを考えながら真央は眠りについた

第7話「同士のよー!」（後書き）

眠い・・・

文章できとうになったたかもしれません

ごめんなさい

第8話「対抗戦」(前書き)

読んでくれる人がいて嬉しいです！

いつもありがとうございます

第8話「対抗戦」

「ねえ、一夏……」

確か代表さん怒らしたんだよね？」

「……ああ……」

「痛そうだね、あれ」

一夏が頷く

モニターには鳳さんの甲龍と打鉄がうつっていた

(やっかいそうだな、クアンタを使うか……?)

ポンコツにめをむける

ポンコツはクアンタの待機状態、なぜ狸なのかは《あの人》に聞いてください

「真央、そろそろいくぞ援護よろしくな！」

「わかったよ、当たりにくるなよ」

(やっぱりサバーニャでいくしかないよね)

そしてピットをでたら
相手の副代表の坂井真夏さんが目を輝かせた

「真央っち！約束通り、今日真夏が勝ったら付き合ってね」

「「「！！！？？」」」

「そういうことは大きな声でいうな、あと公共の場でもな」

一夏と代表さんが驚いててさっきまでの討論が中断されたじゃんか
聞いてて面白かったのに

『試合開始！！』

開始の合図と同時にミサイルの砲門を全てあけ、急上昇した

「一夏！動くなよ」

「へっ？」

マヌケな返事をかえす一夏を無視し、代表さんと真夏をロック、ミ
サイル一斉射撃

「こんなのあり!?!」

「真央つちひどい!」

ミサイルの雨が降り注ぐ

真夏はミサイルを切って

代表さんは衝撃砲で打ち落としている

「ほらほら、頑張らないとやられちゃうよ」

ミサイルを撃ち続ける

ついでにビームも撃ちはじめる

「くう一夏!戦いなさいよ、それでも男?」

「・・・っ!」

剣を構えた一夏を見て

射撃をやめた

「いくぞ、鈴」

「返り討ちよ！」

「真央つち！正々堂々と勝負！」

「はぁ、かかってきんしゃい」

「夏は代表さんに切り掛かり、俺は上昇した

「さて、圧倒させてもらう」

ライフルを構えた瞬間、アリーナのバリアが破かれ俺はそのビームに直撃し、意識を失った

「真央つち！」

「真央！大丈夫か！？」

爆煙で敵も真央も見えない

一夏は無性にいらいらしていた

「くそ！」

痺れを切らして爆煙の中に突っ込もうとするが鈴に止められた

『危険よ、一夏！』

「でもあそこに！」

『戦闘中止！生徒は避難を織斑、鳳、坂井はすぐにピットにもどれ
！』

「真央を置いてにげれるか！」

爆煙がはれて、敵の姿が見えた
真央の姿も

「全身装甲！？」

『何よ、あいつ』

いかにもやばそうな感じするんだけど』

『真央っち!』

敵のしたには真央がたおれていた
IS強制解除された状態で

「くっ!」

『いいからピットに戻れ』

一夏が助けに向かおうとしたら、真央が頭だけ動かして一夏をみながらいった

『でもお前・・・』

『ポンコツがいずれくる』

そついうとポンコツが上から降ってきた

そして真央の前に着地し光はじめた

その光は上昇していき

ISクアンタを装備した真央がいた

「行くよ、仕返しだ」

そういうとビットを飛ばし、真央自身も敵に突っ込んだ

ビットで敵の注意をひく

すきあらばたたく

GNソード？で切り掛かるが図太い腕でふせがれた

「めんどろうだな・・・」

『手伝うぞー!』

「適当に動いててくれ

いいな、適当だぞ

てきとうにうごくなよ」

『えっ？ああ、うん?』

「夏はわかってないらしい

まあ普通はわかんないけどね

GNソード？にビットを連結させる

「トランザム！」

そういつと機体が赤くなる

「消えろ、ライザーソード！」

それはそれは図太いビームが出て、敵を飲み込む

「まーるかいてちゃん」

そついいながらビームをうごかして円を書いてちゃんとした

その場にいる全員が啞然としていた

そして試合は終了と同時に真央は魔王と言う称号を得た

そのよる

「ほっつつんと心配したんだからね!!!!」

「はい・・・すみません・・・」

只今絶賛お説教中です

鈴花は怒ると怖いです

一夏に『たすてけ』ってメールを送ったのに来ない
薄情者め

「聞いている!!!!?」

「はい、ごめんなさい」

「罰として、今度買い物に付き合ってください」

「わかりました」

(買い物だったらいつでも付き合ってください)

「よろしく」

それより一夏の様子が心配だ
さつきから隣から嫌な音がする
あいつはトラブルメーカーってやつなのか？

「はあ、怒り疲れちゃった・・・」

「することないし、もう寝るか？」

「うん」

そうしてベッドに入り
深い眠りについた

第8話「対抗戦」(後書き)

東さん登場!?

かもしれない

第9話「これはいつたい・・・?」

今は日曜の朝!

昨日の鈴花との買い物は鈴花が熱をだして中止
また今度になった
今は熱もさがってぐっすり寝ている

なぜなら・・・

現時刻4時

「はやく起きすぎた」

IS学園の周りというか島の周りを海にそって歩いている

目的地はクラス代表を決める前に冒険してみつけた
景色のいい場所だ

「もう少しなんだけど・・・これは一体なんなんだ?」

真央の目の前にはウサミミが地面からはえていた

無視するべきか

ツッコミいれるべきか
悩むな

「まあ少しくらいいじってもいいか」

好奇心に負け、耳をさわると上下左右にくすぐったそうに「く
思ったより面白く、夢中になっていたら

「そこで何してるのかなあ〜?」

「この耳いじると面白くて」

「おお!この耳がこんな反応するなんて」

そういえば俺は誰とはなしているんだろう

顔をあげると紫色の髪にウサミミをつけている人がいた

「ハロハロ、私は天才東さんだよー」

「あ、俺は神崎真央ですあと男です」

てか俺ら自己紹介いらさないじゃん

東さんにポンコツあずかつたんだし

「東さん、ここで何してるんですか」

「《さん》はいらないよ真央ちゃん、相変わらず可愛いねえ」

「全然うれしくない！」

いや、きつと褒めてくれてるんだらうけど
うれしくない

「この近くにラボ作ったの、おいでおいで歓迎するよ？」

「わかりました、ポンコツも見たいですし」

そういとラボにいった

まさか俺のお気に入り場所にあるとは・・・

「織斑先生・・・なにしてるんですか？」

ラボに入ったら意外な人物に会った

織斑先生は頭に手をあてて答えた

「ちよつとな、東はほつとくと何するかわからん」

「確かにそうですね」

「ひつどーい二人とも」

東さんはあっけらかんとした態度でいった

「あっポンコツ見てくださいよ、この前トランザム使ったんで」

「ほいほーい、まあトランザム使ったところでどうにかなるようなヤワじゃなただけどね」

「一応ですよ、大切な人達からもらったんですから」

そういうと織斑先生が何かを思い出したような顔をして
東さんは少し照れていた

「そういうことって口説こうたってそうはいかないよーだ」

「俺は親いないですから相手してくれる人が出来たのは東さん達のおかげですよ」

鈴花に会う前の話だ

「あの時の子供か・・・どつりであの時堂々としていたわけだ」

思い出してくれてありがたいです

「なぜ言わなかったんだ？」

「先生は日々苦勞してますから、そのうちでいいかなあって」

織斑先生はため息をはいたと同時にポンコツのメンテナンスが終わった

「ポンコツ元気だよー活性化されてるよーすごいですごい！さすが真央ちゃん」

「何がすごいですか？」

「さあな」

あら、冷たい

でもそこがいいという人もいる

世の中広い

「ふわああああ」

「んー？どーしたの？」

「寝不足かい？それはいけないねえ」

「休日は寝不足でいいが平日は授業があるからしっかり寝ておけよ」

「わかってますよ」

「あなたの出席簿はくらいたくない」

「部屋戻って寝ますよ」

「このラボってずっとここにあるんですか？」

「うん！そだよ」

「織斑先生が頭に手をあてている」

「頭痛いよね」

「悩み事おおくて」

「それじゃあ、また来ます」

「うん、ばいびー」

テンション高すぎでしょこの人・・・

「ねえ、ちーちゃん」

「断る」

「真央ちゃんのこと気をつけないといけないよ
ポンコツから真央ちゃんのデータみただけ・・・」

「わかってる、どこの親だろうな5歳の子供をしらない町に捨てたのは」

モニターを見つめる

真央ちゃんの特異性格

命の危険を感じると狂気にとりつかれる

10年前それを目の当たりにした

10年前通り魔に殺されそうになったとき

目の色が赤にかわり逆に通り魔を惨殺したのだ

そのときの真央は異常だった

「二度とああいうことはないようにしなきゃね」

「ああ、だからお前はここにきたんだろ」

「うん」

性格とはべつに

体のことも心配なんだよね

束と千冬は外に出る

「よし、寮に突撃インタビューだ！」

その言葉をきいて千冬は頭をかかえた

第10話「勘弁して・・・」(前書き)

少しずつ

まともになってきたかなあっと思う

第10話「勘弁して・・・」

「ふああ
」

部屋のベッドに潜り込む

日が当たらないのは少し残念だ

真央の意識が遠のく

モゾモゾ

(ん？誰か入ってきたなあポンコツか？)

布団に入ってきた何かは右腕に抱き着いた

(鈴花が寝ぼけてるのか？しかたない、このまま寝るか)

気にせずに眠りについた

30分後

「うう、苦しい」

目を開けると

腹の上にポンコツ、

右腕に束さん、

左腕に鈴花

「どうしてこうなった…」

一人でそうつぶやいていると束さんが起きた

「むにゃ、おー真央ちゃんおはよ」

「何してるんですか、あなたは」

挨拶をかわしてる状況じゃない

何？俺がハーレムみたいじゃん

他の人からみたら百合だと勘違いされるけど

「今日も可愛いねえ、ホントに女の子みたい」

「なにいつ」「ちゅ」「……………」

言葉を失った

いや、あまりの出来事に頭が対応しきれていない

「ほっぺにキスされたのがそんなに驚きだったのかなあ？」

東さんは笑顔でそういうこの人の行動はまったく予想ができない

俺の左腕にくっついてる鈴花もそうだけど…

「そういうことは軽くしない方がいいと思いますよ？」

「えへへ、つい勢いでやっちゃった」

ああ、この人はきっと法とかルールとか常識とか軽く凌駕するんだろっな

「真央ちゃん、よく寝れた？」

「まあ寝れてませんけど目はパッチリですよ、おかげさまで」

「どういたしまして」

胸を張ってそういつている東に何言っても無駄だと思つ真央であった
てかよくなっころがつてるのに胸を張れるよ
そこがかんしんする

「で、何しにきたんですか？」

「突撃インタビューしにきたんだけど、可愛い寝顔しながら寝てたからベッドに潜り込んだじゃった、誰もいなかったしいいじゃん」

「いますよ、俺の左に」

東さんは一回俺の左腕を覗き込んでからこっちを向いた

「人なんてどこにいるの？」

「そうでしたね、あなたはそうでした」

東さんは他人嫌いだったの忘れてたよ

まったくなおってないなどうにかできないのかなあ

ちなみに一夏、箒、織斑先生、俺はきちんと東さんの中で人として扱われている

なぜ俺が入ってるのかよく理由はわからないけど気分屋なのだろう

「うん…まお……？」

「おはよう、鈴花さん。」

「はやく起きてもらえるとう身動きできて大変嬉しい」

「地味に関節きめられてるから動けないんだよね
束さんは動く気ないみたいだし
ポンコツ寝てるし」

「うん、ごめんね」

「いやいいけど、体大丈夫？」

「大丈夫だよ、もうバッチリ！」

「それはなにより」

「鈴花が束さんを見て唾然としていた
そのあとこっちをむいた」

「どゆこと？」

「昔お世話になったお姉さんが勝手に入ってきた」

「真央まさかその人と……！！？」

「待つて！何もしてないよ、木刀構えて何する気！？」

鈴花の後ろにゼウスが見える

今日が命日か？

「ふふふ、エッチな真央は私好みに調教しなきゃいけないね」

目に光がやどつてない

どうしようもないので部屋のドアをぶち抜いて逃亡開始

「まだ死にたくない！

まだ死にたくない！」

「逃がさないよ〜真央」

50? 6・1の俺が本気で走るんだ

女子は追いつかないはず

「ハハハハ、ムダダヨ」

すぐ後ろから声が聞こえてくる
鈴花って足速かったんだ

「くそおお！」

「ん？一夏なにしてんの」

いつの間にか隣に一夏が全速力で走っていた
大量の冷や汗をかきながら

「いや、ちよつとなのほんさんが話してる途中で寝ちゃってな、
ひざ枕してたら箒にみつかって……」

「それ以上言うな、俺も似たようなもんだ」

後ろを少し見ると鈴花の隣に箒がいた
刀もって

「くそ、今何時！？」

「ええと7時だ！」

ちよつどいい時間だ
今日は死なずに済む

「一夏！そこ右！」

「おう」

一夏が右にまがる

そのあと箒もまがる

パアアンといい音になる

この時間は織斑先生が見回りしているのだよ

「協力されたらかなわんからな」

「何が？」

「へ？」

目の前に目に光をやどしてない鈴花がいた

今日が命日か！！？

「観念してね」

「まだ終わらん!!」

後ろを振り向くと織斑先生と先生に捕まった一夏と箒がいた

「貴様ら、どれだけ騒ぎを大きくすれば気が済むんだ……」

威圧がすごい

鈴花の方をみるとゆっくりり距離をつめている

……………今日が命日だ……………

織斑先生のありがたい指導+鈴花の折檻をつけたあと一夏の部屋で
非常用の逃亡ルートを考えていた

「非常口までいけばなんとかなる」

「そうだな、この際男子トイレにでも…」

「確実に入ってきてふくるだな」

どうしたもんか

頭まだ痛いよ

「お茶のむか？」

「うん、いただくよ」

さすが一夏だ

気が利くじゃないか

しかしこうなった原因はあの人だ、
束さんめ後で文句いつてやる

その後も一夏とお茶飲みながら逃亡ルート会議は続いた

第11話「転入生×2」(前書き)

なんとなく
ネタができてきたから
いったんもどそうかな

第11話「転入生×2」

「今日は転入生を紹介します、入ってきてください」

副担の山田先生がそういうと二人教室に入ってきた

一人は金髪

もう一人は銀髪

(金ちゃんと銀ちゃんって呼ぼうかな?)

まあ、そんなことしたら殺されるだろうけど

特にあの銀髪の子に

「えっと、シャルル・デュノアです。」

この国にきたばかりで不慣れなこともあると思いますがよろしくお
願います」

なんて丁寧な挨拶だ

俺だったら「人、()」で終わらしてる

「きっ」

これはまさか……………

「きゃあああああー!!」

勘弁してほしい
頭に響く〜

「男子! 二人目の男子!」

「しかもウチのクラス!」

「美形! 守ってあげたくなる系の!」

「地球に生まれてよかった〜」

女子って元気だね

それに比べて殺気だってるよ、銀髪の転入生

「挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

「教官はよせ、今は先生だ」

「了解しました」

いかにも軍人って感じだ

しかもあの眼帯のしたが気になる

まさかギ スとか写 眼とか？
あるわけないか

銀髪転入生は正面を向いた

「ラウラ・ボーデウ、イツヒだ」

「以上か？」

「以上だ」

一夏だ

一夏の自己紹介だよ

一夏がもうひとりそこにいるよ！

「っ！ 貴様が…」

ラウラは一夏の前に歩み寄ると

パシン！

そのままビンタした

「なっ！」

「私は認めない、貴様があの人の弟であるなど認めるものか」

クラス全体がシーンとする

笑いをこらえる

あっだめだ

「ぶふっ！」

パアアン

「何がおかしいんだ？神崎」

「すみません、シーンとしてるのが苦手です」

口が釣り上がってもとに戻らない！

ラウラがこっち睨んでるよ

ウサミミもちろちろ見えるし

……ん？……

「あの……織斑先生……さっきから見えるはずないものが……」

「しらんな、私には見えない」

なるほど

無視を決め込むつもりですか

ウサミミの動きが何かしでかそうとしてるんですが

「はあ、今日は2組と合同で実習を行う！ 着替えてアリーナに集合だ、解散！」

みんなぞろぞろと出ていく

一夏はシャルルを連れて更衣室に向かったようだ
苦労するぞ

「神崎、あいつの相手してやれ」

「了解です」

やっぱり危険だよな

兎の放し飼いは

中庭を歩いているとウサミミをつけた女性を発見
東さんだ

こっちに気づくなり笑顔で駆け寄ってきた

「真央ちゃん授業は？
サボりかな？」

「あなたの相手をしると鬼教官からの御達示で」

「おー、ちょうどいい！
篝ちゃんの様子見に行こ」

「えっ？ ちょっと」

東さんに手を引かれながら走る
織斑先生に殺されるかもしれないな

「で、ここまで来たということか」

「すみません」

「ちーちゃん久しぶりー、元気してた？」

束さんは命知らずか？

ホントに尊敬するよ、いろんな意味で

「まあいい、邪魔はするなよ。神崎は束のそばにいてやれ」

「わかりました」

「はいはい　真央ちゃんはぶかれちゃったね　残念だった
ね　束さんがついてるよ！」

まあ笑顔の束さんを見ててもいいかな

鈴花に折檻されると思うけど

少し授業の様子をみる

山田先生が代表さんとセシリアに圧勝したり

一夏が箒をお姫様抱っこしたり、箒が一夏をお昼に誘ったり

東さんはテンション最高潮だった

「いっくんと篝ちゃんいい感じじゃん！ 安心安心」

「周りがどうであるか、楽しみだねえ」

俺は片方の口の端を釣り上げる
ホントに……どうしてこうなった……

現在、東さんの膝の上

周りからは「姉妹？」「従姉妹？」「禁断の……」とか聞こえてくる
が東さんは気にしていない

そして鈴花と真夏の視線が痛い
視線で殺されそうなくらい

「あの、東さん……そろそろどいていいですか？」

「……………？」

「なんで「真央は私の膝の上に座るのが当たり前でしょ？」みたいな顔してるんですか！？」

何言っても無駄みたいだ

束さんは真面目な顔をしてグループわけされたある集団を見つめる

「束さん、鈴花が気になるんですか？」

「相変わらず凄いね、人が見てる物がわかるなんて」

昔からなんとなくわかるんだよね

束さんは微笑みながらこっちを向いた

「鈴花って子ってさ……………」

「わかってますよ、初めてあったその日から」

やっぱりそっか、と束さんは言つと簿と一夏の観察に戻った

テンションが最高値の束さんははちゃめちゃだった

第11話「転入生×2」(後書き)

ネルネルネルネ

第12話「ば、ばかな！」（前書き）

なんかわりとノリと勢いでいけ…るのかな？

第12話「ば、ばかな！」

束のラボ

「もうすぐ個人トーナメントがあるのに、ここでのんびりしてていいの〜?」

「いいんですよ、どうせサーバーニヤで圧倒するだけですし」

「真央が迷惑かけないか見張ってなきゃいけないので」

俺と鈴花が束さんの問いに答える

なぜ鈴花がここにいいのかという点、この前の放課後

『ごーん!』

『きゃっ、誰ですか?』

『天才束さんだよ、ちよっときてもらえる?』

『えっ? ちよ、ちよっと待ってください!』

てな感じで無理矢理つれてこられてから
俺がいくときについてくるようになった

「あーあ、一夏の鈍感はどうしたらなおるのやら」

「あれは生れつきだからねえ」

「いつまで女の子と同室だったことに気づくんだか」

東さんとハモった

東さんは満足げに笑った

(ウサミミって東さんの感情で動きが変わるんだよなあ、まあ表面
上だろうけど)

「まあ知ってると思うけどね」

東さんの調整しているIS紅椿というらしい

「鈴ちゃん、聞きたいことがあるんだあ」

「なんですか?」

「鈴ちゃんの両親ってさ、君が生まれてすぐ死んだんだよね?」

「……………はい」

鈴花は寂しそうな顔をして答えた

束さんの質問の意図がわからない

「だから形見のペンダントに大好きなあの人の写真と両親の写真をいれて大事に持ってるのか」

「えっ!!!??」

鈴花の顔が赤くなった

トマトみたい

鈴花は胸元をギュツと握りしめていた

「な、な、なんでしってるんですか!!!??」

「いやあ、勘で言ってみたらまさか当たるとはねえ」 流石天才束さんだ」

束さんは胸を張って威張る

鈴花は自分で墓穴をほったことに後悔してますって感じのオーラをだしていた

「まあまあ鈴花、別にばれてもいいじゃないか
諦めなきゃなんとかなるぞ、恋を実らせるよ」

「真央ちゃんもいつくんほどじゃないけど」

「でもこれはこれで悲しいですよ、束さん」

鈴花がさらに落ち込んだ
束さんは苦笑いしながら俺が一生懸命、鈴花を慰めているのを見て
いた

「もうすぐいつくん達の放課後訓練が終わる頃だよ」と

「箒に会いに行くんですか？」

「昨日、部屋にお邪魔したよ」

箒も苦労してるなって思った瞬間だった

壁に書いてある奇妙な数字をみつけた

「なにこれ？」

「落書きかな？」

「1が4、6が2、5が5………えひの？」

「真央、どうやったらそうなるの？」

「携帯で1を4回、6を2回、5を5回うつた」

そういつと馬鹿を見る目で見られた

案外、当たってるかもしれないのに

そのあと一夏を誘って夕食を食べに食堂へいった

「ん？ なんだこれ？」

「どしたの？一夏」

一夏が指差したところをみると

146255

またか、しつこいな
誰だよ

「えひの？」

「どうやってたらそうなのよ」

「そうですね、どうみてもこれは落書きかなにかです」

「でもいつたいたれが……」

「ほっとけ、鉄拳制裁されるのは犯人だ」

順に一夏、鈴、セシリア、シャルル、箒

さすが一夏だ、わかってらっしゃる

「真央、今日も一緒に寝てくれるよね？」

「「「「！！！？」「」「」

一斉に視線が俺に集まったよ
シャルルはなんか顔赤いし

「同じ部屋だし、必然的に一緒に寝てることになるじゃん」

「「「「はぁ……………」」」」

あれ？　ため息つかれたよなんで？

そしてシャルルの顔が血より赤いのは気のせいかな

「そんなことより、一夏は誰と組むんだ？」

「俺はシャルルとだ、真央はだれとだ？」

「俺は束さんってのは冗談で鈴花だね」

「……………一瞬冗談に聞こえなかったんだが……………」

束さんは頼んでも出てくれないよ

例え幕が頼んでも出て……………くれるね、きつと

「私でいいの？」

「へ？」

「鳳さんやセシリアじゃなくて？」

「え？　あの二人は確か今日、ラウラにうぐ……………」

最後まで言う前に二人に口を押さえられた

ついでに「余計な事いうな！」って目で見られた

「まったく！ 油断も隙もあつたもんじゃない」

「そうですね！ 真央さんも少しは自重すべきです！」

「でも最近、俺が男だつてこと忘れられてる気がするんだ」

みんな驚いた顔している
意外とおもしろい

「えっ？ あんた男だつたの？」

「女性の制服だったので、てっきり……………」

「すまん、神崎……………女だと思っていた」

ひどい奴らだ

コンチクショー！

あにくそ教官がはやく男子の制服を……………！

「神崎、ちょっといいか」

「（びくっ！）は、はい」

いつの間にか

後ろに織斑先生がいた

「ほら、男子の制服だ

作成ミスで長学ランみたいな感じになったが気にするな」

俺は今、織斑先生が女神様に見えるよ！

「ありがとうございます！ 明日からは男ってみられるヤホーイ」

「つくったのは束だがな」

最後は奇妙なことが聞こえたけど気にしない
嫌な予感がするけど気にしない

明日が楽しみだなあ

第13話「威嚇(?)」なのでしょっか」(前書き)

カルボナーラさんに意見を聞いたので
それを出来る限り実行していきたいです

第13話「威嚇(?)なのでしょっか」

こんにちは、真央です

今、訓練機を借りて鈴花と一緒に訓練しにアリーナに来てます

鈴花は飲み込み早くて助かります

そこら辺の生徒より普通に強くなりました

「鈴花は優秀だな」

「そんなことないよ、真央の教え方が上手いんだよ」

照れ臭そうに頬を染めていた

(普通の反応か……………)

「真央は違う反応がよかった？」

なんで考えてる事がわかるんでしょうね…………

そういえば一夏も「考えてる事がつつぬけなんだよな」なんて言っ

てたな
他人事じゃなくなった

「ねえ、真央……………ホントに私でいいの？」

鈴花が不安そうな顔で聞いてきた

「当たり前だろ、セシリアや鈴は一夏がラウラに襲われても動こうとしてなかったからな、きつと見捨てられる」

「……………」

鈴花に呆れられた目で見られてるけど無視して話を続ける

「そこで面倒見がいい鈴花と組めば、俺のサポートしてくれると思
った」

「それだけ？」

「正直言うと、鈴花以外の人とは合わない気がするから」

そういつと鈴花は「まったく」といいながら笑顔になった

（ん？ あそこにいるのは鈴とセシリア？）

アリーナの中央付近にセシリアと鈴の姿が見えたので休憩もかねて、観客席から観察しようとその場から離れようとした

しかし、セシリア達の少し離れたところにいる銀髪の少女の冷たい目をみた瞬間
嫌な予感がした

俺がオープン・チャンネルを開くと同時にラウラはISを展開し、
大型レールカノン発射体勢にしていた

「セシリアと鈴、避ける！」

そういうとセシリアと鈴が緊急回避し、二人の間にレールカノンが
着弾した

二人は砲弾が飛んできた先を見る

「ラウラ・ボーデウ、ィツヒ……………」

セシリアの表情が苦くこわばる

「……………どういつつもり？　いきなりぶつ放すなんていい度胸し
てるじゃない」

鈴は双天牙月を肩に預けながら、衝撃砲を準戦闘状態にシフトさせていた

ラウラは二人のISを見つめていた

「……………ふん、データで見た時の方がまだ強そうであったな」

(まずいな……………セシリアと鈴完全に挑発に乗ってるよ)

「鈴花、訓練機を返してから観客席の方に移動するんだ」

「ここは直に戦闘になる」

鈴花に危険な目にあわすことはできない

俺の考えていることがわかったのか

鈴花は言う事に従って行動開始した

ポンコツは東さんにあずけっぱなしなので

俺はサバーニヤを展開させ、セシリアと鈴に近づいた

「二人とも落ち着け、挑発にのってどうする!？」

「今なんて言った? 私には『どうぞ好きだけ殴ってください』って聞こえたけど」

「この場にいない人の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですね。二度と軽口叩けないようにします!」

落ち着かせようとするがもう手遅れだったみたいで、二人ともやる気満々

「とつとと来い」

「上等！」

この戦いは止められそうにないです
仕方ないからセシリア達に加勢する

えっ？ なんてかって？

ラウラが一夏を馬鹿にしたから

「セシリア、鈴！ 油断するなよ」

「ふん、いくら増えようがこの私の敵ではない」

自信満々で言い切るラウラを少し尊敬したり……

セシリア達は怒り狂ってます、はい

「弱い犬はよく吠える」

「そうだな、その雑魚みたいに」

「なんですってえ！」

しまった、自分の発言でさらにセシリア達を怒らせてしまった

「真央、あんたは下がってて!」

「えっ、でも!」

「ラウラは私達がやります! いいえやらなければいけないのですわ!」

二人の威圧感に負けて、下がって見守る

(一夏あゝ、はやく来てえ)

そう願うばかりだった

ラウラのAIC

頭に血が上りすぎた二人の戦闘

どうみてもラウラが優勢だった

二人の攻撃はAICで防がれ、ダメージを負わせる事ができていない
参加しようとしても「こないで!」と言われる

いい方法はないかと考えていると

ドガアアアアン

「!?!」

セシリア達の方を向く

二人のISは装甲がところどころ無くなっていた

爆煙の中心部に目をやる

そこには無傷のラウラがいた

ラウラはワイヤーブレードを飛ばし、二人を拘束

一方的な暴虐が始まった

ラウラは二人に拳をたたきこむ

エネルギーバリアはデッドゾーンに到達したが攻撃の手を緩めない

(これ以上は!)

一気に飛び出した瞬間、アリーナのバリアを破って一夏が入ってきた
少し遅れてシャルルも来た

「その手を放せ!」

一夏が切り掛かるがAICで止められる

「感情に一直線、ただの愚図だな」

「YOU TOO」

隙をみてシャルルと乱射

一夏の拘束を解かせた

「一夏、セシリア達を！」

「おう」

しかしラウラはレールカノンを発射態勢にしていた

「消えろ、雑魚」

無慈悲にレールカノンを発射

「やらせない！」

ラウラと一夏の間、シールドビットを展開、砲弾を防ぐがラウラがすぐそこまで迫っていた

「ならお前が先だ！」

「僕を忘れてない!？」

シャルルがショットガンを連射し、ラウラは飛びのいた
しかしすぐに瞬時加速をする体勢をとった
今まさに飛び出そうとする瞬間、俺の前に影がわり込む

ガキーン

金属がぶつかり合う音になる
ラウラはその影に加速を中断させられる

「千冬姉!？」

一夏の声がよく聞こえた

そこにはIS用の近接ブレードを持った織斑先生がいた

「模擬戦をやるのは構わないがアリーナのバリアを破壊する事態に
なられては黙認できない」

「すみません」

「なぜ神崎が謝る？」

「止めようとしたんですけど……ダメでした」

セシリア達、聞く耳持ちませんって感じだったし

「構わん。だがこの決着は学年別トーナメントでつける、いいな」

「「「はい」「」」」

「それでは解散！」

その後、保健室にいつてセシリア達の様子をみたのだが
予想以上に元気だった

部屋に戻ると鈴花が俺の好物のミルクティーをちようどいれおわっ
ていた

「今日は大変だったね、セシリアと鳳さん大丈夫だった？」

そっついいながらコップを差し出してくる

それを受けとって一口飲んだ

「トーナメントには出れないけど、元気だったよ」

「そっか、よかった」

鈴花は優しいなあとか思いながら
ミルクティーを飲む

(うます！)

落ち着きますなあ
鈴花さん腕を上げたね！

第13話「威嚇(?)」なのでしょっか」(後書き)

カルボナーラさんが書いてる小説
馬鹿の集いしIS学園

面白いから読んでみてね

第14話「激突」(前書き)

文才がほしいです
あとひらめき

第14話「激突」

「一夏はいいなあ」

「どうしたんだ？ いきなり」

「俺もラウラとやりたかった」

「そのうちやれるよ、神崎君」

現在、アリーナの更衣室

俺と一夏とシャルルと鈴花でモニターのトーナメント表を見ていた

「でもいいよね、1番最初って」

「なんで？」

「無駄に緊張しないからさ」

(シャルルはポジティブだなあ)

今のシャルルの言葉で一夏のやる気スイッチがオンになったみたいだ

「ふう……………」

鈴花が一息ついてるのを見て、緊張してるのがわかる

「鈴花、大丈夫だよ」

「えっ！ な、なにが？」

あー、思ったより緊張してた

続きを言おうとしたら

「真央ちゃんが守ってくれるから大丈夫だよ
絶対勝てるよ」

……………東さんに言われてしまった……………

「あの……………」

声をかけようとしたら

指を口に当てて『しーっ』ってしてる

「真央ちゃんと鈴ちゃんにいくくん、言ってなかったと思うけど…
……………私が見えてるのは君達だけだよ」

「……………はい？」

シャルルには見えてないってこと？

……まさかね……

「君達のISに私の姿を君達に見せてるだけだよー、東さんはラボにいるよん」

信じ難いけど、この人なら出来るよね……

「3人とも誰と話してるの？」

「さ、作戦会議だよ」

「お、おう！ セシリア達にも意見きいてたんだ！」

「か、勝ってね！ デュノア君」

俺、一夏、鈴花の順番

ホントに見えてないとは……

「だから言ったじゃん、あっ！ 今までのも全部そうだからね
ラボにいるときの私は本物」

軽く無視して話をそらす

「一夏、そろそろだろ？ 行かなくていいの？」

「ああ、ホントだ！
真央サンキュー、シャルルいこうぜ」

「うん、頑張ろうね！」

二人とも気合い充分だね
やる気があるのはいいことだ

「真央、じじくさいよ」

「すみません……」

アリーナ中央付近

ラウラと篤、一夏とシャルルが向かい合っているのをモニターで見る
ホントは観客席でみたいけど、この試合のあとに俺達の試合なんだ
よね

……3……2……1……

『……』

開始の合図とともに一夏がラウラに切り掛かるがA I Cで止められてしまう

「開始と共に突進とはよくやる」

「そりゃどうも」

一夏はラウラの上から目線の発言を軽く流せず

レールカノンを目の前に突き付けられたがシャルルの援護で難を逃れた

「サンキュー、シャルル」

「一気にいくよ!」

シャルルはマシンガンを出して撃つ

「私を忘れてもらっては困る!」

箒が切り掛かるがシャルルがよけ、一夏が受け止める

シャルルは箒に狙いを定めたが、ラウラが箒を助ける

「な、うくっ!」

「!?!?」

助けたのではなく、邪魔だったのでどかしたって感じだ

「夏にラウラが格闘をしている間にシャルルは箒を倒しにかかった

「夏が相手じゃなくてごめんね！」

「な、馬鹿にするな！」

「夏達の連携はすごい

でもさつきから束さんがとなりで『あいつ箒ちゃんになんてことを…』って言ってるのは気のせいだな

ちらつと鈴花の方を見ると、ドツと冷や汗を書いていた

モニターに目線を戻すと箒はもうやられていた

代表候補生相手だったからしかたないか

「夏、お待たせ！」

「箒は？」

「お休み中」

「さすがだな」

「終わらせるよ！」

「ああ！」

シャルルがマシンガンを手接近しながら撃ちつつけるがラウラお得意のAICに捕まった

「くっ！」

「世代の違いを教えてやろう」

ラウラはプラズマ刃を出した瞬間、一夏が切り掛かる

「うおおお！」

「くっ！」

だがラウラによけられた

しかし一夏は何か悟ったような顔をしてる

もう一度、切り掛かる

AICで止められる

シャルルが援護し、レールカノンを破壊

「意識しないと物を止められないんだよね」

束さんが説明してくれた

一夏はそれに気づいたのか

「くっ、小癩な！」

ラウラの顔がこわばる

ワイヤーブレードを飛ばし、一夏とシャルルに攻撃し、隙をついてシャルルに切り掛かるうとするところを

一夏がシャルルが捨てておいたアサルトライフルをラウラに向けて撃って阻止した

「くっ！ 死にぞこないがああ！」

ワイヤーブレードを飛ばし、一夏はそれに直撃

そのすきにシャルルは瞬時加速でラウラの懐に入り、シールドピアースを叩き込む

ズガン

「ぐう！」

エネルギーが大幅に削られる

シャルルは攻撃の手を緩めない

ズガンズガン

「ぐあああ」

『 汝、自信の变革を求めるか、力を求めるか 』

ラウラの頭に流れてくる

(よこせ！ 比類なき最強の力を！！)

次の瞬間、ラウラは黒い何かに包まれた

「！！！！？」

なんだ？

ラウラなのか、あれは？

他の人も驚いてるが一夏の様子が変わった

雪片を構えたが相手の鋭い剣さばきでエネルギーがつかってしまった

「くっ！！ うおおお！！」

「まで！！ 一夏落ち着け」

一夏が敵に生身で突っ込もうとするのを箒が止めた

「放せ！ あいつ許さねえぶっ飛ばしてやる！！」

バシン

箒が一夏をはたいた

「落ち着け！ いったいなんだと言っただ」

少し落ち着いていたのか

一夏は口を開く

「あれは千冬姉の技だ」

「なっ!?!」

「あいつは俺が倒す」

「エネルギーも無しにどうするつもりだ!」

確かにIS無しでISに勝つなんて絶望的だ
だけど……………

「ないなら持つてくればいいよ」

「えっ?」

「でもこれだけは約束して、絶対勝つって」

「これで決められなきゃ男じゃない!」

「じゃあ負けたら、明日から女子の制服着てね」

「うっ…い、いいぜ!」

一夏はこういう賭けが好きなんじゃないかって思いはじめた

そうしてると一夏の右腕と雪片が現れた

一夏は雪片を構えた

相手が切り掛かってくるのを流して切る

ISは崩れさり、中から出てきたラウラを受け止めた

「ふう、一応一見落着？」

「このあとが大変だよ〜特にドイツ」

束さんのあまりにも飄々とした態度で言うので

『でしょうね』と鈴花が苦笑い

結局、学年別トーナメントは一回戦だけやることになり
一夏達と一戦交えることはなかった

次の日

「ええーっと、転校生(?)を紹介します」

教室に女子の制服を着たシャルルが入ってきた

(へー、女だってバラすんだ)

「シャルロット・デュノアです。皆さん改めてよろしくお願ひします」

クラスがざわつく

一夏も驚いてる

でも違和感が………知ってたなコイツ

「昨日、大浴場使ったの男子だよね？」

危険な言葉が聞こえた

なに？

一緒に入ったの？ 一夏君

すると壁を突き破って鈴登場

衝撃砲発射

「ああ俺は死んだな

きつと明日の朝刊に哀れ高校一年生、同級生に殺される。現場にいた生徒は悲しみの声を漏らす

『ミンチでした』『トマトケチャップでした』『地面に落ちた柿で

した』『破裂した缶コーラでした』『あるいわペ○じ』っつね

なに凄い勢いでしゃべってるんだろう

そんな余裕があればよけるよ

てか最後一緒じゃない？

しかしラウラが割り込んでAICで衝撃砲を無効にした

「さ、サンキューラウラ」

ラウラは一夏の胸元を掴み自身によせてキスをした

「くくくく?!?!?!」「くくくく」

クラスの皆が驚いてる

実際俺も驚いてる

「お前は私の嫁にする！異論は認めん！」

「くくくくええええええええええ!!」「くくくく」

このあと一波乱が来て一夏は命の危険にさらされたのは言うまでも
ない

第14話「激突」(後書き)

根気強く、これからも書いていきます！

第15話「なぜこんな……」「by 夏（前書き）

今回は一夏メインです

原作とあまりかわらなくてつまんないかもしれませんが……

第15話「なぜこんな……」「by一夏

一夏Side

チュンチュン

「ん……」

(もう少し……)

窓の外からは眩しい光が注ぐ

一夏はまどろみ…至福の時間を過ごしていた

ムニ

(ん？ こんなスベスベして柔らかい物なんて俺のベッドにあったか？)

『まあいいか』と思考を捨て、至福の時間を堪能しようとする

ムニムニ

「んっ」

(まてまて、今の声は俺のじゃないぞ。他の男の声でもない……てか男がいたら逆に怖いわ!)

そして次の瞬間、俺の脳裏に予感めいたものが通る

シーツを思いっきりめくる

「ラウラ!」

そこには何も包み隠さずさらけ出している………要するに全裸のラウラがいた

「ん、なんだもう朝か」

眠そうに目を擦る姿が可愛い………いかんいかん、そうじゃなくて

「服着ろ! 服!」

「何おかしなことを言うんだ。夫婦とは包み隠さないものだと聞いたぞ」

「ああ、それはそうかもしれない………じゃなくて、頼むから服着ろ」

まったく目のやり場に困る

ラウラはシーツを体に巻いた。どうやら服は持ってきてないらしい

「嫁よ、どうした？ やっぱり私の裸を見たかったのか」

「ち、違う！ てなんで嫁なんだ？」

普通、婿とかじゃないのか？

「日本では、気に入った相手のことを嫁すると言っのだから？」

「誰だ、お前に間違った知識を吹き込んでる奴は」

そついいながら指を指したら、腕をとられ押し倒される

「ぬるいな、寝技の訓練が必要なようだ」

「軍人には普通かないません」

ラウラは『そうか』といいながら目をつぶって顔を近づけてくる

（ま、まずい！）

ガチャ

扉が開く音がした

「一夏、朝の稽古の時間だ……ぞ……」

「いつまで寝てんのよ、一……」

「一夏さん、朝ご飯を一緒にしませ……」

箒、鈴、セシリアが入ってきた
目の前の現状に目を丸くした

一夏の上にラウラ

ラウラがキスしようとしていて、それらしい抵抗していない

この前のできごと

「一夏！ この軟弱者！」

「ハハ、よし殺そう」

「フフフフ」

箒は竹刀で、鈴は双天牙月で、セシリアはインターセプターで切り掛かる

「勝手に人の嫁を殺されては困る」

ラウラのAICで全て止められる

痛い……三人の視線が

「しかし不躰な奴らだな、夫婦の寝室に無断で入るなど」

「……夫婦!?」

ラウラの言葉でさらに視線が鋭くなる

だが、セシリアが何かに気づいたかのような表情になる

「ラウラさん、眼帯はどうしたのですか？」

「ん？ あっほんとだ、眼帯外したのか？」

セシリアの言う通り、ラウラは眼帯をしていなく、金色の瞳が姿を現していた

「う、うむ。一夏が綺麗だと言うからな……」

照れ臭そうに言うラウラが愛らしく感じだ

そんなやり取りを見ていて面白くないのが、その3人なのである

「「「チエ」」」

「ちえ？」

とてつもなく嫌な予感がする……

「「「チエストオオ！」」」

「おわああ！」

ズドン

3人はA I Cを力づくで破り、一つのベッドを仲良く4当分する

「一夏！ 貴様と言う奴は、根性を叩き治してやる」

「覚悟シテネ、イチカ」

「悪い人はしつけないといけませんわね……」

怖いです

とくに鈴なんか瞳に光やどしてないし

「人の嫁に手を出すとは、不躰な」

こうして早朝のドタバタ騒ぎは織斑先生が来るまで続いた

朝の時点で一夏の脳細胞は3万個死んだ

「いててて、千冬姉少しは手加減してもいいのに……」

殴られた頭をさすりながら篝とラウラ、鈴、セシリアと食堂に向か
つてると

「おーい、一夏あー！」

後ろから誰かに呼ばれたので振り向くと真央が駆け足で近づいていた

「どうしたんだ？ いったい」

「ほい」

真央にオロ○ミンCを渡された

「サンキュー、でもどうしてだ？」

「朝から命の駆け引きをして、忙しいあなたにオロ○ミンCプレゼ

ント」

笑顔でそういうと真央は教室に向かっていった

(男子の制服着てても、ときどき男だって忘れる時があるんだよなあ…… ホントに男なのか?)

「一夏、何鼻のしたのばしている」

「私という存在がいるのに、他の人に気を取られるなんて」

「お前は私の嫁だ、私だけ見てろ」

廊下でなんてこというんだ、その自信はどこから？

「一夏はああ言うロリな感じが好きなの？ だとしたら……よし
」！」

鈴が目を輝かせてる

いや、どっちかというと大人な感じが好きだな

手に持つてるオロ○ミンCを開けて飲む

(なんか今日も頑張れる気がしてきたぞ)

オロ○ミンCをくれた真央に感謝するー夏であった

第15話「なぜこんな……」「by 夏（後書き）

読んでいただきありがとうございます

引き続き、ポチポチやっていきます

第16話「しっかりして！」by 鈴花（前書き）

更新に時間がかかった上に短くてすいません

第16話「しっかりして！」by鈴花

おはようございます、天草鈴花です。

毎日、真央がお世話になってます。

時刻は7時50分

すぐに食堂に行って、朝食をとってから、教室にむかわなければならぬ時間帯なのですが

真央は今……………

「すう……………すう……………」

幸せそうに寝ています

起こしたら悪いので寝かせておいて先に行くことに

「あっそうだ、記念に」

パシヤ

「真央の寝顔GET！」

真央は『んんんっ』とかいいながら寝返りをうつっていた。

「先に行ってるね、真央」

聞こえてないだろうけど、一応そういっておく。

「「鈴つちっ!!!」」

「キヤ!」

食堂に着くと、ピンク色のセミロングぐらいの髪の毛をおろしていて、黄色の瞳をした真夏と動物の着ぐるみみたいなダボダボの服を着た本音ちゃんが抱き着いてきた。

最近、このメンバーでいることが多い

私も真夏も本音ちゃんも（おそらく）真央といたいのだが、真央に放浪癖があるため気付いたら居ないってパターンが多い

「真央つちの冒険にはついていけないよね」

「そうなの、授業が終わってすぐ真央の席みてもいないの」

「確かにいないねえ、すごい速さでいなくなるよね!」

朝食をとりながら3人で話していると、織斑君がラウラさんと篝さんをつれて食堂にきていた

手には真央が朝いつも飲んでるオロ○ミンCが握られていて、顔が少し赤かった。

「まったく、私の嫁ともあるうものが他の女にうつつをぬかすとは」

「一夏め、真央の笑顔みて鼻の下をのばしおって……私だって……」

二人は何か不服そうだったが気になることを言っていた。

（真央の笑顔？　じゃあオロ○ミンCは真央が織斑君にあげたのかな？）

「篝さん、真央がどうかしたの？」

「一夏の奴が、真央の笑顔をみて鼻の下をのばしているのだ！」

「なっ！　ち、違う！」

不機嫌そうに織斑君を睨みながら篝さんはそういうと、織斑君が慌てて否定した

「そ、そもそもあいつは男だぞ！　そんな男に可愛いなんて思うわけ……」

途中まで言いかけるが、思い出したみたいで顔が少し赤くなった

ドン

「いつてええ！」

「ふん！」

二人に足を踏まれたあげく、置いてかれた織斑君に同情する……

「真央どこいったのよ」

「鈴っち、仕方ないよ。真央っちは冒険家だからさ」

「なやましいねえ」

教室につくと真央が少しはだけた状態で机にふせて寝ていた

「むっ！ もうしっかりしてよ！ 心配ばかりかけて」

そついいながら服を出来るだけなおした

「スウ……………スウ……………鈴…花…」

少し驚いた顔をして、すぐに照れ顔になった

「もう…バカ」

鈴花は真央の頭を優しくなでた

第16話「しっかりして！」by 鈴花（後書き）

次は早めに更新します！

第17話「修羅の道？」

ゴキーン

「すう……………すう…うふふ…」

「ふう、ここまでやっても起きないとはな」

千冬はそういいながら鉄パイプを肩にトンと預けながら鬼の様な形相で寝てる真央を睨む

179

「天草、神崎の起こし方知らないか？」

「あ、はい 一応してます……………」

「ならこの馬鹿を起こしてくれ」

千冬はそういつとホームルームをはじめた

「さて、真央起きて」

「……………に……………」

「起きないと紅茶花伝のミルクティーあげないよ」

……………

……………むく

「うにゅ、おはよ」

「うん、おはよ」

クラスのみんなが驚いた顔をしている
織斑先生はすごい形相だ

「神崎、ホームルーム中に寝るとはいい度胸だな」

「ごめんなしやい……………」

ずるっと服がズレて真央の肩が色っぽく露出した
急いでそれを鈴花が直した

「真央……………いい加減に……………」

ビク

「あ、あれ？ す、鈴花じゃないか！？ 今日も可愛いなあ！」

一瞬で覚醒した真央が取り繕うがトキステデにオソシ

「いててて、鈴花のビンタはスナップ効いててすごく痛い」

昼

俺は廊下を一人であるいていた

ホームルームの時にビンタされたところがまだ痛い

少し歩いたら鈴花を見つけた、鈴花もこっちに気づきそっぽをむいてどっかにいってしまった

「なんで怒ってんの？」

俺は屋上にいって鈴花の機嫌を直すための方法を考えた

午後の授業に出なかったのは内緒

部屋に戻る

鈴花はまだ戻っていなかったので一足先にシャワーを浴びた

シャアアアアア

「（なんで鈴花は怒ってるんだ？ ホームルームのとき寝てたから？ それだけじゃないような）」

考えても答えがでないのでシャワールームからだと鈴花が帰ってきていた

「鈴花、なんで怒ったの？」

「……………」

「鈴花？」

ガン無視されてる

ここまでとは思わなかった

「鈴花、明日休みだし買い物行こう！ この前約束したろ、8時に駅に集合ね」

「……………うん……………」

なんかな
まあ気分転換になればいいんだけど……

くく翌日くく

時刻 AM 8 : 30
場所 駅

「……来ないなあ」

かれこれ30分待つてるのに鈴花が来ない
メールしても返信がない
朝は俺より早く起きてたのに

「でも『うん』って言ってたし、来るよね……」

不安を抱えながら鈴花を待ち続けることに決めた

「君、今ひま？ 俺達とどっかいかない？」

「（またか、これで何回目だろう）」

もう10回以上ナンパされている
この外見のせいで

ちらつと時計を見る

午後5時を指していた

集合時間から9時間は待ったが鈴花が来ない

念のためポンコツに鈴花を尾行して守るようについてあるから誘拐とかは絶対はない

だとしたら考えられるのがすっぱかされたということ

胸が暑くなる

一度も鈴花にはすっぱかされたり、嘘をつかれたりしなかったから

そうしてるうちに雨が降ってきた

それでも動こうとしない

きつと来るかもしれないと思ったからだ

結局9時になっても鈴花は来なかった

今も雨が強くなって降り続ける

「……………」

真央は鈴花と行く予定だったすべての店の前に一人で雨にうたれながらいった

胸が苦しくなった

「……………帰る」

真央はそういうとIS学園に足をむけた

IS学園に戻ると寮に向かった

色んな人にあつた

「どうしたの?」「大丈夫?」など声をかけられたがてきとつに返事をした

部屋の前になると一夏にあつた

「真央、どうしたんだ?」

「ちょっとね」

「そうか、あ 天草さんの作るタルト美味しいな!お前いつもあんなのくってんのか?」

「……………!!……………それ今日?」

殺意がわいた

「ああ、そうだけど」

「ふーん、じゃそろそろ」

「ああ、またな」

泣きそうになのをこらえるので精一杯だった

「君、今ひま？ 俺達とどっかいかない？」

「（またか、これで何回目だろう）」

もう10回以上ナンパされている

この外見のせいで

ちらつと時計を見る

午後5時を指していた

集合時間から9時間は待ったが鈴花が来ない

念のためボンコツに鈴花を尾行して守るようについてあるから誘拐とかは絶対はない

だとしたら考えられるのがすっぱかされたということ

胸が暑くなる

一度も鈴花にはすっぱかされたり、嘘をつかれたりしなかったから

そうしてるうちに雨が降ってきた

それでも動くことしない

きつと来るかもしれないと思ったからだ

結局9時になっても鈴花は来なかった

今も雨が強くなって降り続ける

「……………」

真央は鈴花と行く予定だったすべての店の前に一人で雨にうたれながらいった

胸が苦しくなった

「……………帰る」

真央はそういうとIS学園に足をむけた

IS学園に戻ると寮に向かった
色んな人にあつた

「どうしたの?」「大丈夫?」など声をかけられたがてきとつに返事をした

部屋の前にくると一夏にあつた

「真央、どうしたんだ?」

「ちよつとね」

「そうか、あ 天草さんの作るタルト美味しいな!お前いつもあんなのくってんのか?」

「……………!!……………それ今日？」

殺意がわいた

「ああ、そうだけど」

「ふーん、じゃそろそろ」

「ああ、またな」

泣きそうになのをこらえるので精一杯だった

「あつ、真央お帰り」

部屋に入ると鈴花に笑顔で出迎えられた

「はやくシャワーあびな、風邪ひくよ」

「……………うん」

濡れた服を脱いで髪をドライヤーで乾かしてからベッドに入った

「真央？ シャワーあびないと」うるさい「あ」

何も聞きたくない

一夏と同じ部屋ならよかったのに

「何よ、子供みたいに拗ねて、八つ当たりしないで」

「っ!」

わかった

今ので鈴花は一夏が好きなんだと、俺は嫌いなんだと言っことがわかった

「悪かったね」

そういうと部屋を出て屋上にいった
雨にうたれながら膝を抱えた

「……………」

鈴花に好かれてると思って浮かれてた
俺は馬鹿だ

「……………う……………く」

真央は泣いているのか雨のせいでわからない

真央はそこでずっと自分を責めた

第18話「殻」(前書き)

ひねくれてみました

ちよっとなあと思うところがありますが気にしないでください

第18話「殻」

あのあと、屋上でびしょ濡れになって倒れてる真央を女子生徒が発見
今は部屋のベッドで寝かされている

「……………」

いや真央は寝ているフリをしていた

誰もいないのを確認すると、ポンコツがくれたデータをみる

そこには一夏とその他いつものメンツと鈴花が楽しそうにお茶して
るのが映っていた

「ふーん」

もう何も感じない

名前で呼ぶのやめよう

真央は心を殻に閉じ込めていた

「真央大丈夫なの!？」

心配そうに鈴花がドアを思いっきりあけて入ってきた

「うん、俺は大丈夫だよ天草さん」

「えっ？ 真央？」

不思議そうな顔をしてる

「もう真央ったら、鈴花って呼んでよ」

「はやくどっかいけよ、天草さん」

どこか悲しそうな顔をして鈴花は部屋を出た

(やっぱり何も感じない)

これでいいんだと自分で納得する

(そういえば6/30まであと5日か、誕生日はなにしようか)

眠くなってきたので真央はねむりについた

その夜、鈴花に起こされた

「なに」

「真央…ごめんね」

「ん？ 天草さん何もしてないじゃん」

平然としてられる自分がすごいと思った

「昨日、約束破って…行こうとしたんだけど」

「言い訳は聞きたくない」

鈴花の言葉を遮った
殻にひびがはいた

「真央…聞いて」

「うるさい、嫌いならそういつてくれればいいのに」
「そういつて部屋からでた
走って学園からもでた
どこか人がいないとこに行きたいと思った」

そして山奥についた

人気ひとけはない

大好きな自然に囲まれてる

真央はそこでじっとして落ち着くまで待った

「（真央大丈夫なのか？ 昨日屋上で倒れてたってきいたけど）」

一夏は真央の部屋に向かって歩いてきた

「あっ……」

ドアがあきっぱになっていた

おかしいなあと思ったが深くは考えずに部屋を覗いた

「真央、いるか？」

……

「ん？ 入るぞ」

中に入るとベッドに腰掛けてる天草さんがいた
雰囲気は昨日とは違う

なんか重く沈んでいて話し掛けづらい

「あ、天草さん……真央は？」

「……知らない」

「そ、そうか 邪魔してごめんな」

そういつと一夏は部屋をでた

「（何があったんだ？）」

少し考えたがすぐに元通りになると思い、考えるのをやめた

「（それにしても真央がいなかったってことは、元気になってそこから辺ふらついているのか）」

一夏は一人で納得して自分の部屋に戻っていった

ザアアアアアアアア

雨が降り続ける

真央は少し落ち着いた

空をボーッと見た

10年前の親に捨てられたときのことを思い出す

(あの時は曇り空だったな)

そんなことを思っていると頭にある場所が思い浮かんだ

そこは自分にとって最悪の思い出の場所だ

でも今の自分にとって最高の場所になるような気がした

「よし、あの場所に行こう」

真央は立ち上がり目的地に向かって歩きだした

第18話「殻」(後書き)

もうすぐテストなのでまた更新遅れると思います

すいませんm(_)m

第19話「予兆」(前書き)

だんだんおかしくなってきたる気がする……
気のせいかな？

第19話「予兆」

真央がいなくなって3日目

さすがに千冬も痺れを切らしてホログラム束さんに真央搜索を言い渡した

「あのバカは放浪癖があるから、どこをほっつき歩いてるのかわからん！ 見つけだして力づくで連れ戻せ！！」

「はいはい、任せてよちーちゃん！」

そついうと私とかにしか見えないホログラム束さんは消えた
「夏君や専用機持ちは『来た！』って顔をして立ち上がった

「お前達は学園に残れ、当たり前だ馬鹿者」

「でもじつとなんてしてらんねえよ、千冬姉！」

納得ができないのか一夏君が食いつく
他の皆も同じみたいだ

。。。。。。。。。。

「なんだ」

携帯がなり、織斑先生が出ると険しい顔になった

「東、それはホントか？ 真央が『あそこ』に向かっているなんて信じられんが……」

「『！！？』」

皆おどろいている

織斑先生が電話を切ってこちらを向く

「神崎の居場所がわかったから、お前達はここにいろ」

皆安心したような表情をして肩の力を抜いていた

（『あそこ』ってまさか……）

「織斑先生、私も行きたいです」

「ダメだ、天草もここにいろ」

「真央は私がかんとかします！ だからお願いします」

「天草、お前知ってるのか……？」

黙って頷くと織斑先生は少し悩んだみたいだったが『仕方ない』とOKをだしてくれた

「ありがとうございます！」

「早速ここに行ってくれ、私達はあとから追いかける」

織斑先生から端末機を受け取り、指定された場所に向かった

体が重い……頭がクラクラする……寒い……目がかすむ……

フラフラとしながら俺はある崖に来た

下は波が激しく打ち付けていた

「やっとついた……10年ぶりだね」

ここは俺が親に捨てられたホントの場所である

「変わらないなあ、ゴホゴホ……風邪引いたかな？」

少しの間、木にもたれ掛かり崖から海をポーツと眺めていた

……

……

……

……

どれくらいの間眺めていたのだろうか

辺りは暗くなっていた

「……学園に戻っても居場所ないし、俺が知ってる家は俺が捨てられたときにはもう売られてたし」

はあとため息をつく

空を見上げた

星がキラキラして綺麗だ

「ゴホゴホ！」

（なんだ？ 何かが込み上げてくるような……こうなんだっけ……
そう狂気）

するといきなり殺人衝動にかられた

「ぐう！ な……んだ……これ……！」

殺したい殺したい

殺したくてたまらない

そんな思いが頭を駆け巡る

そのとき

「真央、大丈夫！？」

鈴花が来た

俺は焦った

(鈴花を殺すかもしれない！)
「くるな！ はやくどっかいけ！」

衝動をおさえながら叫んだ
もう限界だったのだ

それでも鈴花は近づいてきた、ゆっくりと不安……いや罪悪感でいっぱいって表情で

衝動を少し抑えられなくなって鈴花を押し倒し、ナイフを首に当てた

「……真央、ごめんね」

それでも鈴花は俺を恐れずに謝ってきた

(ダメだ！ もうこれ以上は……)

崖が目の端にうつる
そして覚悟した
自分を捨てる覚悟を

「天草、神崎！」

織斑先生と東さんと一夏たちが来た

「えっ、一夏君なんで？」

「許可もらった、じつとなんてしてらんねえよ」

(嫉妬かな、すごくいらつく、ここに居たくないけど全て終わらせるから意味ないね)

少し衝動も弱くなってきた

思考もそれなりにできる

真央は立ち上がって崖っぷちに立ち、皆の方を見る

「これ以上迷惑はかけられない」

皆、俺の言ってる意味とこれからしようとしていることがわかったみたいだ

「真央……だめ……」

俺は鈴花の言葉を無視して続ける

「俺は自分の全てを終わらせる」

そういうとラウラ、シャルロット、鈴、セシリア、織斑先生が戦闘体勢になった

箒と一夏は険しい顔をしていた

鈴花は泣きながら『なんでよ……』といていた

俺はサバーニヤを展開

「邪魔するならかかってこい！」

第19話「予兆」(後書き)

次回戦闘なんです
がはじめにいつときます

戦闘描写ド下手くそです

第20話「きい」（前書き）

小まめに書いてったら

少し長くなっちゃいました（汗）

こんなはずじゃなかったんだけど……

第20話「きい」

ガキインガキイン

「その程度で俺を止められると思ったか」

「うるちよると、めんどくさいわね!」

ふふつと笑い周りを見る

(鈴と一夏が接近戦闘、セシリアとシャルロットがサポート、ラウラはどこいった?)

「よそ見してんじゃないわよ!」

「雑魚のくせに」

鈴が衝撃砲を乱射する

それを俺はビームで相殺

「私もいましてよ!」

ビットを射出

破壊しようとライフルを構えた

「僕のこと忘れてない？」

「あたしが決める！」

「止めてみせる！」

その右左と後ろから

順にシャルロット、鈴、一夏がきた

（一夏は雪片でバリア無効化攻撃、シャルロットはシールドピアース……いけるか？）

俺はわざとよけずに攻撃をまともに受けた

「ぐうう！」

全身に激痛が走る

意識がもってかれそうになる

（残量エネルギーは120か）

シールドビット&ライフルビットを展開した

「この程度か？お前たちの力は」

「「なんですってえ！」」

挑発に乗りやすい二人が額に怒りマークをつけた

「たたきのめす！（しますわ）」

鈴が切り掛かって、セシリアが狙撃

（めんどくさいな、あの二人）

鈴達の攻撃をことごとくかわし、嘲笑い反撃する

「それぞれ、よけるよ」

「くうー、むっかつくわね！ でも……」

「……………」

乱射し続けてたが、いきなり体が動かなくなった

（ラウラのAICか）

『悪いがこれで終わりのようだ』

真央は織斑先生の言葉に笑みをもらす

一夏が零落白夜を発動させてるのがみえたのでふふつと笑いながら
トランザムを起動させた

「なに！？」

「赤くなった……？」

『一夏！ 早くとどめを！』

ハツと我に帰った一夏は瞬時加速をして距離を一気に縮め、切り掛かった

「うおおおおお！」

「ふん」

AICを振り切ってかわそうとした瞬間、さっきもたれ掛かっていた木の根元にディスクを見つけた

いつもならそんなもの気にも止めないが、そのディスクには消えかかっていたが『真央へ』と書かれていた

次の瞬間、衝撃が体にはしりディスクがある方に吹き飛ばされた

「くっ……これ……だけでも……」

意識が遠のくが真央は必死にディスクに手を伸ばしす

「真央……」

掴むと抱え込むようにして意識を失った

黒い世界、なにもない
自分が2人いるだけ

『よお、ご機嫌いかがかな?』

異様なオーラを纏った自分が話かけてきた

「最悪だよ……」

『はは、自殺に見せかけて自由の身になろうとした奴にとってそうかもな』

「誰だよ、お前」

睨みつけながらさういうと奇妙な笑みを浮かべた

『俺はお前だよ、お前が白だとするなら俺は黒だ、お前が正義だとするなら俺は悪だ』

「ようするに正反対なんだな?」

『ああさういう風に作られた』

「作られた?」

『ふふ、それはまた今度な』

「焦らすなよ……」

じれったいとため息をつく

『あの子を……………』

……………

目が覚めると自室のベッドに寝かされていた隣に鈴花が突っ伏しながら寝息をたてていた

「……………」

ぷに ぷに

「ううん…すう…」

ほっぺをつつついたらくすぐったそうにもぞもぞと動いた

(可愛いなあ…)

『どっちかと言えば綺麗な部類に入ると思うがな』

頭についさつき聞いた声が響く

少しイラってしたが鈴花の寝顔を見るとそれもどっかにいった

『お熱いことで、いいですなあ青春は』

(どこのおやじだよ、お前はいつから俺に干渉していいことになったよ)

『硬いこというな、俺を作ったのはアメリカのD-Lシステム研究チ

ームだ』

いきなり話が変わったので戸惑ったがすぐに持ち直す

(DLシステム? ダウンロード?)

『あながち、間違いではない』

(アメリカは訳のわからんもん作るの好きだね)

くくくつと笑われ、阿呆を見る目で見られた気がする

『今はアメリカだけかしらんな、きつともつと増えてるぞ』

(簡潔に話せ)

………… DLシステムはあるISを起動・制御・コントロールするた
めのもので、そのISは表面上は安全で宇宙進出が出来るというこ
とだが

本来そのISは大量虐殺を目的としたものであった。

しかし、それを真央の両親の手によって対話のためのISに改造の
途中で反対派の人達から追放された。

だが改造されたそのISは起動・制御・コントロールするには鍵が
必要になっていた

その鍵が真央の体の中の「DLシステム」でその研究チームが真央
をいじくる過程で第二の人格が出来た…………

『こんな感じかな?』

(なんで俺の体の中なんだよ!?)

『両親がお前の体にナノマシンを埋め込んだんだ、そのナノマシンと細胞が何故か異常なほどくっつきあつたんだ』

(それを元に鍵を作ったのか? それとも俺は鍵なのか?)

『お前は鍵だな、狂気にもある程度耐性がついてるし』

あつさり言われて少しため息をつく、だるそうに体を起こす

『事実だ、お前と鈴花が破壊キーであり起動キーでもある』

その言葉に驚愕し、鈴花に目を向ける
気持ち良さそうに眠っている

(こいつが鍵? 何言ってるんだお前……)

『知ってたんじゃないのか? 鈴花がお前と同系列のナノマシンを埋め込まれてること』

真央は黙った

確かに知っていた、束さんに教えてもらったのだ
自分と鈴花にナノマシンが埋め込まれてることを
きつとあの人は他にも何か知ってるだろう

『いつか必ずお前と鈴花は狙われる。お前が自分の身と鈴花を守れ』

(わかってる、鈴花だけは守る)

『自分のことも忘れるな、ふふふっ面白い……』

コンコン

ドアをノックする音が聞こえた

「神崎、目覚めたか？」

織斑先生の声だ

恐る恐るドアを開ける

「……はい」

織斑先生ともう一人知らない人がいた

「体は大丈夫か？ 気分は？」

「全然平気です」

そうか、と織斑先生は言うど部屋に入る
寝ている鈴花をみてため息ついた

「すみません……」

「気にするな、なんとなく予想してた」

鈴花をベッドに寝かせてお茶を入れた

「神崎、お前のISは今束が整備してる」

「すみません、勝手なことしたのでに整備まで……」

まったくだ、と織斑先生はお茶を一口飲む

「それでこちらの人は？」

織斑先生の隣にいる人を指差す

「アメリカの『DLシステムの研究チームの一員だ!』」

(お前、黙ってるよ)

もう一人の自分が割って入ってきたので文句をいった

織斑先生の隣の人がニコツて笑った

「初めまして、エルメ・サンクスです。お願いがあつて来ました」

その言葉に警戒心全開にした

DLシステム研究チームって聞いた時点で警戒はしていたが悪意を感じた

「なんででしょうか？」

「そこに寝ている子と一緒に私とアメリカに来てほしいの」

「ほう、アメリカですか」

『おい、忘れたのか！？ お前はそいつらに赤ん坊のときいじくられてんだぞ』

もう一人の言葉には反応しない、どうせこのあと俺の思考を読むはずだから

「どうかな？」

「そうですね、お断りします」

「どうして？」

優しい笑顔できいてくる

だが殺意を感じる、断ったら実力でくるかもしれないけど……

「貴女達は信用できない、過去のことを踏まえると……ね」

織斑先生が「ふっ」と鼻で笑った

エルメさんが睨んでいるが気にしないで鈴花の頭を撫でる

『少し体借りるぞ』

(了解)

そういうと自分の意識が後ろに下がり、もう一人の意識が上に重なる感じがした

鏡に映る自分は右目が赤くなっていた

「てめえらの好きにはさせねえよ……！」

第20話「きい」（後書き）

テストは半分諦めてます
山勘でなんとかなる気がするんで

第21話「亀裂」

「……………そう、まさかあなたまで目覚めていたとはね」

すうっと右目が元の色に戻り、真央の意識が表に出た

「…わかったわ、貴女はどうなの？　そこで寝たふりしてる子」

エルメさんがそういうと鈴花はゆっくりと体を起こした

「…すみません」

「最初からわかっていた、盗み聞きは感心せんな」

「撫でたときに気づいてたから平気」

少し照れながら謝る鈴花に織斑先生と俺はいつものように答えた
エルメさんが話を戻す

「貴女はどう？　アメリカに来ない？」

「ええつと〜……………」

鈴花が迷っているとエルメさんはニヤツて笑った

「もう大切な人が危険な目に合わない環境よ、目的もやること少な

いし」

「ホントですか!？」

この子食いついたよ

まあ、大切な人が危険な目に合わないのはいいことだ

「じゃあ……私は」

真央は鈴花が言葉を言い終わる前に抱き寄せた

鈴花の顔は真つ赤なのは真央は知らない

「行かせませんので」

「貴方が決めることじゃないわ」

鈴花に視線を送ると申し訳なさそうな顔をしている

何をいいたいのか何となくわかった

「真央、私アメリカに行く……行きたいの……」

「……………」

「真央一緒に行く」

正直、鈴花が行くなら一緒に行きたい

だけど彼女が研究チームである以上信用できない

「行かない、行かせない」

「なんでわかってくれないの!？」

鈴花から目をそらす

見てられなかった、ホントのこと話すべきか迷っていた

『止めとけ、鈴花は頑固なところがあるのは知ってるだろう』

(……………)

真央はその言葉に納得した

いま、何を言っても無駄だろう

鈴花に視線を戻した

「わかったよ、でも俺は行かない」

「!……………わかった、一人でいく」

そのまま俺は部屋を出た

「元気でね、はやく帰ってきなさいよ!」

「たまに連絡ちょうだいね」

「頑張ってくださいね、鈴花さん」

「ありがとう、みんな」

各々、アメリカに出発前の鈴花に一言かけていた
エルメも離れた場所からそれを眺めていた

「……一夏、神崎はどうした？」

「いや、どこ探してもいなくて」

はあく、とため息をついく

「何を考えてるだ、あいつは」

そのころ真央はというと上空2000メートル上から鈴花の姿を見ていた

『いいのか？ 行かなくて』

「ああ、あいつも平気だろ」

『どうだかな』

少しの間沈黙し、鈴花がエルメの用意した車に乗ったのを確認すると上を向いた

「もし、お前の言うISが起動したらどうなる？」

『所有権をもった国や組織が自分のためだけに使うんじゃないか？』

「危険だな、抑止力でおさまらないかもしれない」

アメリカがある方を向いて睨みつけるが、バカらしくなったので寮

に戻った

第22話「帰国と候補生」(前書き)

福音戦ちかいなあとしみじみ思う

第22話「帰国と候補生」

あれから1ヶ月たった

「……会いたい」

『はい、今ので5ヶタいったぞ』

うるさいなあとため息をついた
いつもの怠いHRが始まった

「転校生を紹介する、入ってこい」

そういうと2人入ってきた

それと同時にそのうちの1人に抱き着いた

「鈴花、会いたかったよ」 1人で行かせてゴメン、許して」

「私も会いたかったよ」今度は一緒にいこうね、その……二人きりで……」

そんないつものやりとりをしていると

ガシ 転校生に捕まれる音

ポイ 投げられる音

ガシヤァン 机と衝突

「私の弟の婚約者に触らないでくれないか？　いくら女子でも容赦できんぞ」

「やめろ、自己紹介しろ」

織斑先生が殺意と覇気で威嚇してそういった

「レイ・リバー、アメリカの代表候補生だ」

自己紹介が終わり授業が始まるが、真央はそれどころではなく思考の海に浸っていた

ハッ！

気がついたらもう夕方で誰もいない

『やっと出てきたか、お前の代わりに授業つけといたぞ』

（ああごめん）

『しかし…』

(ああそうなんだよ)

「『また女子っていわれた』」

二人？してがっくりと肩を落とした

「男なのか？ 貴様は」

「その声はレイさん」

振り向くと俺をこ丁寧に投げ飛ばしてくださいましたレイがいた

「そうか、悪かったな。でも弟の婚約者には……」

「誰の婚約者だった？」

レイの体がびくって震えた

それほど真央から負のオーラがでていことになる

「いつ？ 結婚するの？」

「…あ 15年後だ、そ、そのまだ9歳でな……」

負けた？ 9歳の子供に負けたのか、俺は
フラフラと自室に向かつてあるいた

「で、なんで部屋割変更で一人部屋なのさ」

『転校生のせいだ、HRのときに織斑先生にいつていた』

はあ、とため息をついてベッドにダイブした
すると携帯がなった

「はい……」

『あつ真央？ 婚約者っていうのはただの遊びでやってたらレイが勘違いしたの、今レイにも説明したから気にしないでね』

「うん…そうするー」

『あとね、アメリカにすごいISがあつたの、そのISを動かすために私の髪の毛5本でデータ採取したの』

「へー、鈴花はそのISのキーになるようなナノマシンがあるんだね」

『そうみたい、それでその起動に成功したの！』

「！！！？？」

『私の髪の毛からとつたナノマシンでISスーツ作ってね、それ着れば動かせるの』

「ああそうなのか……」

『じゃまた明日ね』

電話をきった
頭の中が混乱している

(え 起動させちゃってるよ? あの子)

『何も無いといいね』

(だね!)

鈴花がアメリカにいったときに諦めがついていた二人であった

「明日か臨海学校」

「そうだよ、真央」

現在、真央の部屋で鈴花が俺の足の間に座ってくつろいでいた

「買い物もしたし、たのしみだね」

そついいながら体重を預けてくる
嬉しいねえ

「恋人同士みたいだな、二人とも」

「そ、そんなことないよ!」

顔を赤くして否定するのを見て、ニヤニヤしながら「変わらないだろ？」というレイ

『いつも通りだな、1人ふえたけど』

「心地いいー」

「まおつちはお疲れさんだねえ」

あれ？ おかしいな

横を見ると真夏がいた

確か今はブラジルにいるんじゃない……

「やつほー、帰ってきちゃった！」

そついいながら俺の肩に目をつぶりながら頭をのせる
鈴花とレイは何故か俺を睨んでいた

「あの…すいません」

「真央八、才仕置キシナキヤイケナイネ」

ゾクッ

すごい殺気だ

レイも真夏も顔真っ青だし

命の危険を感じて部屋からとびだそうとすると鈴花に関節技決めら

れた

そのあと、織斑先生がきて真央が制裁された

第23話「転換」(前書き)

結構頑張った気がする……

気力を使い果たしてしまった

第23話「転換」

「海！美少女！水着！さいこーではないか」
美少女Ⅱ 鈴花

「真央まだたりないの？」

「褒めたのに……」

「えっ！？ 今の褒め言葉だったの？」

はい、というわけで臨海学校です
海にレッツゴー！

「冷たくて気持ちいいー」

ぷかぷか浮かんでいる
ちよつと重くて浮かぶの難しいけど

「なんで服きたまま浮かんでるんだ？」

「あつー夏、俺が海パンでいたら問題だろ？」

「確かに捕まるな」

ホントにこの女子みたいな外見が憎たらしい

鈴花とお揃いのロングなのは嬉しい

「で、いつ告るんだ？」

「じぼお！ じぼぶじぼ」

『そこまで取り乱すか』

（黙れおれ！）

「だ、大丈夫か？」

「ああ、平気平気！ チャンス見計らって告るから」

『何ちゃっかり告る発言してんだよ』

（すいません）

浜に上がって山を作っていると鈴花達がやってきた

「ねむねむ」

「まおつちーみてみて水着どう!？」

すごい勢いで駆け寄ってきた真夏とは正反対に眠そうにトボトボあ
るいてるのほほんさんはキツネの水着？らしきものをきていた
ちなみに真夏のはスクール水着

「個性的でいいと思うよ」

「チラ見だけの上にそのときとうな答え……………」

（あーやっちゃったか？）

恐る恐る真夏を見てみると震えながら拳を握っていた

(今日が俺の命日だ!)

『お前は死なねえよ、バカだから』

泣きたくなつた

「そこがいい!」

「はい?」

真夏が顔をあげて放った言葉がわけがわからなかったのはほんさんと俺はマヌケな声を出してしまった

「まおつちのその冷たい態度が……ハアハア……いい!」

「へ、変態!」

「違うよ、純粋な愛だよ、ママ」

「純粹通り越して不純だよ! てかのほんさん、ままつてなに? 愛称?」

「そーなのだ」と腰にてをあてて胸を張る

そんなことしているうちに真夏がいけない目をしていた

「まおつちこんどこそターベチャーウゾー!」

そういうと全速力で飛び掛かってきた、そう…それはまるでウサミ
ミつけてこっちに飛び込んできてる人のように……

「え？ 東さん？ ちょっとまって、なんでここに？」

「真央ちゃんは渡さないぞー、私の嫁だー！」

「「「！！？」「」」

（何言ってるのこの人！？）

そう思いながら全力疾走で砂浜を駆け巡っていた

鈴花、真夏が震えている、のほほんさんは………黒い……

現状を把握し、砂浜走っていたら危険だと思ったので海に飛び込む

（水中ならこっちが有利だ）

『そんなうまくいくかねえ、あいつらこっぴうときだけ運動神経高
くなるから』

そうそれがすごく心配

ゾクッ

殺気を感じて振り返ると猛スピードで泳いでくる物体が2、ISみ
たいな物で迫ってくる物1

(危険だ！なんで俺が！？)

『束のあの発言がいけなかったんだな』

陸に上がり走り出した

「ぐうへ！」

唯一海に入らなかったのほほんさんに突き飛ばされ、また水中にア
ゲイン

水中から顔を出すと目の前にはいけない目をした真夏と少し怒った
感じの鈴花と面白そうに笑っている束さんがいた

「ハアハア……まおつちとびしょびしょでぬるぬる……」

「うー、ばか」

「アハハ、やっぱり面白いね！」

いつもより温厚に事をおわらせそうなので一安心

「……ええへ…えへ…まままおつちいいい！」

前言撤回、危険な人いました

鈴花が飛び掛かってきた真夏の首に手を回してそのまま海面にたた
き付ける

「ふう、やっとおさまった」

「「「お、お疲れさまです」「」」

一夏SIDE

「あー、まさか千冬姉に荷物運び手伝わされるとは」

（あれ？ 真央どこいったんだ？さっきまでこちらへんに）

キヨロキヨロ真央を探すがどこにもいない

（海にでも入ってるのか？）

「何キヨロキヨロしてんのよ、一夏！」

後ろから声が聞こえて振り返ると鈴がいた

「ああ、真央を探してるんだが見当たらなくてな。鈴知らないか？」

鈴は「ふーん」と何故か変な目で見られたあとに、何かひらめいた顔をし、俺の体によじ登った

「な、何すんだよ!？」

「探してあげてるんでしょ、まったく協力しなさいよ」

「わ、わるい」

鈴はキヨロキヨロと周りを見渡している

「ちょ、ちょっと鈴さん！？ 何をしていらっしやいますの？」

「んー、真央探してるの」

「え？ 真央さんをですか……それでしたらあっちの方に鈴花さんが歩いていくのを見ましたけど」

その会話を聞いて俺はセシリアの方を向いたら鈴が落ちたような気がした

「ホントか！？ サンキューな、セシリア」

「いいえ、当然のことをしたまでですわ。そのかわりサンオイルぬってくださる？」

「ああいいぞ、それくらいいつでもやってやるよ」

ぐにゅ

変なものを踏んだ気がした
下を見ると鈴が倒れていた

「わ、悪い！ 大丈夫か？ てかなんでそんなところで寝てるんだ？」

「あんたがいきなりセシリアの方向くからでしょうが！」

「ごめん」

「まあ、いいけど」といいながら鈴はそっぽむく

(はやく真央と合流するか)

俺はセシリアにサンオイルを塗りはじめた

真央SIDE

「かき氷ーっ」

「うめえー!!」

俺とのほんさんはかき氷を片手にガッツポーズしていた

「かき氷台なしになりそうな勢いね」

「だいじょーぶ! スイカがある」

『そういう問題じゃないと思う』

かき氷で浮かれていたら女子にビーチバレーに誘われたのでやることにした

『ビーチバレーは介入させてもらっ』

(ダメ、おれやる)

『お前と俺の意識を表に出せばいい話だ』

(ならOK)
『単純だな……』

かき氷食べながらコートに向かうと、一夏とラウラとシャーがいた

「おっ、真央！ きたな」

「よー、一夏来たぞ」

挨拶を交わしながらコートに入る

深呼吸して一夏達をみた、そしてかき氷片手に一言

「かかってきなさい」

「「いやいや、せめてかき氷誰かにもつててもらえよ」「」

「なんだ、この私に怖じけずいたか」

そういうと一夏がムツとする、シャーは苦笑い

シャー「シャルロットです

「一夏が……まさか一夏が……あ、鈴花も入って」

「それでいいぜ、ただし真央が1ポイントとられたらかき氷誰かに預けるよ」

「わかった」

そして試合開始

真央&鈴花VS一夏&シャルロット

「いくぞ、真央」

「こいや」

『予定通りいくぞ』

真央の右目が赤くなり、なぜか左目は青くなった

一夏のサーブが勢いよくとんでくる

（早速1ポイントとりにきたな）

『だが甘い！』

真央は片手でレシーブし、鈴花の頭上にボールをあげた

「真央ナイス！ さすが！」

そういいながら鈴花もトスをあげる

ちよとどネットに走り込んでいてジャンプするといいいところにボールがくる

「必殺！ ボールに聞いてくれ弾」

その名の通り、一夏達の予想を遥かに超えたところにボールが入った

右ネット前30cm

「「どうやったなら左手でかき氷持ちながらそんなところに入る！？」」

「手加減無用！ かかってきなさい」

その日のビーチバレーは織斑先生がくるまで真央の左手からかき氷

が離れなかった

現在、夕食を食べております。

一夏とシャーは何処か不服そうな顔をしていた

「かき氷持った奴に1ポイントもとれないなんて……」

「反則だよ、あの二人のコンビネーション……」

ビーチバレーのことを引きずってるみたいだ
きにしなきゃいいのに

「ごめんよ、怒らないでよ」

「「うっ」(ドキ)「」

何故かシャーと一夏が顔を赤くしていた
セシリアは顔真っ青だけど

「セシリア、きついなら食べさせてあげよーか？」

「えっ!?! い、いいですわ 自分で食べれます!」
俺はセシリアの顔に手を添えて自分の方を向かせた

「あーん」

「えっ、あ、あーん」

セシリアは顔を赤くしながら口をあけたのでそこに漬物&ご飯をいれた

「モグモグ……」

「おいし？」

首を傾げてたずねる

「漬物とご飯は結構あつのですね」

「でしょー、ほらほらいっぱい食べな」

「はい、残したりしたら申し訳ないですしね」

「一夏食べさせたてあげて」

そついうと立ち上がり部屋を出て、自分の部屋に向かう

後ろから織斑先生の怒鳴る声が聞こえたのは知らないことにしとく

部屋で窓の外見て黄昏れてると一夏がきた

「真央、俺の部屋来ないか？ マッサージする予定だけど」

「ほうほう、いくいく」

「私も行きたい」

「よし、じゃあいじつぜ」

トコトコと一夏の部屋に入る

真夏SIDE

「まおつちがここに入っていった」

立て札をみると織斑とかいてある

「まさかあんなことやこんなことを！」

一人で妄想に浸っていると中から真央の声が聞こえた

『んっ、ああ…ん』

思わず聞き耳を立てると、いつの間にか鈴と箒がいた

「……………」

目的はきつと一夏だから気にしないが

『あ、んああ…く…く』

え、エロい…エロすぎる

中の様子を想像していると戸が開いた

「何をしている」

とっさに逃げ出そうとした鈴、箒、セシリアがすぐに捕まった

(セシリアいつの間に)

「はあ、中に入れ。あと鳳はデュノアとラウラをよんでこい」

そう言われ、中に入る

真夏と箒とセシリアがきたあと、少ししたら鈴とシャーとラウラがきた

「織斑、神崎と一緒に風呂入ってこい」

「え！？ 何を、千冬姉？」

「ラジャー」

「夏は戸惑っていたが気にせず、引っ張り風呂に向かおうとすると

「「「「私がつれていきます！」「「「「「

「お前達はここに残れ」

「真央いつてらっしゃい」

「まおつち今度は真夏と入ってね！」

何か間違ってる気がする

一夏を引つ張りながら風呂へ歩いていった

千冬は真央がいったことを確認すると戸を閉めてジュースをてきと
うに鈴花達に渡していった

「さて、お前達はいいつの何処がいいんだ？」

いきなりの質問に戸惑う5人とそれを見ながら苦笑する鈴花&真夏

「ただ同門の不出来が……」

「私は、あいつは弱いし……」

「私はクラス代表が弱いと困りますし……」

「ぼ、僕は優しいとこかな……」

「つ……強いところでしょうか」

千冬はニヤニヤしながら聞いた
次に鈴花と真夏の方を向いた

「お前たちはあれのどこがいいんだ？」

「真央は私に負担をかけないようにしてくれてますし、寝顔かわいいし」

「鈴つちのいうとおり！まおつちの寝顔は日本1！いえいえ世界1」
キツパリと言つてのける二人を羨ましそうにみる5人の視線を鈴花と真夏は受け流していた

「神崎はともかく、一夏は便利だぞ。どうだ、欲しいか？」

「……………くれるんですか？……………」

「やるかよ、奪い取る気でいかなきゃ気づいてもらえんぞ」

「……………確かに……………」

一方その頃

「……………るるるる……………」

「……………（なんで真央は男の俺と風呂入って平気なんだ！？）」

最近真央のことを女として見ていた一夏である
だが現実には厳しい……………真央は外見は美少女だが男である

「風呂へダイブ！」

バシャーンと勢いよく風呂に入ると一夏のそばによる

「どした？ のぼせたか？」

「いや、なんでもないなんでもない」

「そうか？」

そっとうと立ち上がる

一夏の顔が真っ赤になる

「ん？」

自分の体に変なものがついてると思ひみる

「!!!!!!??」

『…………ガク』 ショック死

ついていない、余計なものと言っか大切なものが

一夏が気を失ったので取り乱しながら風呂から出て服を着せて部屋に戻った

「た、ただいま……」

部屋に戻るとみんな楽しそうに雑談していた

「そいつはどうした」

「ちょっと……アハハ」

さつきまで楽しそうに話していた5人が殺意をまとった

一夏を布団に寝かせ、織斑先生と廊下に出た

織斑先生は無言で大事なところを触る

「ふむ、ホントのようだな」

「なんででしょうか？」

「知らん」

部屋に戻ると一夏が気がついていた

目が合うとお互い顔を赤くして目を背ける

(気まずいよ)

『なんで凸じゃなくて凹になったんだ？』

(俺が1番知りたい)

「真央ちよつとごめんね」

鈴花が近づいてくるなり俺を羽交い締めにする
次に真夏がいけない目をして迫ってくる

「こ、来ないでー！」

鈴花と真夏はニコツと笑う

「」「隠し事はいけないよ」「」

そして本日二度目大事なところを触られた

「ひゃう……」

「ねえ、……鈴っち……ないよ」

「まさかとは思ってたけど……」

二人は悲しげな表情をしたまま上を見上げ

「真央が女の子になっちゃったー!!」

「俺は男だー!」

『ブツがないのか?』

紫色をしたウサミミをつけている女性が微笑む

「ふふふっ、今頃面白いことになってるよポンコツ」

足元にいるISの待機状態のタヌキが嬉しそうに尻尾をふる

「明日会えるからね、ご主人に」

サアーーーーっと風が吹き抜けた

第23話「転換」(後書き)

眠いけど、眠れない
性転換してみました(笑)

第24話「落ちる白、壊れる緑」(前書き)

テストやっとな終わったので少し長めです

いつもよりですがね

いつも短すぎるとは思いますがね

第24話「落ちる白、壊れる緑」

「これより」

（はあ、気まずい……）

『話聞かなくていいのか？』

（そんなことより、この体の方が問題だよ）

『きにすんな、性別以外何も変わってないじゃないか……あー、あと口調』

昨日あのとセシリアに言葉遣いをなおされた
セシリア程じゃないけど女の子らしくはなった

「ちーちゃん！」

「ん？ 東さんだ」

俺……じゃなくて私が織斑先生の方をみるとアイアンクローされて
る東さんを見つけた

「篝ちゃんも久しぶりだねえ」

「……お久しぶりです」

「真央ちゃん、体どうだい？」

なんで東さんが知ってるんだろ？
織斑先生がいったのかね

「東、お前か……」

「違うよ、ちーちゃん！私じゃないよ！」

東さんが慌てて説明してるのを見ていると肩を叩かれた

「ちよつといいかな？」

「え？ あーはい」

知らない男の人に話し掛けられ、その人の後ろについていく

「で！ その人が原因なの」

「なるほど、東でも性転換はできないか」

「なあ、千冬姉」

「織斑先生だ」

「真央はどこ行ったんだ？」

一夏が真央がいないことに気づいて質問する
東が何か思い出した顔をした

「あの子がつれてっちゃったかも……まあいいか、空をくらんあれ
」！

「で、貴方はだれ？」

私の質問に男は立ち止まり、こちらを向いた

「ゼウス・エクストレイル、君を性転換させた張本人だ」

私は目を細くし、狂気を周りに散布する

「狂気をコントロール出来るようになったんだな」

「すぐに男に戻してもらおうか……」

「いいぞ、俺に勝てたらな」

その言葉を聞いた瞬間、足に力を入れて飛び掛かる
しかし簡単に手をとられて投げ飛ばされた

舌打ちしながら体勢をたてなおし、ゼウスの方をみようとすると頭
を押さえ付けられ、海に顔だけ入ってる状態になった

「クククっ、苦しいか？ まだお前じゃ俺には勝てない」

頭から手が離れたので顔をあげる

「はあはあ………」

「またな、真央」

そういうとゼウスはどこかへ消えていった

「真央！ 緊急事態だ、作戦本部にいくぞ」

「了解」

一夏が慌てながらきたので事態は深刻なんだろう

「全員揃ったな、それでは作戦を説明する」

『あいつは何者だったんだ？ 狂気にあてられて平然としてられるなんて』

（俺が知りたい、何なんだあいつは）

作戦の説明を聞かず、部屋を見渡す

部屋の隅っこまで目を走らすが特に変わったものはない

当たり前か・・・

「神崎は織斑と篠ノ之の援護しろ」

「え？」

いきなり名前を呼ばれたのでマヌケな返事をする

織斑先生が板で手をパンパン叩いてるのがすごく怖い

「真央ちゃんがいつくんと篝ちゃんの援護するんだよ」

「あー、わかりました」

「それでは作戦決行は30分後だ、各自準備すること、解散！」

そろそろと部屋からでていく、一夏はなんだか気合いが入ってる

私はもう一度部屋を見渡す

『どうした？』

(なんでもない)

「そんなに警戒するな、傷つくだろ」

「!!!?」

私はその場から飛びのいた

いつの間にかゼウスが後ろにいたからだ

「…ゼウス……」

「覚えてくれたのか、嬉しいことだ」

奇妙な笑みを浮かべるゼウスに警戒しつつ、逃げ場と強襲するタイミングを計る

「もう一度言っぞ、お前はまだ俺には勝てない」

「自惚れるなよゼウス、お前は俺が倒す」

ふふふつと笑いどこかへ歩いていくゼウスの背中を睨みつける

「真央さん？ もうすぐ作戦決行時間ですよ」

後ろにセシリアがいた

いつもなら驚くけどそれどころじゃなかった

「俺も参加するんだったね、すぐにいくよ」

「真央さん？ 私は昨日あれだけ教えてさしあげたのにまだそういう……」

「ごめんなさい、ついでで」

お、私はそういうと一夏と箒がいるとここまで走っていった

「大丈夫か？」

「ハアハア、だ、大丈夫！」

「なら行くぞ、真央、一夏」

「了解」

一夏は箒の紅椿の背中に乗って、箒と一緒に飛んでいった

「早いな、色々と」

私もサバーニヤを展開して追いかけた。

（はぁ、ポンコツの強化終わったからポンコツで来たかった）
『仕方ないだろ、ポンコツが深い眠りについたんだから』

そう思いながらトランザムを起動させ、紅椿に追いつく。

「一夏、見えたぞ！ 目標との接触は10秒後だ」

「おう！」

一夏は零落白夜を発動させ、瞬時加速で福音に切り掛かった。

（私が来た意味あんのかな）

福音が一夏の攻撃をかわすのをみた瞬間、両手に持ってたビームライフルを構える。

『意味あつたみたいだな』

（無駄にならずにありがたいような、そうでもないような）

一夏と筈が追撃するが福音は全てかわす、福音の翼みたいなどころから出る羽の弾がつつとっしみたいだ。

「相殺するか」

ライフルビットを飛ばし、福音に攻撃を加える。
その隙に羽を相殺して一本の道をつくる。

「一夏！ いけ」

「おう！」

一夏が突っ込んだ後、ライフルビットを戻し、シールドビット2つずつ両肩につける。

福音に狙いをさだめて引き金を引こうとした瞬間

ズドオオン！

「ぐう！」

水中からいきなり出てきた赤いビームに当たり吹き飛ばされる。全身装甲のISが海中から出てきた。

「肩にシールドビットつけてなかったら危なかったな……真央」

「……ゼウス！？こんな時に！」

水中から出てきたのはISを纏ったゼウスだった
それと同時に束さんからゼウスのISのデータが届いた

「エネルギー切れなしに変形可能か、きびしいな」

「どうした？ さっきまでの威勢はどこにいった？別に逃げてもいいんだぞ、そこの2人がどうなってもいいならな」

（チートIS風情が！）

私は周りをみる。

一夏と等はこちらの様子を伺ながら福音と戦ってる。

ゼウスはまだ動こうとしない。

「一夏、箒！ こいつは俺に、じゃなくて私に任せて福音に集中して！ 福音撃破のあとすぐ撤退するよ」

「わかった、すぐに終わらせる！」

「決していかなるときでも気を抜くなよ、真央」

一夏と箒の言葉を聞いたあと通信を切ってゼウスを睨む、深呼吸して心を落ち着かせ戦闘に集中する

「いい顔だ……来い！」

「言われなくても！」

そついでGNミサイル発射した

一夏SIDE

「くそ！ なんだあいつ!？」

「一夏、集中しろ！」

福音の攻撃をよけながら俺は真央のことを気にかけていた。箒が福音と取っ組み合ってる間に距離を縮める。

「一夏、いまだ！」

「うおおおお！」

切り掛かかるが紙一重でかわす福音、一夏と箒の表情は段々焦りが見えてきた。

「くっ！」

「なんだこいつ！」

福音の攻撃をかわしながらエネルギーを確認するが、正直エネルギーより真央のところに早く駆けつけたいという気持ちが強すぎた。

「もう一度いくぞ、一夏！」

「おう！」

もう一度、箒が福音に向かっていく、福音は近づけまいと弾幕をはる。

俺は、上から攻めようと上昇して下を向くと船が見えた。

「一夏！ やれ！」

箒の合図が出るが福音の攻撃が船にむかってとんでいく

「くっ！」

「!!!？」

瞬時加速で船の前に行き、むかってきた羽を零落白夜で掻き消す

「何をしている!？」

「船がいるんだ! 密漁船か!？」

「ほつとけ! 犯罪者など」

「箒!！」

俺の言葉で箒が一瞬びくって体が震えた。

「箒、そんな そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱い奴のことが見えなくなるなんてらしくない」

「私は……私は……!」

箒は取り乱し、顔を手で覆う、そのさいに落ちた刀が空中で消える。

(リミット・ダウン!? まずい!)

福音のウイングスラスターの砲門が全て開いた、最悪の事態を一瞬頭に流れた。

「箒! (間に合ってくれ!)」

瞬時加速で箒と福音の間に割って入り、箒をかばうように背中で砲撃を受けた。

意識が遠のくなか、箒を見た。

髪を結んでいた布が燃えて塵になっていたのを見て意識を失った。

真央SIDE

ドヒュンドヒュン

「くそ！　なんだその機体！？」

「リボーンズガンダムだ、真央の腕前で倒せる機体ではない」

ビームが飛び交う戦場で弱音をかれこれ50回くらい吐いてる。もともと勝てる様な相手じゃないのはわかっているも負けたら一夏達が危険になる、それは何としても止めなければならぬ。

「くっ！？　避けるので精一杯だ」

「殺す気でこなきゃ勝てないぞ？　まあ負けるつもりはないがな」

リボーンズキャノンに変形したゼウスの砲撃をかわしながら、一夏の方をみると福音の攻撃を背中にあびている一夏がめにはいった。

「！！？　一夏ああ！」

一夏と箒が海に落下していった、私は焦って一夏達にむかって瞬時加速した。

「行かせないぞ、真央」

ゼウスからの砲撃に被弾しながら突き進むが、リボーンズキャノンのビームの威力が高いのか、装甲が砕ける。

強い衝撃が体の芯にまで伝わるが、歯を食い縛ってつく進む。

「くう…とどけ！」

全力疾走し、海に激突するまえに受け止めた。

福音とゼウスの攻撃をやつとのことかわしながらシールドビットを展開し、3つ繋げてから箒と一夏をのせた。

「箒、一夏が落ちないようにして」

そういつとシールドビットを作戦本部の方に飛ばす、そのあとオートにして思考から切り離す。

念のため、残りのシールドビットとライフルビットを護衛に回したため、生きて帰れるのかすら不安になった。

一度深呼吸して福音とゼウスの方を向いて睨む

（悪いな、力貸してもらおう）

『いつでも貸すぞ、それくらい』

すう、と空気を吸い込む覚悟を決めて目を見開く、右は赤く左は緑にひかっていた

「お前達の相手は俺だ！かかってこい！」

「ふ…面白い！」

（無事でいるよ、一夏！）

「トランザム！」

真央とゼウスは同時にトランザムを起動したが、真央はここにくるまでに一度使ってるので長くは持たない。はじめのうちには、なんとかトランザムのおかげでたち打ちできていたが、トランザムが切れると防戦一方になってしまった。

「いけ、フアング！」

「まだだ！まだやられるわけには！」

ゼウスがフアングを射出したのでGNミサイルを一斉射したが、1機のフアングが右腕に刺さる

「ぐう！」

「ほれ、かわせかわせ！」

つぎつぎと左足、左肩、横っ腹とフアングが突き刺さる。激痛で何も考えられなくなり、空中で動きを止めてしまう。

「あああああ！ううう！」

「これで終わりか……お前も俺を楽しませれる程の奴ではなかったということか……」

最後のフアングが私のみぞに突き刺さる、真央はもう痛みも感じないくらいに弱っていた。

体中からでる血が多く、徐々に体の感覚がなくなっていく。

（私……死ぬのかな……一夏大丈夫かな？ もっと鈴花と一緒に

いたかったな)

『くっ！ なすすべなしか…！？』

「神崎真央がダメなら、今度は天草鈴花にしようか……」

その言葉に意識がハッキリとした、感覚も取り戻した。

「す……を……ない」

「ん？ なんだ？」

サバーニヤの残った装甲から血がダラダラ流れてるのを見る。

ダメかと諦めかけろが頭を振り気合いをいれ、体に力を入れる。

周りを確認するとゼウスはいるが福音がない、私は笑みを浮かべながらゼウスに瞬時加速で抱き着くきある準備を開始する。

「な、どこにそんな力が！？」

「さあ、最後のお楽しみだよ」

サバーニヤのコアを中心に光り出す、真央は血を吐きながら振り払おうとするゼウスに掴まり続ける。

「お前、まさか！」

「鈴花は……俺の……！」

光りが大きくなる、真央は至福の笑みを浮かべる。

するとプライベートチャンネルで通信が入った。

『真央！ 大丈夫なの！？速く戻ってきて』

「鈴花……無理なんだよ、戻ろうとしても途中で力つきる」

『神崎、命令だ。戻ってこい！ 自爆なんて馬鹿なマネはよせ』

「一夏はどうですか？」

『意識は戻っていない、はやく帰ってこい！』

話しているうちに自爆準備が完了した。

コアを外して握りしめる、覚悟を決めてOKを押す。

「くそがあああ！」

……鈴花は俺が……

ゼウスもろとも光に包まれる

……守る……

次の瞬間、爆散した

規模が予想以上に大きく、半径2キロ爆発に巻き込まれた。

第24話「落ちる白、壊れる緑」（後書き）

毎回、最低でもこれくらい書ければいいのですがなかなか思いつく
にいないんです

第25話「死線或は進化」(前書き)

あー、つかれた
頭痛い！

鈴花は真央の呼吸と脈を確認した。

「う…ゲホ」

真央が吐血したのを見て急いで戻ることにした。

島について真央を医療班に預け、少しすると部屋に手当した真央を寝かせに来た。

「真央……」

真央の手を握ると尖ったものが手に刺さる、何かと思い、真央の手を広げるとコアらしきものがあつた。

サバーニヤのコアだと、なんとなくわかつた。

（これのおかげで真央はまだ生きてられるんだ……）

少し安心したような表情をするが、鈴花はあのISを思い出し唇をかみ締める。

「私に力があれば……真央もこんなにならなかつたかもしれないのに……」

自分の無力を嘆く、なさけなくて……なさけなくて仕方がなかつた。

鈴花は初めて心の底から力がほしいと思つた、真央に言うところ「俺がいるから必要ない」って言うかもしれないが鈴花はもう大切な人が傷つくの黙ってみていられなかつた。

鈴花はポンコツをつれて静かに部屋をあとにし、専用機持ちのセシリア達のところに向かつた。

「真央をこんなにして・・・絶対許さない！」

鈴花が部屋を去ってから少したった後、ゼウスが静かに部屋に入る。

「無茶をするな」

寝ている真央に話し掛ける、すると真央はゆっくり目を開いた。

「おかげさまでコイツは生まれて初めて死ぬ覚悟をしたよ」

「その口ぶり……狂気の発端、阿修羅か」

「久しぶりだなそういわれるのは、コイツが気にもとめなかったからか」

「お前がそうなるようにした真央がすごいのか」

実はゼウスと真央は一度とある研究施設であったことがあった。

そのあと真央は両親と共にごどこかへ行ってしまったから、今更会っても真央は覚えていないとは予想できていた。

「それであればどうなってるんだ？」

阿修羅と呼ばれた人格がゼウスに尋ねる。

「DL計画は天草鈴花の協力によって前進した、あのISが誰でも動かせるようになったのは痛いな」

「やっぱりな、エルメが余計なことを言わなければ」

「そのエルメが操縦者に決定したみたいだ、しかも亡国企業ファントムタスクも関わってるみたいだ」

今の真央や鈴花ではどうにもならないとこまで来ていることに、阿修羅は少し焦っていた。

真央を鍛えれば何とかなるレベルではなくなった。

「ゼウス、悪いが真央を鍛えてくれないか？」

「それはいいが、お前が本気になれば……」

阿修羅は首を横にふる、真央が本気の時の狂気を受けて耐えられる保障がないからだ。

耐えられなければ10年前の似の前になる、そうなれば鈴花を傷つけるかもしれない。

鈴花に傷なんてつけたら、真央はどうするかわかったもんじゃない。

「破壊キーなのに決定打にならないか……」

ゼウスはそう呟くと外を見ながら、険しい顔になる。

阿修羅は黙って頷く。

(亡国企業は真央と鈴花を狙うはず……IS学園が守り切れるか?)

部屋に涼しい風が入る、何かの始まりをつげるかのように……

ドオオオオ……………

今、空中では専用機持ちと鈴花が福音と戦闘していた

「くそ！　なんだ、あいつは！」

篤が愚痴を漏らす。

鈴花は戦闘中もずっとあのISを探していた。

(あのISはどこに……………?)

キョロキョロ見回してもいない、レーダーにも反応がない。

(また水中にいるの?)

「鈴花！　あんた集中しなさいよ！」

考え事していたら鈴に葛を入れられた。

鈴花は皆も真央みたいになってほしくなかったので素直に謝った。

「ごめん、すぐにコイツを片付けよう」

私はソードビットを射出し瞬時加速をかけ、福音と距離を一気に縮めた。

それに気づいた福音は後退しながらシルバー・ベルを放つ。

「その程度……………真央の射撃に比べれば！」

私はGNソードで掻き消しながら直進していった。

プププププププププププ...

(レーダーに熱源反応!?あのIS...?)

鈴花は急上昇し、海面を睨む、するとそこから緑色のISが出てきた。

そのISを見る鈴花は驚きを隠せないようだった。

「えっ……サバーニヤ?真央は今部屋にいるはず……」

「じゃあ、誰が乗ってるんだ?」

「サバーニヤは自爆させたんだ、あるはずがない」

「でもあれって……」

そのISはサバーニヤそのものなのだ。

ただ違うのはそのサバーニヤが全身装甲という部分だけ、真央の使っていたのは全身装甲ではなかった。

「久しぶりね、鈴花さん」

その声に驚いた、鈴花は彼女の声をきいたことがある、真央と1ヶ月も離れ離れになった原因でもある

、あのアメリカにナノマシン提供を頼みにきた...

「……エルメ……さん」

「ふふ、覚えてくれて嬉しいわ」

全身装甲で表情はわからないが、殺気を放っているのからして味方ではないことを理解した。

真央を襲ったISとグルだと思った鈴花は怒りを剥き出しにした。

「何しに来たんですか」

鈴花は福音と戦闘している5人の状況を確認しながら言った。

エルメはそれを面白そうな口調で答える。

「貴女を殺しに来たわ、真央は変なISのせいのできなかったけど、いつでも殺れる状態だし」

私はソードビットを回収し、GNソードをライフルモードにした。

「真央はやらせない」

そういつと引き金を引いた。

変な世界・・・

そういつのに相応しいくらい変・・・

誰かの夢にでも入った感覚だから変なのかも知れない。

俺はそう思っいながらキョロキョロしていると一夏をみつけた。

「誰だろ、あの女の人？」

一夏が女の人と話しているので少し待つことにした。しばらくすると辺りがオレンジ色に染まり、話が終わったのか一夏は一人になっていた。ゆっくり近づきながら話し掛ける。

「一夏、大丈夫か？」

「ああ大丈夫だ、なんで真央はここに？」

「それが俺にもわからんのだよ」

「その口調……セシリアが聞いたら何て言うか」

俺じゃなくて私は顔は笑顔でも内心冷や汗かきまくっていた。セシリアは細かいからなあ……

「じゃあ真央、俺……」

「一人でいくつもりか？」

一夏が私の言葉に驚いた顔をする。思考を読まれたとも思ってるのかね？ 実はノリで言ってみただけ

「私も一緒に行かせろ」

「え……でも……」

「私はお前の力になりたいと思ってる」

『1番は鈴花だけどね』と苦笑したら、一夏が頭を撫でてきた。その表情はどこかせつなそうので、それでいて何かを覚悟したような顔だった。

「…………お前は俺が……………」

「え？　一夏今なんて」

そこで目の前が真つ暗になり、気づいたら自室に寝かされていた。

「あれ？　一夏は？」

頭が働かないので部屋を見渡す、日が部屋に差し込んで綺麗だった。ボケーッとしていると後ろから笑い声がきこえた。

「織斑一夏は別室で寝かされている……クスクス」

声のほうを向くとゼウスが座っていた。驚きながら言葉をかける。

「な、なんで正座してんの？」

「畳の上では正座が基本なのだろう？」

そうなのかもしれないのでこれ以上追求しなかった。

けど、さっきまでドンパチやっていたのに結構フレンドリーだった。

（おい、阿修羅とやら！あとで全てはけよ）

『なんだ、聞いてたのか』

（いや、俺の頭に記憶が刻まれてた）

『お前の体だし、当たり前か』

そうしていると一夏らしき影が襖の間から見えてどこかへ走り去って行った。

それを見て動こうとすると激痛が走る。

「なおってないぞ、無茶するな」

『そうだぞ、今専用機持ちと鈴花が福音とやりあってる。あいつらに任せておけ』

真央は表情を強張らせ、思考をめぐらせた。

ゼウスはため息をつきながら真剣な顔で真央をみつめた。

「ISがないお前がなにするんだ？」

「待つことしかできないのか・・・、鈴花に何かあったらしたやつを殺す。」

「そんなあなたにプレゼント〜！！」

屋根から束がおりてきて私にカラーコンタクトを渡してきた。

何がなんだかわからないけど、とりあえず右目につけた。

「何も言わずにISのコアをはめて右目につけるあたりがすごく尊敬する」

束がすこし引き気味な表情をしていたが、気にしないことにした。

「さて、私も皆のことに行きますかな！」

「待つて、今回のISはサバーニヤ、ハルルト、ラファエルにシフトチェンジできるようにしてあるの。チェンジスピードは真央ちゃん次第だからね。」

「了解」

そういうと立ち上がり、部屋から出た。

真央は妙な胸騒ぎがしたので、傷が開かない程度に少し早く歩いた。旅館から出て空を見るともう日が沈みかけていた。

「いくぞ、ハルルト！」

ハルルトを纏い、一夏達がいるところに飛翔した。

一夏SIDE

「くっ、まさか福音もセカンドシフトしてるとは思ってたな

！」

福音との戦闘でエネルギーが徐々に減っていく。鈴花の方は真央のISに酷似してるISと戦ってるし、俺は焦っていた。

鈴から俺がやられた後のことを聞いた。

真央が海面ギリギリでキャッチして自分の命を顧みずに2機のISの足止めしていたことも、シールドビットとライフルビットを全て俺達の護衛につけたことも、決死の覚悟で敵にくっついて自爆したことも全て聞いた。

だから鈴花がその二の舞になるのが怖かった。

「鈴花に何かあったら真央にあわせる顔がない」

俺は福音を倒すことに集中し、福音撃破後に鈴花の加勢に行くことにした。

「一夏、受け取れ！」

「箒!?!」

箒に触れるとエネルギーが回復していった。驚きが隠せなかった。

「箒これは?」

「そんなことより福音をやるぞ!」

「おう!」

第と一緒に飛翔する。

その後ろをラウラ達がついて来る。

第が先行して福音に切り掛かる、福音の動きを止めた瞬間に俺は瞬時加速し、零落白夜を発動させ切り掛かるが避けられる。

「ラウラ！」

「任せろ！」

ラウラはレールガンを放つが福音は回避し、シルバーベルをラウラに向けて放つ。

ラウラは避けれず砲撃に当たる、その間に後ろに回り込んでいたセシリアが福音にレーザーを撃つ、レーザーが当たると福音は全方位にシルバーベルを放つ。

鈴はシャルのサポートで直撃を避けていた。

俺は太陽を背に瞬時加速をかけ、福音に飛び込む。

「うおおおおお！」

雪片があとすこしで福音に当たるところで福音が握ってそれを阻止する。

福音の手が伸び、一夏の首に触れたとこでやっと雪片が福音に届き機能を停止した。

「ハアハア……終わった……」

一息ついていたら隣に一機のISが墜落した。砂煙が晴れると鈴花がそこに倒れていた。

「!? 大丈夫か!」

そういい駆け寄ると後ろから凄い音がした、恐る恐る振り返るとセシリア、箒、鈴、ラウラ、シャルが傷だらけで倒れていた。

「ふふふ……、この力凄いわ。さすがといったところかしら」

「あんたがやったのか!？」

俺は恐怖で怯えながらも皆をつれて撤退する方法を考えた。

「逃げようとしても無駄よ、ここで全員消してあげる」

マルチロツクオンを使ったのだろう、ライフルビットが一人一つの割合で俺達の方を向いていた。銃口の光が大きくなっていく。

「くそ、どうしたらいいんだ!」

俺は焦りながら頭をフル回転させる。

そのとき……

「私にまかせな!」

オレンジ色のISがサバーニヤに突っ込んだ。

その姿はとても美しかった。

第26話「真央再臨」(前書き)

真央「ウーパールーパー」

鈴花「オオサンショウウオ」

第26話「真央再臨」

「くっ！？」

エルメは突然猛スピードで突っ込んできたISを睨む。

「おいおい、私は悪いことしてないよ〜むしろお前がしてたくらいだし」

私はそう答えながら口の端が釣り上がる、オレンジ色のISに身を包み余裕の表情だが、内心冷や汗かきまくっていた。

(あ、あぶねえ……サバーニヤ見えた瞬間に加速してなかったら、こいつらご臨終だったよ……)

『ふふ、なんだかんだでいつもうまくいくな』

(でも……こつからだよ、鈴花やラウラ達がああなってるってことは……)

『それなりに強いはず……か、力貸そうか？』

(いやいい、自分の本気を出すよ)

『そうかい、なら行ってこい』

私は顔がニヤけながら、ハルートのブースターを吹かせエルメに接近した。

「一直線で来るとはな、馬鹿な奴だよ！」

エルメはライフルビットで迎撃して来た、ビームをかわしながらサバーニヤにシフトチェンジする。

「どっちが上手く使えるか、やってみようか？」

「ふふ、いつまでそんな無駄口聞いてられるかしら……」

そっぴいなながらも砲撃を緩めないエルメにむっとながらビームライフルを構える。

私は横目で鈴花を見た。

ISが解除され、待機状態のポンコツがこっちを眺めていた。

(ポンコツの修復は10分程度だろうけど……その前に倒せるか)

ビームを撃ちながらエルメの動きを観察する、何故か先読みされるような動きをする。

おかしいと思いつつ撃ち続ける。

「どうしたの？ 全然当たらないわよ」

「どうしたんだろ？ 全然当たらないや」

そっぴいながらライフルビットを飛ばす、エルメはミサイルの砲門を全て開いた。

しかしミサイルは撃たれなくてエルメの背が爆発した。

「くっ！ なに!?!」

エルメが何だかわからなさそうな言葉を聞いて笑みがこぼれる、エルメの後ろにライフルビットが飛んでいた。

「なぜ!？」

「バカスカ撃つてれば一機だけ飛ばしてもわかんないよね、しかもオートで」

全身装甲なので表情はわからないがこつちを睨んでいるのは間違いない。

「その機体の本来の力じゃないと私は倒せないよ?」

「神崎真央……あなたは力量を見誤っている……」

するとサバーニヤのハイパーセンサーが警告を放っていたが私は気にしない。

「どうせあたらない(……………)」

何も行動を起こさない真央を見て、エルメは勝利を確信し、笑みを浮かべる。

私の後ろから高圧縮されたビームが放たれ、どんどん迫って来る。回避不可能な距離まで来るとそのビームが消えた。

「な!?! なにをした!」

「何も」

エルメの問いに私は軽く答える。
実際なにもしてない、ただ……

「ただポンコツが掻き消しただけ」

そういうと後ろからポンコツが顔を出し、ドヤ顔でエルメを見ていた。

エルメは悔しそうに拳を強く握っていた。

「このくそ狸が……邪魔をするなあああ！」

光学迷彩で隠していた高出力ライフルビットが姿を現したと同時に、私は一旦ISを解除しポンコツを抱きしめながら落下する。

「ポンコツ行ける？」

「ポン！」

「いい返事だ」

ポンコツが光だし、次の瞬間私はクアンタを纏った。
エルメは怒りをあらわにして砲撃してきた。

「遠距離型に近接格闘型で挑もうなど、笑止！」

「クアンタはバージョンアップしてるんだ……クアンタ・アルビオン？」

『それパクリにならないか？』

阿修羅の言葉は無視を決め込む、私もそう思うところがあるから

しかし、実際にクアンタは見た目も性能も変わっていた。

2つのGNドライブを最初から直列にくっつけているからスピードもパワーも格段と上がっている。

背中には翼がはえている、左右8枚ずつ羽がありそこにソードビットが収納されている。

腰にはGNソード？が左右にマウントされていて、両肩にはシールドがついていた、もちろん取り外し可能。

「鈴花が使つてるときはそんな形はしていなかった……真央お前は何物だ!？」

エルメが憎たらしそうに問う。

「私はDLシステムのDを担うもの、Lを手に入れたからと言って調子乗らないことだ」

「なるほど……あのISはまだ完全じゃないのね……ならお前を殺して完全にするまで!」

(ナノマシンがほしいのだから相手の生死は問わなくていい、とても楽な仕事をしているんだな)

『気をつけるよ、本気でくるぞ』

翼を広げて、GNソードを2つ手にとる。

少しの間の沈黙のあとエルメが先に口を動かした。

「いくわよ」

「どござ」

エルメはミサイルを一斉発射し、その間をビームでうめる。

「あらよつと」

翼に装備してあった高出力ビーム砲^{マンタ}を発射し、図太いビームに多くのミサイルが飲み込まれ消える。

（このマンタって武器を撃つ時ってDXのツインサ○ライトキャノンみたいだね）

『翼を広げてるからだろ、束もいらん改造しおって……』

マンタをたたみ、エルメに向かって一直線に飛ぶ。

エルメはライフルとライフルビットで近づけないようにしているが、私はGNソードで掻き消している。

「くつ！？ 遠距離は接近と相性がいいのになんで!？」

エルメは戸惑った声でそうつぶやいていた、私は一夏達の方をチラ見して鈴花以外はみんな大丈夫そうだった。

鈴花はまだ意識が回復していない。

「……接近は遠距離と相性が悪いなんて道理……私の無理でこじ開ける!」

トランザムを機動させ、ソードビットを展開した。

エルメもそれを見てトランザムを起動したがライフルビットが全てソードビットによって破壊された。

「くそくそ!」

毒づくエルメを放っておいて、私はシールドビットの破壊に移った。GNソードで次々と切り刻む、エルメの射撃を回避しながらで少しペースは遅かったが全ての破壊に成功した。

「なぜ私が!？」

「それはね……鈴花を傷つけたからだよ」

そういつて持っていたライフルをライフルモードにしたGNソードで打ち抜く。

「さあ、どうする?このまま続けてIS委員会に突き出されるか、逃げて仲間にナヌケなところを見せるか、選びな」

「くっ、もうダメか……」

エルメは私に背を向け、飛び去って行った。

私はそれを確認すると鈴花のところに急いでとんでいった。

「一夏! みんな無事!？」

「ああ、大丈夫だ……鈴花がまだ目を覚まさないが……」

「ていうか、あんたは大丈夫なの!？」

「そうだよ、あれだけ酷い傷だったのに……」

鈴とシャルの言葉にみんな頷くが私は無視し、鈴花を抱きしめる。すると鈴花の体少し光りだす。

「なんだ……………」

ラウラが不思議そうにつぶやく、光りが小さくなり消えると鈴花が目をあける

「？ 真央……………どうしておきてるの？」

「なんででしょーか？」

鈴花の質問にてきとうに答えたあと、ラウラの方に顔を向ける。

「私と鈴花の中のナノマシンを利用したんだよ」

「ナノマシンだと!？」

「じゃあ真央も鈴花も試験官ベビー？」

私はめんどくさいと内心思いながら苦笑いした。

「違うよ、生まれたあとに体の中に入れられたんの……………ある研究者らにね」

「そうか」

少し暗い雰囲気になってしまった。

鈴花は寝ぼけてるし、仕方ないから戻ることを提案し宿に戻った。

「貴様らは重大な違反を犯した、学園に戻ったら
織斑先生のお説教を受けながら山田先生に不思議な目で見られてる
ことに気づく。」

「……………(じーっ)」

「……………」

「……………(じーっ)」

「……………」

ダメだ、耐えられない。
でも何かしようなものなら織斑先生にとどめをさされる。

「でだ、神崎……………」

「は、はい」

いきなり名前を呼ばれて少し取り乱したがすぐ持ち直す。

「なぜISを展開したままなんだ？ 解除しろ」

「えー、でも「解除しろ」……………はい」

私はISを解除し、足が地についた瞬間、体を支えられずに倒れる。

「真央!？」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」」

鈴花が駆け寄ってきた、織斑先生達は驚いていた。

「真央治ってなかったのか……てっきり俺と同じで気づいたら治ってたのかと」

「ハハハ、ISの補助でああしてられたんだよね」

私は自分の体を見る。

ところどころ傷が開いていて、血が滲み出していた。

「早く治療を受ける、神崎は今日休め、天草は神崎が無茶しないように見張っててくれ」

「「はい」」

「それでは解散!?!」

私は一夏に運んでもらい、治療を受け部屋に送られた。その時一夏の体温が妙に高かったのはなんでだろう。

(で? いつまで女なの? 胸も大きくなってますが) 『気にすることはない、直に戻る』

(ナノマシンの異常だからといって性別変えられちゃ困る) 『確かに、周りには女として認識されてるだろうな、ただでさえ外見が女みたいなのに』

布団に寝っころがって暇なので阿修羅と話していた。
鈴花は飲み物買いに行っていて今はいない。

「明日、学園に戻るのか……つまらんなあ」

そんなことをつぶやきながら夏の風に煽られていた。

第26話「真央再臨」(後書き)

真央「二酸化マンガン」

鈴花「一酸化炭素」

第27話「模擬戦は怖い」(前書き)

長い長い

駄文すいません

第27話「模擬戦は怖い」

「よいしょつと、真央平気か？」

「おー……らいじよぶ……」

「まだ寝ぼけてるな……」

一夏は真央を右隣に座らせる。
真央の左隣には鈴花が座った。

「うー……すう……」

「もう、一度寝たらなかなか起きないのは低血圧だから？」

鈴花が真央の寝ぼけた顔を見ながらつぶやきながらほっぺを突くと、真央はバランスがとれなくなり、一夏の肩に頭をのつける……つまり恋人座りみたいな感じになった。

「な！？ ちよつ、真央！」

顔を赤くしながら取り乱す一夏を例の5人が見ていた。
その瞳には、光がともっていなかった。

「一夏は…朝から何やってるのかな？」

「嫁の分際でいいご身分だなあ……」

「不埒者め……その根性叩き治す！」

「ふふふ、お行儀が悪いですわよ……私が調教してあげますわ……」

「よし、殺そう！」

「……後でシメル」

5人は黒いオーラを纏いながら食事を勧めるが、一夏は真央を再度真央をちゃんと座らせ、鈴花と交互に真央にご飯を食べさせていた。

「真央はい、あーん」

「……あー」

「真央ーあーん」

「……あー」

必然的に周りの視線が集まり、騒がしくなってくる。

もちろんそんなことがあれば、鬼神・千冬もその騒ぎを鎮静化させるために来る。

「静かに食事すら出来んのか！」

「……」

全体が静まり返るが、鈴花と一夏は食べさせているので黙らずにいた。

千冬はそれを見た瞬間、さつきを一夏に向けて齒なつた。

「織斑、天草……何している?」

「あついえ、真央に食事を……」

「鈴花にだけやらせるのも何だから俺は手伝いを」

千冬は深い深いため息をついて、一夏を睨みつける。

一夏は顔を引きつかせる。

「その馬鹿者を起こせ、食事くらい出来るだろ」

そついうと鈴花が揺さ振り真央を起こす。

ものすごく、眠そつにゆっくり目をあけて千冬を見つめる。

「あー……ん? 織斑先生こんにちは」

「もつとはやく起きろ、馬鹿者が!」

千冬はスパンといつもより優しめに真央の頭をスリッパで叩いて退場する。

それでも眠気を飛ばすには十分でつたみたいで目がパッチリしていた。

「今回は軽かつたな」

「織斑先生もケガを気にしてるからかな? まあ軽くすんでよかつたね真央」

「……………」

真央の表情が強張ってるのに二人は気づいて少しだけお互いの顔を見合う。

「あー……………うん！ だめだめ、よし！」

「ん??？」

真央がいきなり一人事をつぶやいて表情も柔らかくなった。明らかに変なのでどこか具合が悪いのかと思い、鈴花は昨日のリボーンズガンダムと真央の戦闘を思い出す。

「どうかしたのか？」

一夏が心配そうに真央の顔を覗くが真央は笑顔で『大丈夫』と言う。鈴花も思いつめた表情になっていたので、一夏は訳がわからなかった。

「ポン！」

明かに変な鳴き声が聞こえ、3人とも後ろを振り返る。

そこにはよく真央が頭に乗っている狸のポンコツがいた。

「ん？ おお、ポンコツか……………ちよいと散歩でもするか？」

ポンコツは嬉しそうに頷き、真央と一緒に外に出た。

「なあ、今の真央おかしくなかったか？」

「うん、いつもの真央じゃなかった……」

一夏と鈴花は真央の座っていたところを見つめた。

崖の上に真央はポツポツと歩いていく、あてもなくただ歩いているだけ、真央がこれほどまで散歩という言葉を体言している姿はとても珍しい。

「いいのか？」

「何が？」

私は後ろからゼウスにいきなり話し掛けられ、少しぶっきらぼうに答える。

正直、まだ一人でいたかった。

「二人は何だから心配そうにしていたぞ」

「そうだな、お前とこれからやり合うんだ……これくらい自己中になってもいいだろ」

「そうか……」

そういうとゼウスはリボーンズガンダムを展開し、真央もクアンタAを展開した。

二人からは本気の殺意を放っている。

「いくぞ、神崎真央」

「来い、今度は負けない」

二人は急上昇し、刃を交え、火花を散らした。傷が開きそうな痛みが全身を走ったが、表情を歪めずに耐えた。

「傷は平気なのか？」

「ご心配なく……ナノマシンが機能してるので」

GNソード？をライフルモードにし、狙いを定めるがなかなか狙いが絞れずにいた。

ゼウスは砲撃を開始したので真央は回避に専念する。

「君はもともと接近戦が得意だったな……なぜサバーニヤを使っていた」

「常に得意な戦い方が出来るとは限らないだろ？あと朝言ってた私のトラウマってなに？」

「真央、君にはトラウマが出来てしまった」

「ウマトラが？ そんなはずないよ、さっきの戦闘でも何の支障もなかったよ」

ゼウスは首を横に振る、珍しく阿修羅も黙ったままだった。変だとは思ったが、それほど気にならなかった。

「君はビットをなによりも先に破壊した、その時の君を見て確信に変わった」

「邪魔なビットを破壊するのは当たり前じゃないの？ 鈴花達を狙われたら困るし」

ゼウスは視線をそらし、少し後悔してるような顔をした。視線を私に戻したゼウスは覚悟を決めたような目だった。

「真央、また俺と殺り合おう」

「な、何言ってるの？ 私はもうコリゴリだよ」

私は断ったがゼウスが『トラウマが何かすぐにわかる』と言っので仕方なく了承した。

回想終了

「直にわかる」

「そればっかだな」

そっぴいながらビームを撃ちながら接近していく。

いくらバージョンアップしたクアンタでも、リボーンズガンダムのエネルギー切れ無しには敵わないとわかっていたが、何のトラウマが出来たのか知ればいいと思っていた。

「そこ！」

砲撃をかわし、接近戦を仕掛ける。

ゼウスはビームサーベルで受け流し、切り掛かるが私は方のシールドで防いだ。

「勝負つかないな」

周りを見渡すと、ちょうど下には学園の生徒が訓練機を使って訓練していた。

織斑先生がこちらを睨んでいるのがわかった。

「よそ見とは恐れ入る、フィンファング！」

「くっ！」

フィンファングを避けながらゼウスに近づこうとするが、近づけな

かった。

砲撃が激しいわけでも、追い詰められてるわけでもないのに近づぐことができなかった。

「ええい！ ウザったい、消える！」

私はマルタを放ち、フィンファングのほとんどを破壊した。

そのあとも迫ってくるフィンファングをライフルモードで撃ち落とす。

「爽快だよ」

「殺す気でいくぞ、真央」

そういうと上昇していきりボーンズキャノンに変形し、ビームを溜め始めた。

クアンタのハイパーセンサーが危険の表示が500くらい出るんじゃないかと思うくらい、アラートがなる。

「な!？」

回避行動を取ろうとするがすぐに変な声が頭をよぎる。

ミステルノカ？

ゾクッ！

その言葉を聞いた瞬間、動けなくなった。

脳波コントロールでソードビット？を展開し、自分の前に円になる

ように並ばせ、GNフィールドを展開し肩のシールドも機体の前に持って行った。

「何かを失うかもしれないというときにお前は動けなくなる」

ゼウスはそういつとビームを放つ、そのビームをGNフィールドで防ぐがアラートがすぐに鳴り響く。

GNフィールドがもたなく、このままではシールドなんて一秒ももたないのは容易に想像できた。

「くそ！」

ビームがGNフィールドを貫いて、シールドに当たると片方が爆散した。

するともう片方も遅れて爆散し、私はビームに直撃した瞬間に私は回転しながら背中をパーシし、爆発させた。

爆風で制御がきかなくなり、真つ逆さまに海に落ちていく、ISの重みでドンドン加速していく、私は恐怖を覚えた。

「怖い……」

私は思わず弱音が出てしまった。

だが今はそんなことは気にならなかった、恐怖が全ての感情をつめつくしているからだ。

ゼウスの方を見ると猛スピードでこっちに来ていたのが確認できたが、それすらも怖かった。

「いや、まずいでしょ……なに？この恐怖」

ドンドン距離をつめてくるリボーンズガンダムを見てられなく、逃げようとしたが制御が効かない。

落下の方向を見たらすぐそこに海面があった。

「いや……いや……これはないでしょ……」

『真央！ 気をしっかりもて、ゼウスが助けてくれるから』

阿修羅の言葉を聞いた瞬間に落下がおさまった。

自分を掴んでいる腕を見るとリボーンズガンダムの腕だった。

「で真央、わかったのか？ 自分が何のトラウマがあるのか」

ゼウスは私が震えているのに気がつき、一度浜に戻って話をすることにした。

「真央どうした？」

「……………」

いくら聞いても何も答えない私に少し苛立ちを覚えたゼウスは手を私の頭に伸ばした。

ビクッ

「ごめんなさい……何も考えてなかったです」

「……………お前、怖いのか？」

私は黙って頷いた。

ゼウスは困ったような顔をして、仕方なさそうに東さんにメディアカ
ルチェックを受けることを勧めてきた。

私は自分が変だと自覚があったのでそれを受け入れた。

「うーん、困ったねえ」

「何があったの？」

東さんが私の診断結果を見て難しい顔をしていた。特にウサミミが
・
・

「真央ちゃんはねえ、健康体なんだよね、あんな生活習慣ライフスタイルして
るく
せに」

「困りましたねえ」

「恐怖心は一時的なものだったし、大体はナノマシンでなんとか
るし、実に困った」

「困りましたねえ」

東さんと並んで同じ方向を見た。

「「これじゃあ、医学があるいみがない……」」

東さん曰く、たいていのことはナノマシンがなんとかしてくれてる

らしく、そうとうなことがない限り治療を受けなくても平気な体らしい。

「ナノマシンを生成してる物ってどこにあるの？」

「私は……右目？」

「なんで疑問形なの……」

（仕方ないじゃないか！ 気にしたことないんだから！）

『確かに今まで何も気にしていなかったな、重要なことも……』

阿修羅にもっともなことを言われ、何も言い返せなかった。

束さんは右目を覗き込んで、面白そうにしていた。

「右目って自分の意志で黒から赤に変えられるの？」

「できないことはないですよ、でも私の意志だと左目も変わっちゃいますよ？」

「見せて、見せて〜！」

何が面白くて見たいのかわからない、そんなにみたいならラウラに見せてもらえばいいのに……
仕方なく両目の色を変えて見せた。

「おお〜、ほんとに変わった〜すごいすごい」

「で、私のトラウマってなんですか？」

束さんは不思議そうな顔をして、あごに指をあてて少し考えていた。そして、何かを思い出したような顔をした。

「真央ちゃんにトラウマなんてないよ？」

「はい？」

私は壁に寄りかかっているゼウスをにらみつけた。

ゼウスはすぐさま顔をそらしたので、ポンコツにぼこるように命じた。

「ちょ、まて・・・ポンコツは俺でも抑えられないぞ！」

「肉片とかせ、ゼウス」

そういうとポンコツの右ストレートがゼウスの左脛にクリーンヒットした。

ゼウスはもだえ苦しんだいるのを確認し、視線を束さんに戻す。

「じゃあ、私はなんともないんですね」

ドゴ、ドゴ、バキヤ、ゴス

「うん、ビックリするほど何ともないよ？解剖して調べたいくらいだよー」

メキヤ、ゴキン、

「何怖いこと言ってるんですか・・・」

ブチ、グチャ、ズシャ

「そろそろ止めないの？ほんとにしんじやうよ！？」

東さんに免じて仕方なく、ポンコツをとめる。

本当は、もう三十分くらい続けたかったが仕方ない、織斑先生に言う言い訳を考えながら皆のもとに戻ることにした。

(はく、絶対怒ってるよね・・・どうしよ)

『覚悟を決める、避けては通れない道のひとつやふたつ生きてれば遭遇するだろ』

(よりもよって織斑先生だからな、逃げ出したなるよ)

『・・・』愁傷さま

その後、織斑先生にげんこつと五Kのランニングをもらい、一人悲しく走っていた。

「なんか驚くほど軽い罰でビックリなただけど・・・」

「ほんと、千冬さんってアンタに甘くない？」

「確かにそんな気がするけど、怪我を考慮してるんじゃないの？」

私は鈴と鈴花のサポートにまわされ、しゃべりながら作業を続ける。

鈴は本国から送られた新装備のデータ取り、鈴花は普通の生徒同様、ISの訓練をしていた。

「マアア、いいか、甘ければ出席簿をくらう回数が減るってことだろ？ラッキーラッキー」

「くく！私だつて千冬さんに・・・」

「私なんだつて？」

「まだ死にたくない！」

ドゴオオオオオオオオン！

私は思いっきり横にダイブした、振り返ると織斑先生がデータ板を地面に叩きつけていた。

私がさつきまでいたところは地割れしたみたいになっていて、鈴は腰を抜かして恐怖のあまり笑っていた。

「で？私なんだつて？」

「ええええつと、そう！千冬さんってきれいだなって行ってたんです、ねっ真央！」

おいおい、鈴音さんよ・・・織斑先生が殺気放ちながら君のこと睨んでいますよ？

私は死にたくないなので正直に白状することにした。

「織斑先生が私に対する罰が軽くて、私に甘いつて話を・・・」

「なるほど・・・鳳、神崎は私と模擬戦しようか」

「・・・ええええ！？遠慮しておきます！」

「望むところです！」

鈴は物凄く・・・いや本気で泣きそうになっていたが、世界最強とやれるなんて滅多にないから、つつい受けてたつことにしてしまった。

鈴にすごく睨まれた。

「ではいくぞ」

鈴花に訓練機をかりた織斑先生が近接ブレードを構える、鈴は怯えながら衝撃砲を戦闘モードにシフトしたのを確認し、私はさっそくGNソード？で切りかかる。

「先手必勝、油断大敵！」

織斑先生は近接ブレードで受け止め、奇妙な笑みを浮かべる。

私はそれを見て、血の気がひいた。

「いい覚悟だ」

私はなぎ払われ、蹴りを入れられ海に叩き込まれた。

鈴はそれを見て、回れ右をして瞬間加速イグニッションブーストで逃亡をはじめた。

「無理無理無理！真央でも歯が立たないのに私が相手になるわけないじゃない！」

近接ブレードを恐らく本気で振り下ろされ、鈴と一緒に海に叩き落された。
海に落ちても鈴がくつついていたので浜に出るまでに3回ほど死ぬかとおもった。

「うつ・・・ひいつく・・・」

「鈴、大丈夫？ごめんな・・・私にせいで」

ただ今、織斑先生の模擬戦じゆんから開放され、鈴を慰めている真つ最中。鈴のことを考えて、鈴と一緒に全力で断ればよかったと後悔していると、鈴がやっと泣き止んだ。

「真央・・・あんた覚えておきなさいよ・・・」

「はい、なんでもお申し付けください。」

涙目＋上目遣い&さっきの模擬戦の罪悪感で腹をくくる。
そのまま鈴と一緒に旅館に戻っていった。

第27話「模擬戦は怖い」(後書き)

書いても成長しない自分がすごいと思った

第28話「貴重な体験」(前書き)

夏休み入って書く暇がありすぎて困っちゃうくらいです。

宿題はやりません

第28話「貴重な体験」

「明日帰るのよね？　なんか、もっとここにいたい感じがする」

「まあ、仕方ないよ。いつまでもここに居ると、昏間みたいなことに……………」

「アンタが……………アンタが……………」

「ホントにごめんなさい、なんでも言つてと聞くから」

鈴はため息をついて、食事を再開する。

チラチラ見てくる、それがすごく気になって口にももの入れることから躊躇するくらいだ。

「……………アンタって女よね？」

ぶふう！

盛大にみそ汁を吹き出してしまった。

離れたところで食事してた一夏と鈴花がこっちの心配し始めたのを見て、ジェスチャーで『大丈夫』と合図を送った。

「何言ってるの、男だよ！」

ピクッ

ん？　なんか今、全体的に少し動かなかった？

箒、ラウラ、セシリア、シャルが表現できないくらい笑顔だし、鈴花は苦笑いしていた。

対する鈴はとても冷たい目で私をジーツと見ていた。

「あたしが……海で抱き着いてた時、アンタの胸がムニムニしてた……」

今度は一夏と鈴花と真夏が盛大にみそ汁を吹き出していた。

……綺麗な虹だ……、ビューティフルレインボー！

「男がさ、あたしより胸ある？ 常識的に考えて……」

「うーん……（ムニムニ）わからな……あぶね！」

自分の胸を揉みながら答えたら、スリッパが飛んできたので受け止める。

誰だ！こんなもん食事中に投げたバカたれは！？

「アンタねえ、少しはデリカシーやら羞恥心やらプライドをもったほうがいいわよ？」

「鈴のプライドは今日砕け散ったよね」

「死にたい？」

私は無言で土下座した。

遠くで友達と話してる鈴花に視線を送ると、目が『……アトデネ』と言っていた。

こいつか、投げたのは……

「ふう、まあいいわ。織斑先生を怒らせない様にしなきゃ」

「ごめん、無謀な挑戦は自重するよ」

私と鈴は、残ってる食事を全て平らげた。

「少し外歩こう……」

「ほいほい、仰せのままに」

部屋の外に出ると織斑先生に『皆を混乱させるようなことは言つな、馬鹿者！』と言われ、スリッパではたかれた。

部屋の中を覗くと、私をよく知っている鈴花や真夏に女子が何かを問い詰めていたが、気にせず鈴と旅館のそとにでた。

ザッ、ザッ、ザッ

砂浜を歩くこと数十分、黙っていた鈴が口を開いた。

それまで物凄く気まずかったのはいうまでもない。

「……怖かった」

「へ？」

鈴がこつちを振り返り、私を睨みながら近寄ってきた。

そこで私は初めて気がついた……鈴との身長差が頭ひとつ分とちよっとしかないことを……

「怖かったじゃない！ 織斑先生のあるな殺気に当てられてアンタ平気だったの！？」

「へー、特に何も感じなかったけど？」

まあ、阿修羅の狂気があるから馴れて気づいてない可能性があるんだけどね。

そばにあった岩に腰掛けると、待つてましたと言わんばかりに勢いよく鈴が膝の上に乗ってきた。

鈴は体重を預けてきて胸にほお擦りしてきた、とても眠そうに。

「眠いのか？」

「なんでわかんよ」

「猫みたいで、尚且つさつきから目を閉じたままだから？」

そういいながら鈴の頭を優しく撫でる。鈴は気持ち良さそうに『にゅう』と小さい声を出しながら、次第に動かなくなってきた。

抱き抱えて旅館に戻ろうと立ち上がると、遠くの方で一夏と箒が白い雰囲気で見るとこを発見した。

「一夏と箒か…何してんだ？ 二人きりで」

「なんですつてえ！」

いきなり鈴が飛び起きたので少し驚いた。

さつきまで眠そうにしてたのに、今は目がパッチリで殺気を放つてる。

「あの野郎……よし、殺そう」

「ダメだよ、鈴が手を出さなくても…ほら！」

ラウラとセシリアとシャルがISを展開して一夏のことを一夏の少し上空でみていた、いや…あの目はきつと…殺るつもりなのだろう。

私はあえてオープン・チャンネルを開いた。

「一夏…お楽しみの中申し訳ない、お前はいいやつだった…来世でまた会おう」

『え！？なにその不吉な通信！？』

「今ね、鈴がそっちに飛んで『うおおお！』…遅かったみたいね」

『真央、真央！助けてくれ、こいつら目が本気なんだ！』

ふふふ、恋する乙女の嫉妬をこの私が止められるとでも？

今は性別が女になっちゃってるけど、心は立派な日本男児ですよ。ちよつと前までは性別も男だったんだけどね。

『一夏…真央に頼るなんて…そんなに真央がいいの？』

『この後に及んで、まだ浮気をしようとは…貴様の本妻は私だろっ！』

『調教してさしあげますわ。一夏さん』

『いいいちいかあ！ここで死ねー！！』

『真央つちは誰にも渡さない!』

怖すぎる、織斑先生を呼ぼうかまようくらいだ。
でも呼んだら、鈴が昼間みたいな状態になる可能性があるからなあ。
……あれ? 真夏の声がしたような……

「私は友人の断末魔を聞きながらたそがれるかな」

『鬼だ、鬼がいる!』

通信を切って夜の海を眺める。

発砲音と爆発音と悲鳴がいい感じ、とても心地よかった。

「~~~~~」

「いいご身分だな、神崎」

その言葉に冷や汗が大量に流れる、滝の五倍くらいの勢いで……
覚悟を決めて後ろを振り返ると、案の定織斑先生がいた。

「お、織斑先生……ええっと、その……」

「楽にしろ、あの馬鹿者共を止めに来たんだが、歌声が聞こえてな。
少し聞いていこうと思っただけだ」

「そうですか、それじゃあ……」

織斑先生は隣に腰掛け、静かに歌をきいてくれた。

織斑先生はいい先生だなと思った、はじめからそう思っていたのだ
が再確認した。

「くくくく、ふう・・・スッキリしたああ」

「久しぶりにいい歌が聞けた・・・」

「東さんはよく歌ってますよね？」

「あいつの歌は理解できん」

気がつくくと発砲音と爆発音がやんでいた、一夏達疲れて帰ったのかな・・・？

織斑先生はため息をついて、厳しい顔（いつもの表情）になった。

「そろそろ出てきたらどうだ？」

「ん？敵ですか？」

今はポンコツを鈴花に預けているので、サバーニヤのビームライフルを展開し、振り向きざまに構える。

そしたら、岩陰から一夏、箒、鈴、ラウラ、シャル、セシリアがぞろぞろと出てきた。

真夏はいない、うん・・・さっきの声は空耳だったか

「あれ？どうしたの？」

「いや、逃げてる最中に歌声が聞こえて・・・」

「聞き入っちゃって・・・」

一夏とシャルが答えると他もうなずいた。

鈴は私に近寄ってきた、とてもいい笑顔だった、まぶしいね・・・
何があったのやら

「お前らは無断外出した、覚悟はできているな？」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

「もちろんです」

一夏達に勇者を見る目で見られた。
覚悟なしでくるほどバカじゃないよ

「神崎は別だ、偶然とは言えこいつらを止めたからな」

「いえいえ。ちゃんと罰はつけますよ」

不公平になりそうだし、変な言いがかりつけられたくないしね！
皆でうければ怖くない精神だ。

「そうか、それでは一人ずつかかって来い、暴れたりないだろう？」

はい、きました。一夏達は少し後ずさったので自然と私が一夏達より前になった。

これは私が最初にやるのかな？

「神崎・・・お前が最初か？」

「そうですね、この場合」

体勢を低くし、手に持っていた棒を投げつける。

織斑先生は見事にキャッチし投げ返してきた。

「おわ！あぶな」

砂と一緒に蹴り上げて、防御兼目くらましをした。

距離をつめて織斑先生と取っ組み合うが、力量の差は明白なわけで一本背負いで海に投げ込まれる。

「やっぱりなあ、だがしかし！」

次は誰だと一夏達のほうを見ている織斑先生に、履いていたサンダルを飛ばす。

ひとつは一夏の頭に当たり、もうひとつは織斑先生の背中に軽く当たったのが見えて、海に落ちた。

（くそー、一発当たらなかった！）

《一発当たっただけマシだろ・・・それと傷開いたぞ》

なんかやたら海水がしみると思ったら、傷開いてるのね。

鈴花に怒られる・・・帰りたくないな。

割と息がもつので水面に上がらずに海の中を堪能することにした。少し時間がたつと苦しくなってきたので、浜に上がった。

「ふう、気持ちよかったなあ、海の中は」

振り向くとボロボロの六人と、なにやら安心したような空気を纏っている織斑先生がいた。

私に気がついた鈴が飛び込んできた。

「ぐふう！」

「あんたさっさと上がってきなさいよ！心配したじゃない」

「ご、ごめん・・・数分もぐってただけで、こんなに心配されるとは思わなかった」

鈴が心配そうに体を触って怪我してないか調べる。伸びていた五人も立ち上がり、近寄ってきた。

「真央大丈夫か？」

「十分ももぐりっぱなしだったから心配したよ」

「ああ、全然大丈夫」

心配されるのっていいね・・・これから怪我ばかりしようかな。てか、鈴の触り方がくすぐりたい。

「傷は開いてないだろうな？」

「教官のいうとおりだ、まだ治ってないのに無茶をするな」

「す、すいま『あああああ！』どったの？」

鈴が私の横っ腹を触った手をみせてきた。

まっかつか、まるでトマト、もしくはケチャプみたいだった。

鈴に触られたので浴衣が血で染まってきた、あの赤い粒子は人体に悪影響を及ぼすって阿修羅に言われたが、まさかナノマシンの修復機能と自然治癒力を大幅に低下させるとは恐れ入る。

束さんは、他にも影響がでるかもしれないって言ったな。

「何が全然大丈夫よ！傷もろひらいてんじゃない！」

「織斑、神崎を背負って保険室のところにいけ、デュノアとボーデヴィツヒは保険医に報告し急いで準備させる」

「了解」

ラウラとシャルはなぜか全力疾走していった。

代表候補生ってみんなあんなにはやいのかな？、絶対百メートル桁だよ。

「ほれ、乗ってくれ」

「あ、うん・・・なんか悪いな」

一夏の背中にのると、一夏の体温が五度くらい上がった気がした。耳も赤いし、熱があるなら背負われるわけにもいかないんだけど・・・

「一夏大丈夫か？顔赤いぞ、降りようか？」

「いや、気にするな！平気だ、あはははは」

なんだか心配なので顔を覗き込む

むにゅむにゅ

「・・・／／／」

「真央・・・胸押し付けてる」

「おお！これが原因か、ごめんごめん」

「いや、・・・すまん」

謝られた、こっちが悪いのに・・・良い奴だ。

一夏はゆっくり歩き出したら、前からラウラとシャルが帰ってきた。どつやら準備できたらしい、速いね、足も作業も驚くほどに・・・

「神崎、すまない・・・」

「織斑先生のせいじゃないですよ、自分から頼んだことですので。それで鈴はいつまで私と手をつないでるの？」

「・・・(ギロツ)」

「すみませんでした」

旅館に戻って治療を受けるため、保健室に入ると山田先生がいた。すごく危険な香りがした。

「ラウラ、ライターとか持ってない？」

「ああ、もってるぞ、ほれ」

ラウラからライターを受け取り、火をつけ傷に近づける。

『痛そうだなあ』とか内心思っているが、山田先生に治療つけるよ
りマシだろう。

「「「「なにやってんの!?!?!?!」」」」

「傷を焼いてふさごうかと……」

「バカなことやってんじやないわよ!」

怒鳴られライターを取り上げられた。

山田先生もなんかほっぺ膨らましてるし。

「あの、山田先生……」

「なんですか?」

「や、優しくしてください……」

「え!?!?べ、べつにそういうことをしようとしてるんじゃないんですね……」

「山田先生だと傷が増えそう」

ぷくっ!

山田先生がふくれてしまい、織斑先生がくるまですねっばなしだった。

そのため、貧血になったのをみんなにはれないようにやりすごした。ばれたら、また騒がれちゃうからね。

「あー、疲れた……もう寝よう」

「もう、なんで無茶ばかりするんの？」

冒険しようとしたら、鈴に身柄を拘束され鈴花に身柄を引き渡された。

まさかあそこでポカリ○エツトが飛んでくるとわ……

布団にもぐりこんで目を瞑る、そうしたら軽く寝れた。

「あれ？どこどこだ？」

目の前に大きな川があった、明らかに渡ったらもう現世に戻れなさそうな感じがした。

だが好奇心がすべての感情より勝ることが多い私には渡ることはたやすい。

「さあ、未知なる聖地にレッツゴー！」

「まて！」

後ろを振り向くと、両目が赤く髪は真っ黒の……そう、狂気にのまれた私にとても似ている。

ということは、この人物は必然的に阿修羅だということになる。

「なんだ？こんなとこまで、帰った帰った」

「俺とお前は一心同体だっていったよな、お前が帰らないと帰れないんだよ！」

「仕方ないなあ、また今度にするか・・・ほれ、帰るぞ」

「たく、お前は三途の川すら平気で渡ろうとするとは思わなかった。」

バカにされた気がするけど、気にしなければどうってことない。

神崎流スルー術だ、教わりたい人はいつてね！てきとうに教えます川と逆方向に歩いていくと強い光にのまれた。

「んー、あれ？」

気がつくとバスの座席の上にいた、なぜか点滴と心拍数をつける病院とかで死にそうな人がつけてそんな機械と酸素マスクがついていた。

えっ？私死にそうだったの？じゃあ、あれって夢じゃなかったってことか・・・渡んなくてよかった。

《ほんとに危なかった・・・自重しろ！》

(ごめん、悪かったと思っている)

ポトポト！

何かが落ちる音がしたので、そのほうを見ると鈴がいた。持っていたペットボトルを落としたままかけよってきた。

「真央、大丈夫なの！？気持ち悪くない？」

「ああ、うん。今回は本当に平気だよ」

鈴は皆に私が目を覚ましたことを告げてから、不要な道具を片付け

でした。

まだ半分頭が働かない状態だけど、鈴だけにやらせるわけにもいかない。なので体をゆっくりおこす。

「私も手伝うよ、鈴」

「何言ってるの！？あんたはねてる！」

「私も手伝うから神崎さんは寝てて！」

「専用機持ちは神崎さんが無茶しないように見張ってて！」

すごい反応だ、これは当然、ハチャメチャなことはできないな・・・しかし、心配してくれてるのはうれしいが少し傷つくな。

「ママ〜これ着て寝てて〜」

「あつ、ありがと・・・うっ？」

のほほんさんのくれたパジャマは狸の着ぐるみみたいだった。これはポンコツといつも一緒だからかな？

「ええつと・・・」

「着てくれないの〜？」

「いや、着替えてっごこでするの？」

「もちろん！」

私はあきらめ、服を脱ぎ始める。
周りからの視線がすごく痛い、我慢して上を脱ぐ。

「真央ブラしてないの!？」

「あれね・・・違和感があって落ち着かなくて」

「隠して隠して!」

「織斑君はあっち向いてて!」

一夏は織斑先生のヘッドロックくらっているから平気だろう。
ブラしてないだけでここまで騒がれるとは・・・

「ママ、大胆だねもんでいい?」

「のほほんさん、いい加減そのあだ名やめよ」

「ええ、じゃあサキちゃん」

なるほど、神崎の崎の部分を抜き取ったのか、なかなかやるなあ。
のほほんとしてるけど、この人は実は大物なんじゃないのか?
そうしてるうちに着替え終わる。

「おお、サキちゃん似合うよ、狸サキちゃんの写メゲット!、これ
からその姿はためサキモードだ!」

「布仏さん、私にその写メ送って!」

「本音、私にも!」

「私にも」

へー、布仏本音っていうのか・・・初めて知った、これ本人にいったら怒るよね、きつと・・・。

鈴が帰ってきた、あー、そういえば・・・

「そういえば、なんで私はあんな状態になつてたの？」

その一言でまさかバスの中の空気が凍り付いて、何を思い出したかわからないが泣き出す人もいた。
というか鈴が泣いていた。

「だ、第一回！、ガチンコカラオケ対決！」

「・・・・・・・・？・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「いえーーーーーい！！！！」

物凄い罪悪感におそわれ、場の空気を持ち直そうと普段しないことを提案し、帰りのバスの平和は守られた。

第28話「貴重な体験」(後書き)

~~~~~

暑い、最近暑すぎる

第29話「お前っていう人間は！」（前書き）

最近、期待ハズレ絶不調です。

なんだかうまくいかない

第29話「お前っていう人間は！」

臨海学校から帰ってきて随分たち、ちょっと遅めの夏休みに入っていた。

今日は真央に親友の弾を紹介しようと、出かける約束していたのだ。

「真央、起きろ！」

「うにゃ…殺……………す」

何か物騒なこと言われた気がするな……………きつときのせいだ。

真央を起こすのは一苦労だ。

きつと手榴弾を近くで爆発させても起きないだろう。

……………それが起きて爆発させた奴を殺すかも……………

「う……………ん……………」

ギョッ

「ん？ って真央、何抱き着いてんだ！？」

寝ぼけているのか、真央が抱き着いてきた。



(柔らかい何かがあたっているんだが……)

そうしていると真央に腰に手を回されたまま寝返りをうたれ、自然と添い寝してる状態になった。

俺は鈴花が言っていた言葉を思い出す。

『真央をバカ正直に起こそうとすると中々起きないけど……役得だよ！ 真央可愛いし』

こんなところを箒達に見られたら間違いなく殺される、特に鈴に。鈴は臨海学校のと時から真央に懐いていた、帰りの時にサービスエリアで真央をナンパした男3人を一人で潰していた。あの時にもう鈴を怒らせるのをやめようと誓った。

「真央、起きてくれ！頼む、死にたくない！」

「んー、ん？ 一夏なにしてるの？」

真央が眠そうに目を開けた。

一夏は死なずにすんでホッとした。

「今日出かける約束したろ？ だから起こしに来たんだ」

「あー、なるほ……………」

あれ？ 目を閉じたぞ……………なんか寝息聞こえるし

「真央？ おーい真央？」

「すう……………すう……………」

どうやら二度寝したみたいだ、「仕方ないなあ」と真央の頭を撫でながら少しだけ寝かせることにした。

これはこれで役得なので寝顔を見ながら至福の時間を堪能しようとした……………

ドギヤアン！

「……………」

……………だがしかし、それを許さないのが専用機持ちであり、恋する乙女なのだ。

一夏は体中から冷や汗が滝の様に流れ、頭には走馬灯が流れた。

「……………ねえ一夏あ、真央に何やってんの？」

「フフ……………フフ……………」

「覚悟は出来ているな？」

「私の嫁としての自覚が足りん、体に教えてやるっ」

「一夏が寝ている人にそんなことするなんて思ってなかったよ……  
殺らなきゃいけないね」

セシリア、箒、ラウラ、シャルの瞳には光が灯っていなかった。  
鈴は怒りのあまり真顔だったので凄く怖かった。

「……さあ、死ね!」

鈴を除いた四人が飛び掛かって来る。

死を覚悟したその時、寝ていた真央がゆっくり起き上がって一言。

イノチシラズハシネ

そういうと真央は箒の日本刀を受け流し、腹に蹴りをいれて後ろに  
いたセシリアにぶつけた。

ラウラとシャルはそれを見て後退しようとしたが、ラウラにローリ  
ングソバットが直撃しシャルも巻き添えをくらい箒とセシリアの方  
に吹っ飛んだ。

ドアの近くにいた鈴がいなくなっていたがそれどころではない。

「ま、真央! 落ち着け、どうしたんだいきなり!？」

「コイツらは私の睡眠を邪魔した……万死に値する」

一步……たった一步だけ真央が歩みよると箒達は「ヒィィィ」と言い震え出した。

セシリアと箒は口をパクパクさせていて、シャルは必死で謝っている、ラウラは涙目になりながら土下座をしていた。

「神崎、その辺にしておけ」

千冬姉のご登場、箒達はすごく嬉しそうだ。

俺は千冬姉に睨まれた、目が「自重しろ」と言っていた。

「なぜです？ 奇襲をかけられ、ただで帰せとおっしゃるのですか？」

「あとは私がやる、お前はやりすぎる時があるから危険だ」

「部外者は口を挟まないでいただきたい」

真央の言葉に千冬姉はピクツと体が動いき、すごい殺気を放ち始めた。

箒達が「どうにかして！」と目で訴えてきたがどうにもできない。

「ほう、なら実力行使で止めるまでだ！」

千冬姉は一瞬で真央の間合いに入りこみ、腹に一撃入れた。

俺は千冬姉に何度かやられているのでどれだけの威力かわかる。  
軽く昇天するくらいだ。

「で、終わりですか？」

「なっ！！？」

千冬姉の一撃を受けたのになんともなさそうにしている真央を見て  
啞然する。

千冬姉は険しい顔になった。

「私も行きますよ」

「くっ！！？」

千冬姉は危険を感じたのか、入口まで飛びのいたが真央は、すぐそ  
こまで迫っていた。

「なに！？」

真央の左ストレートが千冬姉の腹にあたりそうになったその時、二人の間に黒い影が入り込んで真央を窓まで吹き飛ばした。

「真央……何してるの？」

鈴花が自分の手を握りしめながら冷たい目で真央を睨みつける。

「ま、間に合ってよかった」

少し遅れて鈴が入ってきた。

どうやら鈴花を呼びにいつていたらしい、ナイスだ！鈴が天使に見える！

真央は鈴花の右側に回り込み、抱き着いた。

「えっ！ ちょっと……」

鈴花は体勢を崩してベッドに倒れた。

真央は鈴花の胸にほお擦りをしている、とても嬉しそうだ。

「うにゅー、すずうかぁ」

「……………」

篤達と千冬姉は啞然としていた。

俺は少し外をみる。

理由は簡単だ、真央は鈴花の胸にほお擦りしているのだ。

そのため……まあその膨らみが揺れるわけで……いけない感情も出てくるのが思春期の男子なのです。

なぜか少し空気が変わったのを感じて真央の方を見ると、悪い笑みを浮かべる束さんが真央の後ろに立ち、緑色の液体の入った瓶を持つていた。

「真央！後ろ！」

「スキアリ！」

「もがあー！」

束さんは真央に無理矢理薬を飲まさ、とても嬉しそうにしている。

「なんですか！？？」

「男子になる薬だよーん　どっどっどっ？変化ない？」

真央SIDE

少し待つこと15分後

「あの、身長が少し伸びたのはいいんですけど、胸が成長したんですけど、おまけに……（もっもっ）」

「あれ？ おかしいな、でもムラムラするんでしょう？ 成功だよ！」

「真央、姉さんがすまない」

「箒！？ 日本刀抜いて実の姉になにするきだ！？」

「離せ、一夏！ こいつをやらねば真央がおかしくなる！」

なんでこんなことに……早く男に戻りたい。

箒と鈴とセシリアと織斑先生が逃げ出した東さんを追っていった

「真央大丈夫？」



「大丈夫じゃないよ鈴花、体がほてって……」

今の私は顔が赤いだろう。

自分で遠回しに欲情してますなんて言うことがあるとは思ってなかった。

「大丈夫？ 体調悪いの？」

「さつきはすまなかつたな、あの薬はなんだったんだ？」

シャルとラウラがよってきた。

(シャルって結構胸おっきいな、ラウラもこれはこれで……って  
違う！)

《束にやられたな、一夏に抱いてもらえばいいんじゃないか？》

ポツと顔が赤くなったのが自分でもわかった。

それを見て、シャルとラウラは束拘束員の仲間に入って、飛び出していった。

「なあ真央、熱でもあるのか？」

「ないよ、欲情してるだけ」

「「えっ!?!」」

一夏と鈴花が驚いた。  
私も驚きだ、もうウズウズして耐えられるのかわからんくらいです。

「我慢できない……かも」

「まてまて！はやまるな！」

「真央が男だったら私がやるのに！」

「一夏あ……その……」

「それ以上言うな！ あ、ほら学食いこう！」

「ここにいる男子は一夏くんだけ、女の子の状態の真央を満足させられるのは……」

「やめろおお！ それ以上言うなああ！」

「紅茶 伝のミルクティー買ってきて……」

「はい？」

一夏と鈴花はなんだかわからないような顔をしている。  
それかハトが豆鉄砲くらったような顔？  
仕方ないからもう一度言うか。

「紅茶 伝のミルクティー」

「真央、欲情してるって……」

「物欲」

「「紛らわしい言い方するな（しないで）！」「」

二人のげんこつをくらい、その後ミルクティーをもらった。  
結局、束さんは捕まらなかったらしい。

第29話「お前っていう人間は！」（後書き）

真央「……………」

鈴花「真央ー、手伝ってあげる！」

真央「え？何をひゃあ！」

鈴花「物欲って嘘でしょ」

真央「あ、ちよっ……」

鈴花「ふふふ、楽しい夜になりそう」ペロッ

真央「一夏あ！助けて！」

### 第30話「リターンズ」by夏

チュンチュン

「真央の奴、大丈夫か？弾がすごく楽しみにしてたから今日はつれてかないと」

着替えながらそんなことをつぶやく、なぜ弾の所にいかなければいけないのかと言うと

3日前

『お前、真央って子の話題が多いがどんな子なんだ？』

『いい子だぞ、可愛いし天真爛漫なところがある。ちょっとだけ』

『そういう子が好みなのか！？』

『まあ、一緒にいたら癒されるな。今度つれてこっか？』

『いいのか！？ よっしゃー！ 楽しみに待ってる！』

『あ、ああ まっつけ』

というわけでつれてかないと弾がすごい落ち込む。

真央の部屋の前に行き、ドアをノックするが返事が帰ってこない。  
まあ、真央は寝ボスケだから当たり前前なんだけどな

「入るぞ？ 真央、起きてるか？」

中に入り、ベッドを見る、鈴花&真夏が真央のベッドで寝ていた。  
(すっぽんぽんで)

「おわっ！」

回れ右をし、状況整理をし始めた。

(ここは真央の部屋……だけどベッドには鈴花と真夏がいる……肝心の真央がない……どうしたら「ガチャ」ん？)

シャワーのドアが開く、そこには白のワンピースを着た真央が頭を拭きながら一夏を不思議そうな目で見ていた。

「おはよう、一夏。どうしたんだ？ そんなところで突っ立って……  
もっと中に入ればいいのに」

「いや！ 遠慮しとこう！今日は弾のそこに行くから準備できたら

出てきてくれ！」

「ん？ 了解」

俺はそそくさ部屋の外に出て、すっかり女の子らしくなったなあと思いつつ真央を待った。

「なんで鈴花と真夏がすっぱんぽんでここにいんのー！？」

なんだ……真央もいること知らなかったのか、じゃああの二人はシヤワー浴びてる間に入ったのか……真央一人部屋だし都合いいもんな少ししたら真央が出てきた。顔が赤かったが気にしなかった。

「それじゃあいくか！」

「ほいほい、レッツツラーゴー！」

そのまま歩きだし、真央はウキウキしていた。好奇心が強すぎる真央にとって新しい出会いなどなんでもないので。

その後、電車にのりバスにのり……弾の家についた。

「着いたぞ、真央」

「おお！ 食堂って書いてあるぞ」

着目するところが違うと思ったが気にしたら負けだろう。

真央だから仕方ない。

中に入ったら弾が待ってましたと言わんばかりに飛んできた。

「一夏あ！ 待ってたぞ、楽しみで夜もねねなくらい！」

「あ、ああ…それはよかった」

「おお！ 髪が長いし赤い！ どこぞの貴族みたいだ」

真央がヒョコツと俺の後ろから満面の笑みを浮かべながら顔を出し、弾の第一印象を言った。

「……………！……………！」

「弾、落ち着け！ まずはお前の部屋に行こう」

混乱状態の弾をつれて弾の部屋に入り、落ち着かせる。  
その間、真央は座りながら落ち着かない様子でキョロキョロしていた。



「ふう……一夏すまん、少し錯乱した」

「気にするな、じゃあ紹介するぞ」

「お、おう……」

ダメだ。まだ少し真央に褒められたときのダメージが残ってる。まさか嬉しすぎてダメージをくらう奴がいるとは思わなかった。

「この子が神崎真央、同じクラスで結構頭もいいし専用機持ちだ」

「よろしくですー!」

「で、こいつが五反田弾、中学で知り合ったんだ」

「よ、よろしく……」

うーん、弾の奴緊張してんのか？なんか堅いなあ……

（おい、一夏！　なんだこのくそ可愛い子は！？）

（あれが真央だよ、結構危なっかしいから気をつけなきゃいけないんだ……気づいたらいなくなってる時もあるし）

（そ、それって……守ってあげ……うがああああ！）

ダメだ、弾が壊れた。  
真央の笑顔って結構破壊力あるんだな……

すると真央が弾に近づいていく、目がキラキラしていた。昨日のデスマードとは正反対だ。

「弾くん、髪の毛触ってもいい？」

「えっ？ あ、はい」

唐突で弾は訳もわからずに了承していた、真央は嬉しそうにそっと髪の毛を触り始める。

真央は髪の毛を触って何やら驚いていた。

「すごいサラサラ〜いい臭いだよ！」

「おお！ そういつてくれるのはお前だけだ！」

弾が復活したのを見て、俺は安心した。

正直、終始弾が真央に馴れないのかと思ったくらいだ。

「一夏！ エアホッケーで勝負だ！」

「今連敗中のもので挑んで来るとは……うけてたっ！」

なぜか弾がやる気に満ちていて後ろに昇り竜が見えた。  
今日は一筋縄ではいかないかもしれない

「弾くん頑張つてー！」

「おう！見ててくれ」

「いくぞ！ 弾」

……。  
……。  
……。  
……。

「くそ！一夏め、ここまで腕を上げているとは……勝利の女神がっ  
いていたというのに！」

「半分以上が自殺点って何だよ……真面目にやれ」

昇り竜は気のせいだったみたいだ……。  
真央は終始弾の応援していて楽しそうだった。

「一夏、今度は私もやる！ 弾くんのかたき討ちだ！」

「おう、いいぜ！ 返り討ちだ」

.....  
.....  
.....  
.....

「な、なぜだ!？」

今、俺は追い込まれていた。設定を20ポイントで1ゲームの3ゲームマッチにしていたのだが圧倒的なやられ方をしていった。

真央——一夏

ゲーム 1・0

ポイント18対0

「ほら、そこ！」

カコン!

「まだまだ！」

コート全体を見ると左側が空いていた。チャンス！真央め、くらえ！

「そこ！」

カコン

「またかかったね、一夏」

ガコン！

ガチャン

「あっ！？」

「ただ……真央はどうやらわざと隙をみせてカウンターでとどめを刺すというのが好きらしい。」

「1ゲーム目もそれで1ポイントも取れずに終わっている。」

「今度こそ！ 1ポイントとる！」

「来なさい！ 弾き返して、弾くんの仇を打つ！」

「いや、もう十分とれてると思いますが……」

カコン

「必殺！」

「なあにい！」

「インビジブル太陽に飛んでいけ目視不可ショット！」

「スケールでええええ！」

しかもホッケーがほんとに消えた？どこだ！？

「ちっちっちっ、一夏はもうすでに負けている」

「な！？ ホントだ……入ってる」

なんて必殺技だ……目視できないなんて、どこで覚えたんだ？

真央は弾の仇うちを成し遂げ、弾と喜んでいた。  
そんなとき、ドアが蹴破られた。

ガン！

「お兄！ ご飯出来たって……彼女？」

あつ蘭だ、ちなみに弾の妹である。  
しかし、女子のラフな格好には見慣れたものだ。

「あつー夏さん……来てたんですか!？」

「ああ、真央を弾に紹介する約束しててな」

「真央？ この人のことですよね？」

そつえば蘭にはまだ紹介してなかったな、いけないいけない

「ああ、神崎真央って言うんだ。ちなみに同じクラスで専用機持ちだ」

「ええつと神崎真央です。お兄さんとは今日知り合っただけでそういう関係ではないです。ちなみに国家代表候補生でもないです」

「あ、五反田蘭です。学校では生徒会長やっています。」

ん？ 真央なんか蘭のことジーツと見てるけど、どうかしたのか？

「あの真央さん、私の顔に何かついてますか？」

「うっん」

そついい、真央がこっちを向いた。

俺はいやな予感がした……

「一夏、この子は可愛いんじゃないよ！」

「えっ……」

真央の発言に蘭が俯く、俺は真央を睨みつけたが真央は言葉を続ける。

「この子はすごく綺麗なんだよ！」

「……はい？」「」

予想外の言葉に俺と弾と蘭は思わず聞き返してしまった。

「だから！ P r e t t yではなく、B e a u t i f u lなの  
」！」

「き、綺麗だなんて……真央さんはお世辞がうまいですね」

「お世辞ではなく、本気なのです。これだけは譲れない、蘭ちゃんナンパには気をつけてね！」

（なあ、一夏……真央って無邪気だな）



( だろ？ あの外見で好奇心旺盛、一時的に勘違いさせといてすぐにひっくり返す )

( ああ、守ってやりてえ…… )

言えない……絶対に言えない……実は真央は俺よりずっと強く、千冬姉の一撃をくらってもびくともしないし、千冬姉の動きについていける……なんて死んでも言えない。

真央が蘭にジャレ始めたので止めて、1階に降り昼食をもらおう。

「うます！ ベリーうます！」

「それはよかったです」

窓側の席だからか、外から真央を見て店に入ってくる人が多い。すでに行列が出来ていた。

「なんだ？、真央一人でこんなに人が……」

「今まで一緒にいたがこんなに影響力を持ってたなんて」

俺と弾は驚きながら、飯食べる。  
ものすごい視線が真央に集まる。

「なんで見んな、こっち見てるの？ 蘭ちゃんのファン？」

「いえ、おそらく真央さんのことを見てるのでは……………」

「そなの？」

首を傾げて近くの男性に声をかけたら、男性は顔を赤くして頭を横にすごいスピードでふつた。

そして真央は視線を移動させ、弾の後ろに座ってこっちを見ていた女性に微笑んだ。

女性は顔を真っ赤にして視線をそらした。

「蘭ちゃんのいうとおりみたいだね」

「真央は鈴花がいないとハメを外しすぎるからな、少しは気をつけるよ」

真央は鈴花にとことん忠実で、鈴花の言うことはほとんど聞く。

ポンコツも真央に忠実だが、真央はポンコツを鈴花に預けているから頭に乗ってることがなくなった。

だいたい鈴花が抱き抱えてるって感じた。

「鈴花さんって？」

「真央の親友？ でいいのかな？」

「お姫様だね！」

「だつてさ」

ここに鈴花がいたら顔がさっきの男性と女性と同じ用に顔が赤くなつていただろう。

人がいつぱいになったので真央が「店を手伝う！任せときんしゃい！」と言つので、その日の五反田食堂は今までにないほど大儲けした。

「蘭ちゃん、弾くんまたねー！」

「はい、また着てください！」

「いつでもどんなときも来ていいぞ」

「じゃあ、帰るか」

「よーし！レッターゴー！」

別れの挨拶を済まし、歩きだす。

真央は満足そうだった。

第30話「リターンズ」by夏(後書き)

—夏目線で書いてみました。

第31話「真央は渡さない！」×4

「ふわああああ・・・」

「眠そうだな、ちゃんと寝てるのか？」

現在、真央と一緒に朝食をとっている。

なんでも最近、鈴花は束さんと一緒にどこかに行ってしまうらしく、とても暇で暇死しそうなんだと。

「一昨日はハルトの、昨日はラファエルのメンテナンスしてたからあんまり寝てない」

「大変だな、もう戻って寝るといいぞ」

「一夏は今日どうすんの？」

「俺か？俺は家に帰って掃除とかしようかと」

そついうと真央が眠そうにしていた目が完全に覚醒した。  
もうこの笑顔で何かねだられたら断れないなあ

「じゃあ、速く行こうか！掃除手伝うぞ」

結局こうなるのか、まあ手伝ってくれるのは助かる。  
真央は結構万能で家事もすべてこなせる。一家に一台ほしい

「じゃあ行くか」

「いえーい！」

食堂を出て、私服に着替えて真央と俺の自宅に向かった。

.....  
.....  
.....  
.....

「いやー、一夏の家はなんだか落ち着くなあ」

「まさか家に帰ってくるまでに10人にナンパされ、全員一撃で倒して金巻き上げるとは.....」

あれはすごかった。

話しかけられ、さわられた瞬間に「糞野郎撃退ナックル」といって一撃で沈めていた。

俺にいちやもんつけてきた奴も「調子に乗るなパンチ」で消し飛ばしていた。



思春期真っ盛りの高校生の男女が一つ屋根の下で寝るなんて、千冬姉に知られたら間違いなく鉄拳を何発かくらうことになるだろう。しかし、真央は本気で戻る気がないらしい。戻って鈴花に相手してもらえないのがいやなんだろう。

「しかたないなあ・・・今回だけだぞ」

「やぶ、ありがとう、あっ夕飯作っと言だよ」

台所にいくとオムライスが二つ置いてあった。

こいつ最低でも夕飯食って帰るつもりだったな・・・まあ笑顔見れるからいいけど  
オムライスをテーブルにもっていく。

「いただきます」

パクッ・・・モグモグ

「おっ！うまいな、女子とか好きそうだ」

「少し甘くしてるからね、一夏は普通のがすき？」

「真央オリジナルの方が型に嵌ってない感じで好きだぞ」

「それはよかった！」



オムライスを食べ終え、片付けをしたあとに真央に「白式みせて」といわれたので展開し、そのまま真央にメンテナンスしてもらい、俺は寝かせてもらった。

チュンチュン……

「んー、今日もいい天気だな……真央はっと……」

「おお……一夏、白式のメンテ終わったぞ……」

「すごい眠そうだな、俺の部屋ですこし寝ろ」

「うん、ありがと……シャワー浴びてからにする」

ぼてぼてと歩いて風呂場に向かう真央を見送り、白式を待機状態のガンドレットに戻す。

昨日の掃除で出たゴミが詰まっていた。捨てにいかなきゃな……そういえば、食材切れてた、捨てに行くついでに買いに行つて来るか

「真央！ゴミ捨てのついでに買い物してくるけど、何かいるか？」

「おっふゃい！ミルクティーがほしい！」

なんだか真央は風呂に入って元気になっていた。  
無限のスタミナの持ち主だ、体壊さなければいいけど

「あつついなあ、プールにでもいこうかな？」

とつと捨てて買い物を買わないと真央が腹減らすから急ぐか  
俺は急ぎ足で歩き始めた。

「真央サイド」

「おお！風呂に張ってある水で卓球するのって意外と面白いな！」

パアシユ、カコン、パアシユ、カコン

「いくぞ！バ〇テス直伝、スト〇イカーシ〇マ?!」

パシユン、パキヤン！

あらら、ピンポン玉が割れ散ったよ。

ゴミを回収してそろそろでるか、一夏は買い物にいったし寝るか

風呂から上がり、ゴミ箱にピンポン玉だったものを捨て、一夏の部屋に入る。

「なんだろう、お腹減ったなあ・・・でも食材ないし・・・一夏が帰ってくるまで待つのか、寝れるかなあ」

私は押入れに入り、丸くなって目をつぶった。

(あ、寝れるわ・・・これ)

「すう・・・すう・・・すう・・・」

《寝るのはやいな、こいつ》

「一夏サイド」

「ふう、そろそろ家につくな・・・ん？」

俺は買い物を済ませ、帰路について少したった。

家の前にシャルが立っているのがみえた。インターホンならしても真央は寝てるはずだから出るわけないか・・・

「よう、シャル。何してるんだ？」

「ひゃあ！い、一夏？」

「お、おう」

いきなり声かけたから、驚かしたか？すまないことをした。

「まあ、ここにいるのも何だから中に入れよ」

「え？いいの？」

「？ああ、いいぞ」

「えつと、お邪魔します。」

シャルがよそよそしく家に入る。別に千冬姉がいるわけでもないのに・・・真央はいるけど

シャルはソファーに座り、部屋をみわたしていた。

「綺麗だね、それになんかあったかい感じ・・・」

「昨日掃除したからな、麦茶でいいか？」

「あ、うん。ありがとう」

ピンポン

お、誰かきたみたいだな。

「悪い、少し出てくる」

「あ、うん」

シャルがなんだか残念そうにしていたが、どうしたんだろ？  
玄関をあけると、金髪のどこかのお嬢様を思わせる服、セシリアが  
いた。

「一夏さん、こんにちわ。たまたま近くを通りかかったのできてみ  
ました」

「ああ、セシリア。いらっしやい」

セシリアを中に案内する。

「「あつ・・・」」

シャルとセシリアが同時に声を上げる。  
何かおかしいことでもあったのか？

「どうしたんだ？」

「な、なんでもない（ですわ）」

「そ、そうか」

「ケーキを持ってきましたんですが、ご一緒にどうですか？」

セシリアが手に持っていた箱をテーブルに置いた。

セシリアがもってきたことは、高級の店のケーキなんじゃないのか？

なんか、悪いなあ・・・

「夏あ、入るわよ？」

「「げっ」「」

シャルとセシリアが変な声をあげたので、振り返る。

「鈴に筭、ラウラまでどうしたんだ？」

「「「遊びに来た」「」

俺の家は一気ににぎやかになった。あと少しでにぎやかなレベルをこえそうだ。

そういえば、真央はまだねてるのか？

セシリアが持ってきたケーキを皆で食べながらそんなことを思っていると、リビングと廊下をつなぐドアがひらいた。

「ひいちゃあ！」「ひいちゃあ！」

いきなり開いたので驚いてドアから離れるセシリア達におどろいた。すると後ろから、怒りが混じってる声がきこえた。

「人が空腹を我慢して寝ているのに、お前は楽しそうにケーキ食いやがって……」

「真央！落ち着け！ あっそうそう、ミルクティー冷蔵庫だぞ」

「おお！センキュー」

ふう、真央の機嫌が一瞬でなおってよかった。ん？鈴の目に光がやどってないぞ？

「ねえ……真央、いつからここに？」

「昨日からだよ、掃除とかした」

「二人で？」

「もちろん」

「夜も？」

「うん」

まずい、これはまずい。

ラウラはサバイバルナイフ、箒は日本刀を出した瞬間、ドアがまたひらいた。

「この家にいるかぎり、争いごとはやめてほしいな」

「……お、織斑先生……」

「神崎、愚弟が変なことしなかったか？」

「されてないですよ、私がオムライス作ったくらいで」

千冬姉は「そうか」とってリビングから出て行った。そのあと少し仕事ができたと家を出た。

パク、モグモグ



「うます！」

「よかったね、真央」

鈴は真央に膝枕してもらっていた。

シャルはちらちらこっちをみてくるし、本当にどうしたんだろう。

「一夏、少しいいか？」

「ん？ああ」

ラウラが俺の膝に頭をのせた、シャルはそれを見て自分のケーキを一口サイズにきって「あ、あーん」といいながらさしだしてきた。

「あーん」

パク、モグモグ

「これはこれでいけるな！」

「そ、そう？よかった」

箸とセシリアに睨まれた、いつもより気迫がなかった。

きつと真央を怒らせないようにしてるんだろう、ここには鈴花がい

ないし

今日は平和に時間が過ぎていった。

次の日

「ふう、IS学園の寮のエアコンは高性能だなあ」

コンコン

「ん？はい！」

ドアを開けると真央と鈴花とのほほんさんがいた。

「一夏、昼食べたいっしょー！」

「おお、いいぜ」

「「いえーい！」」

のほんさんと真央がハイタッチをした。  
ん？真央が狸のパジャマきてる・・・珍しい

「あのパジャマは真央の感情によって動きが変わって可愛いんだよ  
！」

なるほど、鈴花がきせたのか。  
狸と狐が仲良く並んでしっぽを振っている姿はホントに可愛らしかった。

食堂について、食事を受け取りせきにつくと鈴と真夏がやってきた。

「一夏、真央のことどう思ってるの？」

「可愛いと思うぞ？」

「真央うちと二日間なにしてたの？」

「特になにもしてないぞ」

「サキちゃんとあんなことを・・・」

「してないぞ！？」

当の本人の真央は鈴花と楽しそうに話していた。

鈴花から、ほんの少しだけ殺気を感じた。ほんとに何もしていないが……  
真央がお盆を持ち、返しにいった瞬間、4人がいつせいに俺のほうをむいた。

「な、なんだ？」

「……真央は渡さないから!!」「」「」

そういうと解散していった。

真央がしっぽを振りながらもどってきた。

「どうした？」

「な、なんでもない」

あれ？俺って真央のこと好きなのか？ うっ……意識すると真央が今まで以上に可愛く見える！

その日、悩みすぎて眠れなかった。

第32話「変身! ってなわけでも・・・」(前書き)

番外編ってわけでもない

### 第32話「変身! ってなわけでも・・・」

突然だけど、皆に質問です。

間違いメールなんて来ると思ったことはありませんか？ 基本来るなんて思わないでしょう。

もちろん私も思ってたませんでした。

3日前までは……………ね

3日前、間違いメールが来たんです。

相手は軽井ハオかろいという、父が日本で母がどこかの国の人でいわゆるハーフ?の男だ。

どうやら友達に嘘のメアドを教えられ、そのメアドがたまたま私のメアドだったらしい。

……………なかなかいい勘の持ち主だ、人のメアドを当ててしまうとは

まあ、かるぱつちよさん（私が付けた軽井ハオのあだ名）とメールしている、かるぱつちよさんは通常は一夏とシャルを足して2で割った感じだった。

今もメールをしている。

ブーブー

おっ返信来たみたいだ

『嘘のメアド教えた奴をちよつと血祭りにあげてきた(笑)』

……おいおい、そこまでするか？ 友達だろ？ 血祭りはちよつとやり過ぎなんじゃ……

『その子生きてる？』

ピッ

よし、返信完了

結構過激だなあ、F〇F団の会員なみなんじゃ……あれ恐ろしいよな。

F F団……、間違いなく一夏は襲われてるよ。しかも毎日。

命が幾つあっても足りないだろう。

私はきつと秀 的なポジションになるかもしれない……それだけはさけなければ！

ブーブー

ピッ

『あー……多分平気なんじゃないか？ 今、輸血してるみたいだし』

全然平気じゃないみたいだ、お気の毒に……。まあ、他人事だし。気にしないのが1番かな。

『助かるといいね。そしたらきつと、かるぱつちよさんに逆らわないよ（笑）』

ピッ

だいぶ過激だ。

かるぱつちよさん過激すぎだ。

そういえば一週間前に国際ISS委員会の人から細胞よこせて命令来てたな。

確か従わなかったら役人さんが来るとこなんとか……

コンコン

「はい、どうぞ」

ガチャ

ドアがゆっくり開き、黒いスーツを着た男の人が数人入ってきた。いかにも実力行使しに来ましたって感じだった。とても厳つい。

「私たちは国際ISS委員会の命令で、君を迎えにきた。大人しくついて来てもらう」

「おかしいなあ、返事だしてない上に人権無視か？日本の憲法だぞ」



「いいからついて来い。委員会の決定は絶対だ！」

「委員会に俺より強い人いないでしょ？偉そうにすんなって、肩書きばっかりの自惚れ野郎共のそこには行く気はない」

役人さん達はだんだんじれなくなったのか、俺を睨みつけてきた。

正直、追いつくのは簡単だ。だが後がめんどくさいからしない。学校のPTA役員並にうざい奴らだからね。（東さん曰く）

「そうか、それでは実力行使だ」

そついいスタンガンやら警棒やらヌンチャクやら睡眠弾入り拳銃を取り出してきた。

ヌンチャクと拳銃はまずいだろ、ヌンチャクと拳銃は！

「覚悟はいいか？」

「君達がねー」

「「「「「な!?!?!?!」」」」」

役人さんが振り返ると東さんとポンコツを抱えた鈴花がいた。鈴花はすごく血走った目をしていた。

「し、篠ノ之束博士!?!」

「ど、どうするっ?」

「構わん、捕らえる!」

ビュン ポンコツの口からビームが出る

シュン ある役人の頬をかすめる

「「「「「.....」」」」」

怯えてる.....足がK O寸前のボクサーみたいに震えてるもん。  
たった一撃で勝負はついたね、早い.....ポンコツは最終兵器では?

「て、撤退!」

「「「「了解」」」」

バタバタ

「危なかったね。束さんが性転換薬持って来なかったら誘拐されてるよ」

「あー、そんな嬉しいもの作って.....。」

「嬉しいでしょー。この薬が使われるときが」

「さっそく使いますよ」

そついや、今日は確か食堂でラーメン大盛りやってたな、後で行くか。

東さんから薬を受け取り、一気飲みする。．．．ひどい味だ．．．．

もう少しマシな味できんかったのか？

少し時間がたつと、体が熱くなってきた。

息も苦しくなり、意識が遠のいていく。東さんのとてもいい笑顔を見たら「ああ、やられた．．．」と思った。

そのまま意識を失った。

### 1時間後

「ん．．．うー．．．ん」

「気がついたみたいだね、気分はどう？真央ちゃん」

目を覚ますと、東さんの顔がドアップで私の目に映った。

気のせいだと思いたかったから、あえてそこには触れないようにしないよ。

「東さん、私が寝てる間に何もしてないですよね？」

「え、・・・うん！何もしてないよ！」

「ま、真央・・・東さんはホントに何もしてないよ！」

二人の焦り方からして何かあったのは明確だけど、何があったのか知ったら生きていけないような気がしたから軽く流す。  
まずは、男に戻ってるか確認しないと・・・。

ぺら　スカートめくる

もにゅ　触る

ぐに　何かがある

「おめでとー！男に戻ったよ！よかったね真央ちゃん、外見は変わってないけど」

「真央よかったね、戻れて」

二人の台詞に違和感がある、少しだけ。

大事なところを周りに見えないようにしてるのに何で戻ったってわかつたんだろぅ……。。

まさかこの二人……。まさか……。

「ねえ、もしかして私が寝てる間にめくって確認とかした？」

「「！！！！？？？」」

やりやがったのか……。だから束さんの顔がドアップだったのね。そういえば鈴花も顔が赤かったような気もする。

「ち、ち、違うよ！、決してそんなプライバシーを犯すようなことはしてないよ！。真央ちゃんは信じてくれるよね！？」

「そ、そ、そうだよ！、そんなこと私達がするとおもってるの？」

「ふむふむ。……。わかりました」

「「ほっ」」

「お腹減ったから食堂いかない？」

束さんと鈴花は顔を赤くたまま頷いた。

黙って後ろをついてくる二人をチラ見する。（主に束さん）  
私は口の端を吊り上げる。

( さあ、復讐までのカウントダウン開始だ )

楽しみだなあ、食堂・・・フッフ

そうしてる間に食堂につく、食堂の中を見渡すとちよつと織斑先生も食事していた。

織斑先生も私に気づき、束さんといるのをみると手招きされたので食事を受け取り、織斑先生のいるテーブルにつく。

「苦労してるみたいだな、束と一緒にとは」

「まあ、今日は性別を直してもらったです。いつもより苦労はしてませんよ」

「二人ともひどい！、束さんはそこまで問題児じゃないよ!？」

「ははは」

さて、復讐をするかな・・・

「でも・・・束さんに婿にいけない体にされたのは少し残念ですね」

ピクッ

「なんだと?」

「待つて！ちーちゃん待つて！これには事情があるんだ」

慌てて弁解しようとする束さんを見ていると鈴花も参戦しそうな雰囲気を出していた。

ここで鈴花が入ると織斑先生を納得させられてしまふ。嘔泣きで涙声にしてつと。

「鈴花とのハッピーライフが・・・寝てる間に」

「真央元気だして、たいしたことされてないから」

「・・・・・・・・束」

「な、何かな？ちーちゃん・・・」

「言いたいことはそれだけか？」

「い、ごめんなさい〜〜！」

後日談・・・

束さんは私が寝てる間にめくってついてることを確認したら、本物か、どうか調べたらしい・・・脱がして。

元に戻したときにつまずいて私に覆いかぶさった体勢になった所で私起きたらしい。

そしてあの時の織斑先生は束さん曰く、「閻魔様にみえた」らしい。

まあ、一ご愁傷様？



### 第33話「真央の弱点&暴走スイッチ」

皆さん、こんにちは。織斑一夏です。

最近、真央が『皆、男だつて信じてくれない』つて泣きついてくる時があります。

俺は『どっからどうみても女の子じゃないか』と言ったら、服を脱ぎだしたので止めて鈴花に引き渡した。

鈴花曰く『脱げば男だつてわかつてくれる』とのこと

その時から真央が妙に冷たくなった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

今も一緒に夕飯を食べているのだが会話ゼロ。

鈴やラウラ達もいるんだけど、何故か黙っている。

きっと気まずいのだろう……。俺も気まずい。

俺は恐る恐る真央に声をかける。

「……なあ、真央」

「……なに？」

うっ、すごい睨んでる！ 俺何かしたか！？

「なんでそんなに拗ねてんだよ。飯ますぐなるぞ？」

「悪かったな」

そついい真央は立ち上がり、お盆を片付け食堂から出ていった。  
すると鈴がこつちを向いた。

「一夏……真央に何してくれたの？」

「ん？ 何もしてないぞ？」

確かに何もしてない。

俺にはなんで真央が怒ってるのか見当もつかない。

「でも真央の態度は明らかにおかしかったよ、一夏何かしらないの？」

「一夏、夫婦である私になら言えるだろう。何した？」

「そういえばこの前、真央はお前に泣きついていたな。その時何した？」

「おいおい、どんだけ俺は信用されてないんだ？」

「シャルはともかくラウラや篝なんか明らかに俺のこと疑ってるだろ。」

「ホントに何もしてないぞ」

「まったく、俺を疑いすぎだ。」

「それに皆にも原因があるんだぞ。」

「で、なんで真央がアンタに泣きついてたわけ？」

「ええーっと、確かあの時は……『皆、男だつて信じてくれない！』つて言つてたぞ。それで俺はどうみても女の子だろつて言った」

「……それが」「」「」

鈴達は何か納得したような感じだったけど、俺には何が何だか……。

「うー。真央に嫌われたくないし……ていつかあの半目で怠そうな顔つてもしかして……」

「どっいくの？鈴」

「真央のときよ。私の勘が当たってれば真央は怒ってなんかないわ」

そういつて鈴は真央の部屋に走って行った。  
俺達も後を追うことにした。

真尾の部屋の前につき、恐る恐るノックする。

コンコン

「……………」

返事がない。

「真央、いるか？」

そっぴいながらドアを開ける。  
真央の部屋はいつも鍵が開いている。本人曰く「めんどくさい」らしい。

中に入り、部屋を見渡すとベッドに大きな山が二つあった。  
ベッドに近づいてシーツを少しめくると、真央と鈴花が仲良く寄り添いながら寝ていた。

「はあ、やっぱりね」

「鈴どついついことだ？」

鈴は何か知ってるなこりゃ、最近真央にくつついてたし。  
てか真央って鈴のお姉さんみたいだな。

「……真央は」

鈴はゆっくり話始めた。  
なんか疲れてそうな顔して……。

「真央は眠かったの」

「……へ？」

「だから真央は眠いとあんな感じになるのよ！」

そ、そんなことだったのか……、無駄に疑われた俺ってなんて不幸なんだ！

「ん……うる……い」

鈴花が目を眠そうに擦りながらゆっくり体を起こす。  
服がはだけていて妙にセクスぐぼお！

「何してるのかな？女の子の恥ずかしいところをマジマジと見て……」

「そうですねよ？ 紳士のすることではないですわよ！」

すみませんでした。

それとシャルさん、部分展開して殴るのやめてください。  
内臓がケロツと出ちゃう。

「ああ、ごめん。起こす気はなかったんの。ただ真央の様子が変わったから来てみただけで」

「それで理由がわかったのね？ フッフ、真央は30%ミルクティ  
1で睡眠15%、食事5%、運動10%だからね」

鈴花が服装を整えながらそういうと鈴は肩を落として『1番問題なのは食生活か……』と呟いていた。ていうかあとの40%は何なんだ？

セシリアも同じことを考えていたみたいで目が合った。

「鈴花さん、あとの40%は何ですか？」

「真夏も知りたい！」

「うーん、それがねえ……教えてくれないの」

へー、鈴花でも知らないことがあったのか……意外だな。  
てか坂井さんいつの間にか……？

「ねえねえ、まおっちまおっちー！起きて起きて〜」

ユサユサ

ムクリ

「……にゅー……」

何も聞こえなかったことにしよう。

うん、同じ部屋で毎朝これを聞かされたら押し倒してしまいそうだ。

「ねえねえまおっち、40%をしめてるのってなーに？」

その質問の仕方だと勘違いされそうだな。

「す……か……」

「ん？ なになに？」

寝ぼけている真央は鈴花に抱き着き、嬉しそうに鈴花は頭を撫でる。そして真央はゆっくり口を開いた。

「……大切なもの……みんな……」

「……………//」

坂井さん照れてる。顔真っ赤だよ。

鈴花はどこか満足そうだ。

「にゃ、にゃははは！ じゃあ、まおっちの苦手なものってなに？」

「……………すう……………」

さすが速睡起魔王そっすいきまおうの神崎だ。

なかなか完全に起きないな、てか寝かせてやれよ。

「真央に苦手な物なんてあるのか？ 私はこの前オオスズメバチの大群を始末してるところを見たぞ」

「あっあたしも、ゴキブリを奇っ怪な笑みを浮かべながら始末してるところを見た」



「私はそういつとこを目撃したことはありませんわ」  
わたくし

「僕もないなあ」

「私もだ」

ほうほう、箒も鈴も真央の怖いもの知らず&命知らずな行動を目撃してるのか。

ていうか、そんなことしてんのかコイツは。オオスズメバチはまずいだろ。

あっ、俺もあつたな。

「ああ、そういえば俺も真央がナンパやイチャモンつけてくる奴を一撃で葬ってたところなら見たぞ」

「……何してんのコイツ!?」

鈴、箒、坂井さんの声がハモる。

セシリアとシャルは顔を引き攣らせていた、ラウラは「軍にいたら……」とか呟いていた。

「私が知ってる中ではでっかい熊を倒した時が1番かなあ。100キロは軽く超えてたのに勝っちゃうんだからすごいよ」

「……………」

ホントに何したらそこまで強くなるんだろうね。  
コイツに苦手な物なんてないんじゃないのかな？

「でも真央はお化けとか怖い話とか怖い系がダメなの」

「「「「「えっ？」「」「」」」」

あの真央が？ 心霊とか怖い系が苦手なんて可愛らしい……………。  
部屋には長い沈黙が流れる。

「あれ…信じてない？」

「だって……………」

「熊を倒せる人が……………」

「うん、意外すぎて」

うんうん、鈴花は嘘をつくような人じゃないのは知ってる。  
だけど……………ねえ。

そのときラウラの足が少し震えていたのを誰も気がつかなかった。

「ホントだよ、『触れない奴に勝てるわけない!』って」

「ずいぶんと真央らしい理由だな」

「中学生の頃なんて呪怨見た日の夜、怖くて寝れないって言って一緒に寝たんだよ？」

「見たの!? 見せたの!? 見せちゃったの!?!」

「鈴ちゃん、落ち着いて! 私もその時に初めて知ったんだから」

外見だけじゃなく、中身もかわいいところあるな。

しかし、鈴は天才か? 見たの3段活用を作ったぞ。

鈴花曰く、真央の前で怖い話はNG。

もしうっかり話してしまつたら腹をガードして、周りの人はAEDの準備しなければならぬ。(真央が本気のストレートを放つため) 真央に避けられなくてはならぬ、その日は一緒に寝てあげること。

まあだいたいこんな感じらしい……怖い話を聞いた瞬間に真央の身体能力は極限まで高まるらしい。  
目視できるかな……。

「……むう」

「あつ、真央起きた?」

真央はゆっくりと体を起こすと周りをキョロキョロ見渡した。

「……なんれみんなここに？」

真央がトローンとした顔……ポワポワって表現があってる顔をしながらいった。

トローンとポワポワ全然違うな

「まおっちは怖いものが苦手なの？」

「なに言ってるんだい？この私が怖いものなんて怖くない！」

胸を張ってそう断言する真央に篤が呪怨のDVDを見せる。

「うむ、じゃあこれを一緒に見よう」

ビクッ×2

「あああははは！ い、いいよ！ 見てあげる」

顔が引き攣って冷や汗ドツとかいてる様に見えるのは俺だけだろうか……。

それにラウラもビクッてなった気がする。

表情はいつも通りなんだが……

篤はテキパキと準備し、鈴やセシリアとシャルはワイワイお喋りし

ていた。

鈴花はAEDを準備していたのを見て悪寒がした。

第33話「真央の弱点&暴走スイッチ」(後書き)

真央の弱点をかなりベタにしてみました

### 第34話「呪怨と本当に怖い体験」by一夏

皆さんどうも。織斑一夏です。  
なんども俺の視点ですいません。

篤がDVDをセットし終え、俺と鈴花が座る。

他はベッドに腰をかけていたが、真央とラウラは正座していた。

「なんで二人とも正座なの？ 普通に座ればいいのに」

「何いつてんの、怖いDVDを見るときは正座しながら見るのが普通でしょ」

「真央の言うとおりだ！ここは礼儀正しくするのが1番だ」

真央とラウラは見合って笑っていた。

全身からすごい冷や汗が出ている。

「それでは始めるぞ」

篤が再生ボタン押すと同時にラウラが飛びついてきた。

「「「「.....」」」」

「ち、違うぞ！ 決して怖いとかじゃないからな！」

「じゃあ、なんで一夏に抱き着くのよ……」

「よよよ、嫁は夫である私とくつつくのが当たり前だろ」

ラウラこつこつという系ダメなのか……、ラウラだったら平然として見る  
と思ったのに。

まあ一番気になるのが真央だ。

チラッと真央のほうを見る。

「……………（ダラダラ）」

相変わらず冷や汗をかいていたが、画面にくぎ付けになっていた。  
真央の部屋には何故かブラウン管のテレビがおいてあったので、そ  
こにつないで見てるわけなのですが……………。  
鈴花の言う通りなのだとしたらテレビは今日使えなくなる、そして  
へたしたら死人がでるかもしれない。

《ジ、ジジ。ガタン！》

ゴキン、コキン

「……………！？……………！」



今、テレビには恐る恐る家を歩く女性の後ろのドアがいきなり閉まるというシーンがあった。

まあ…そのときにラウラがビクツとなった勢いで関節を外されて戻されたのですごく痛い……、けどここで叫んだら真央は間違いなく俺を殺るだろう。

我慢我慢ー！

《ねえ…誰かいるの？……》

もうすぐ子供の霊が出てくるシーン何だけど、真央は耐えられるのか？

またチラ見

「……………（ガタガタ）」

震えながら枕を抱きしめ、目が危険色になっていた。

《すう……………（磨りガラスに青白い子供が映る）。ガチャ……………（女の人の子供いるであろう部屋に入る）》

チラッ

「……………（じりじり）」

真央は耐えていた。

枕が見るも無惨な（所々ひきちぎられ、綿が出ている）状態だったが、まあ安いもんだらう。

ガタン

「ひい！」

何かの物音がして、ラウラが強く抱きしめてくる。

「あー、ごめん。ペットボトル落としちゃった」

テヘッと笑う鈴を睨みつけるラウラ。

ラウラは涙目なので怖くはないが、逆にその……………萌える？

鈴花はため息つきながら立ち上がり、カーテンを閉めDVDを1時停止にした。

「ちょっと休憩しよ、私は真央連れ戻してくるからさ」

「……………え？」「……………」

ベッドをみると真央が消えていた。

ドアの方を見ると開けっ放しだった。まさかあの一瞬で逃げ出せるとは……。

鈴花は外に出るわけではなく、シャワーの方に歩いていき、「真央」と呼びながら開けて入って行った。

10分後、真央を連れて出てきた。

「じゃあ再生！」

鈴が再生したら部屋の電気が落ちた。

「あー気にしなくていいよ。ポンコツが寝たら消えるようにしてるから」

「俺……さすがにビックリしたぞ」

「余計な機能つけないでよ！ホントに幽霊とかだと思ったじゃない」

「そつだぞ真央！ 怖がりのくせに今は冷静になりおつて！」

俺と鈴とラウラが抗議を軽く受け流す真央。

コイツほんとにさっきまで震えてた真央か？

《ジーー（監視カメラ） 「あつ！………！?!」 ガガ  
》

監視カメラの画面が黒くなる。この後、目がぎよろつとする場面だったはず……  
つついっい真央をチラ見

「……うにゃああああ！」

ヒュン

消えた！ 真央が消えたぞ！？

ガチャアン！

テレビの方を向くとテレビの画面を真央の右ストレートで貫いていた。  
そしてまた消える。

「「「「「「……「「「「「」

「ふう、よかった」

皆が唖然としてる中、鈴花は安心したように肩の力を抜く。  
坂井さんは「まおっちまでー！」っていいながら外にでていった。

「な、何がよかったですか？ 鈴花さん」

「私、心配だったの。ここで殺人事件が起こることが」

「確かに怖いな。さっきの真央は視認できなかった」

「篝さんの無惨な姿は見たくないから、ホントにテレビで済んでよかった」

デンジャーデンジャー

危険すぎる、冗談に聞こえないし。

現に篝も青ざめてるし、それを聞いて皆冷や汗かいてるし。

「な、なぜ私なんだ？」

「シンプルな理由なの、ただ怖いDVDを見ようって言ってきた。それだけ」

神崎真央恐るべし！

千冬姉とやり合えるかもしれない・・・。

「真央は本物の幽霊とかに出会ったら攻撃からの逃亡だからね」

「あいつ攻撃する勇氣あるのか!？」

「真央はもともと一撃離脱とヒット&アウェイ戦法が得意なんだよ？ まあ現実では一撃必殺になることが多いんだけどね」

だよなあ、てか多いつてなに？ 俺は一撃必殺しか見たことないよ？ あれに耐えるひといるの？ その人は化け物に違いない。

「まあ、ISとやるときだけなんだよね。一撃必殺にならないのって」

「……ラ、ラウラは軍人だし、大丈夫だよな？」

ラウラが「私を殺す気か！？」的な目で見ていた。どうやら無理みたいだ。

「ていうか、鈴花は平気なの？」

「鈴っちは全然平気なのだー！」

鈴の問いに真央を引っ張って戻ってきた坂井さんが答えた。なぜか手にはスタンガンをもっていた。

「まあっちは鈴っちには手は出さないからね。むしろ……」

「鈴花っ！」



ふーん、なるほどね。

鈴がホツとしている横でのほんさんがニヤニヤしていた。

……あれ？……

「じゃあ、皆で明日のとある神社でやるお化け屋敷にいつてみなよ  
」

「それって……」

確かあの神社でやる祭りだよな？

そこにお化け屋敷？人はいるのか？

「どうする？真央」

「いいけど……でないよね？」

「うん、たぶんね」

「なら大丈夫、行こうじゃないか」

いくのか、鈴花にくつついてると強いな。

でもいいのか、神社だぞ？もしかしたら幽霊とかと鉢合わせになる  
かもしれないんだぞ……、まあ真央の《神速》があれば鈴花をつれ  
て逃げれるだろう。そうであってほしい





第34話「呪怨と本当に怖い体験」by 夏（後書き）

真央「夏休みって長いようで短いんだよね。去年は宿題とかあったな、やらなかったけど」

一夏「前にそれが学生としてあるべき姿だって言ってたな」

### 第35話「お化け屋敷」

#### 《お化け屋敷》

こんにちは、神崎真央です。

私達はこの忌ま忌ましい所の前にいた。のほほんさんの提案を断つとけばよかったとつくづく思う。

だって……ねえ、足が震えてきたもん

「真央、やっぱりやめる？」

隣に立っている鈴花が心配そうに話し掛けてきた。黙って首を横にふる。

「ここは仕掛けがあるだけで、実際人がいて脅かすことはないと聞いた。殺人は起きないだろう」

ラウラは妙に冷静に言葉を発するが、鈴花は「そうじゃないんだけどなあ」と小声で言っていた。

むう……まあ、一あそこの小さい子が一人で入れる（……………  
……………）んだから大丈夫かな……………？

「じゃあ、とつとと2人1組作りましょ。もちろんくじで！」

「「「ちっ！」「」」

鈴の言葉に箒達が舌打ちする。

まあ、出来れば私は鈴花の方がいいけど……。まあ不公平にならないようにしなきゃね。

「「「（真央となつたら死ぬ！）」「」」

「（あたしは真央となつても平気だし、出来れば一夏がいいけど）」

「（俺は真……。んっんん！なに言ってるんだ俺は！）」

何だろう、すごく黒いオーラが……。てか一夏顔赤いよ。  
楽しみなのかね？ 物好きな奴だ。

「私は真央とがいいなあ……………」

「鈴っちずるい！ 真夏もまあおっちがいい！」

「「「どっぞー！」「」」

鈴花と真夏か、何事もなく行けそうな気がしてきた。

「真央大丈夫？ さつきから誰もいないとこ見つめて」

「へ？ いるじゃん。むこうの木をなんかトンカチみたいなので叩いてる人が」

そういうと無理矢理顔を真夏の方に向けられた。

鈴花も真夏も青ざめている。

「それ……きつと丑の刻参りだよ。見ちゃダメ」

「えっ、でも」

「まおつち、見られたのバレてない？」

「無理矢理視線を外されたときにチラッと目があったよ」

鈴花はポンコツに「寮に戻るまで警戒体勢」と言っていた。  
真夏は靴紐をギュツと結んで、アイガードと手にメリケンサックをつけていた。

お化け屋敷にそこまでするのか？

「ん？ あの人消えてる」

「真央、気をつけてね」

「まおつち、真夏から離れないでね」

「あつ、いた！ けど頭にろうそくつけてたっけ？」

ゴキン

「もう林の中見ちゃダメ」

く、首があ！ 絶対骨ズレたよ。

ポンコツめ、綿菓子美味しそうに食いやがって……。

「~~~~」

「あの……ポンコツさん、少しください」

「ポン」

ポンコツが綿菓子を差し出してきた。

ありがたやー、鈴花と真夏は周りを警戒してるし、少し落ち着いたらどうなのだ。

「じゃあ、ペア決まったし行きましょ」

「て、なんで鈴とラウラしかいないの？」

「先に行かせた」

そうですか、ご苦労様です。鳳隊長。  
さて、私達も行きたいのですが……

「……………」

「ねえ、真央。この二人何があったの？」

「丑のなんちゃら参りしてる人見つけたっていったらこうなった」

「まあいい、早くいくぞ」

2人1組にした意味を教えてください。

まあ細かいことは気にせず、2人の手を引っ張って中に入る。

中に入ると、薄暗く蛍光灯の赤い光で不気味だった。

今にも何かが這ってきそうだけど、怖がっていられない。

理由は簡単、真夏の目が殺意に満ちていたから。

「あのお、なんでそんなに殺意立ってるの？」

そういういつもの目が真夏に戻った。

「丑の刻参りはね。人に見られたら、その人を殺すんだよ」

「物騒な儀式だね。人目につくところでやってほしくない」

「そう。でもまあっちは見たあげく、儀式してる人とも目があったる」

「何かまずいの？」

ふと、歩きながら鈴花の握ってる手に力が入ったのを感じた。

「真央が殺されちゃう……」

「！！ どういうこと！？（だ）」「」

後ろをついてきていた鈴とラウラがすごい勢いで聞いてきた。真夏が説明しながら歩く。

なにもないとこだ、仕掛けがあるって言ってたけど、一つも作動してない。

道間違えたかな？ でも一方通行だしなあ

「真央、あんた一体何体丑の刻参りしてるのみてんの？」

「鳳隊長殿、私はあまり見てません。ここに来るまでとさっきの6体くらいです」

「どこ見てるんだらうとか思ってたら……」



「まおつち、そんなもの見てたなんて」

「あんだ命知らず過ぎでしょー！」

そんなこんなしながら歩いていくと、つきあたりの曲がり角に影が出た。

ユラユラ揺れていて、怪しいことこの上ない。

真夏は臨戦体勢に入っていた。

綺麗なピンク色の髪が真夏の放つ気迫又は気合いで風に煽られてるようになびく。

「綺麗だね。髪の毛」

「ふええ！？ なななに言ってるの！ まおつち」

「鈴花の綺麗な黒い髪とは違う良さがあるよ」

「はう……／＼／」

何故か、顔を赤らめるお二人さん。

鈴はジト目で見てくるがラウラは冷や汗をかきながら「仕掛けはほとんどない聞いたのに」と言っていた。

おそらく一夏かシャルに聞いたのだろう。

影の主が姿を現す。

それはついさつき見た、トンカチを振り回していた人達と同じ格好だった。

しかも4体来た。

前3と後ろ1、いつの間に来たんだろうね。

その人達はニヤリと笑った瞬間に恐怖に我慢出来なくなった。

## 鈴SIDE

「くっ！」

なんで気がつかなかったの？ あたしのバカ！

後ろに誰かいたらいつもだったら気づくの……、しかもこいつら普通じゃない。

真夏も鈴花も真剣な表情だし、第一ラウラが硬直してる。

こんなときに使えない……まさかこれを仕掛けだと思ってるのか？

まさかね、あらかじめ仕掛けがないとこ通ってきたし、そのことも前もって話してある。

真央の表情も恐怖一色だし………恐怖一色？…鈴花と手を繋いでる真央が？

まあいいや、あたしは後ろにいる奴を倒そう。

代表候補生なめないでよ！

後ろを振り向こうとした瞬間、真央と鈴花と真夏の姿が消える。

前の3体が吹き飛び、壁に減り込む。

「あたしは幽霊とかより、あいつらが怖い」

「ど、同感だ」

ラウラはどうやら人間だと理解したみたいで、いつも通りに戻っていた。

そして後ろから轟音になる。

振り返ると後ろにいた奴を真央が殴り飛ばしたみたいで、ピクピクしながら倒れていた。

「はい、ストップ」

「にゃうー」

鈴花と真夏が何もないとこを掴んだと思ったら、真央がいた。視認できないほど高速で動くのってどうよ……人として。

真央SIDE

「あー、怖かった」

「お疲れ、大丈夫だったか？」

一夏からラムネもらい、一口のむ。  
ふう、生き返るー。

あの後、もう2体来て鈴花と真夏が瞬殺して6体全てグルグル巻にして木にくくりつけていた。

「……一夏、私決めたよ」

「なにをだ？」

「もう鈴花と真夏を怒らせないようにする」

「俺もだ……、ていうかその左手はどうして誰かと手を繋いでるみたいにしてるんだ？」

「ん？ なに言ってるの？ ここに小さい子供がいるじゃん。一夏意地悪はいけないよ」

一夏が私の顔をジッと見つめ、何か悩んでいるような顔をしていた。

「どうしたの？ 一夏。浮かない顔して」

「ああ、シャル。ちよっとな」

「シャル聞いてよ。一夏はこの子のこと見えないって意地悪するんだよ!?!」

「えっ…? どこにいるの?」

「む! シャルまで…。ここだよ、私の左手を握ってる子」

シャルの後にゾロゾロ箒達が集合していたらしく、今の話を聞いて冷たい目で見られた。

私は風船をその子にあげると、みんな青ざめた。

鈴花は私の手を引っ張り、何故かみんな急いで寮に戻った。

第35話「お化け屋敷」（後書き）

真「なんでそんなに急いでるの？ さっきの子だったら神社の入口まで見送ってくれたよ。いい子だねえ」

鈴花＆真夏「真央が見える人だったなんて知らなかった」

—「恐怖だ、幽霊の存在を肯定されるとは！」

鈴「今日一人じゃねれない……」

ラウ「私はシャルロットがいるから平気だ！」

真「基本、二人部屋なのに一人になるわけ……（私は一人だった）」

鈴花「今日は私と真夏の部屋おいで」

真「ありがとう」

第36話「阿修羅」(前書き)

俺は何がいたいんだろ？

まあ気にしないのが一番ですよ

### 第36話「阿修羅」

「ふう……なあ、阿修羅」

ビーン

『なんだ？』

「お前の意識って人体に写せるの？」

『まあ、不可能じゃないな。人型ロボットになら100%可能だが』

ただ今、ポンコツの中に入れた阿修羅と雑談してます。

ディスプレイを出してもらって、私と同じ顔の阿修羅と話すのって少し違和感がある。

「東さんのとこ行ってみるか」

『俺はあいつが苦手だ……、なんで妙にテンションが高いんだ？』

「私にきかれてもなあ」

私はクローゼットから制服を取り出す。

私服だと鈴花や真夏に着せ替え人形にされるから、どんな時も制服



で入るようにしている。

『女みたいになってきたな』

「仕方ないよ、鈴花と真夏は面白がって女性の服着せるし。一夏達は女だと思ってるし」

『確かにこの前男の格好したら怒られてたな。その後、買い物につれてかれてたな』

そう…、女装した方がお得なの。

男として大事なものを失うけど、その分心が痛まないからいいのだ。てか、慣れてきたし

「それじゃあ、ラボへゴー！」

私はポンコツを頭に載せて歩き出す。

久しぶりだなあ、ポンコツを頭に載せるの。

「で、何してるんですか？」

「ん〜？、おっ真央ちゃんじゃないか！久しぶりだね！」

束さんのラボに着くなり、束さんが人型ロボの調整をしていた。この人ってタイミングがいいなあ、時々盗聴されてるんじゃないかと思うときがある。

「あのね〜風の噂で人型ロボがほしい人がいるって聞いて、急いでつくっちゃった」

「まあ、ちょうどほしかったからいいんですけど」

「じゃあ、転送とフィッティング開始するよ」

ISのコアつきアンドロイドに阿修羅の人格を移す。なかなかのものだね。見た目が私と同じっていうのがほんとに。

「ハイ出来上がり！」

「ふむ、割といいな」

「私と髪の色と声も目の色も違うね」

「あー、ホントだ。おかしいなあ、真央ちゃんと同じにしたのに」

阿修羅は髪が一夏くらいになっていて赤く、声がまるでガンダムWのゼスのようで目も赤かった。顔も凜々しくなってるし……  
東さんは阿修羅の首にプラグを差し込み、調べていく。

「まあ、俺だからいいんじゃないか？」

「だね、阿修羅だからいいか」

「むう、わかんないからいいや！」

うん、意見が一致したね。

阿修羅はもともと私とは全体的に違うし。

「それでは真央。剣道場に行くぞ」

「なんで？」

「お前で体を馴らすんだよ」

「ず、ずいぶんハードだね……」

「はやくいくぞ」

そういつて阿修羅は私の手を引いて剣道場に向かって歩き出した。

「（阿修羅っていいなあ、男らしくて……。私が《俺》なんていつた日にはセシリアとシャルと鈴のお説教だよ。男なのに）」

「わかつてると思うが、俺の本体はお前だ。人格を器に移しただけの違いだからな」

「じゃあ、なんで容姿変わってんの？」

「しらん、それに私は何の実験もしないでこのアンドロイドに人格を移せたことに驚いてる」

「東さんは時間移動すら出来そうだから仕方ない」

私は苦笑しながら言うと、阿修羅も顔が引き攣っていた。

阿修羅は名前からして感情が表にあまりでない鉄仮面的なイメージがあるが、意外と表情豊かだ。

剣道場に着くと、一夏が箒に扱かれていた。

もちろん剣道部の人達もいるが、一夏と箒を見ていた。

「すまないが隅っこを借りてもいいか？」

「ん？いいけど？ 君は誰かな、見かけない顔だね？」

何故疑問形？ のほほんさんと似たようなタイプなのかな……

「俺は神崎真央の知人だ。こいつを鍛えるために来たんだが……。」

「織斑先生にも許可とりました」

「ならいいよ？ 思う存分やりなさいな？」

調子狂うな、でも何だか面白い人だ。

慣れれば一緒に居ても楽しいかもしれない。

「ではいくぞ」

「防具なしかい！竹刀一本だけかい！」

「仕方ないだろう。時間の無駄遣いはしたくない」

そついい、阿修羅は構える。

まずは腕試しみたいだ、私も気持ちを切り替え構える。

「……………」

静寂が剣道場を支配する。

一夏達も異様な雰囲気一旦稽古を中断し、真央達を見ていた。

「……ハッ」

阿修羅が先に動いた。

突きを真央の顔面に放つが真央は紙一重でかわす。

真央は阿修羅の胸に竹刀を振るが、受け止められ回し切りを頭を下げて避ける。

二人とも後ろに跳ね、距離をとった。

「いい動きじゃないか」

「防具なしってのは緊張感あるね……。体の全筋肉が反応してくれてる」

阿修羅は私、私は阿修羅。なら私が考えてることは阿修羅も考えてる可能性がある。

次の一撃で仕留められたらいいな

ダッ

「いくぞ、真央。風牙絶咬！」

胸に衝撃が走ると体が後ろに飛んだ。いつの間にか阿修羅が目の前にいた。

「阿修羅……テイ　ズの技をここでやるのはどうかと思うよ」

「お前もできるのにやらないのが悪い」

そっついながら私の手をとって立たせた。

多少強引だが周りの剣道部の人達は羨ましがっていた。

一夏と箒なんてすごい形相でこっちに歩いてきてるのに……。

「真央！」

「ふえ？」

「稽古をつけてくれ！」

その言葉に阿修羅笑みを浮かべる。

私は感覚派だからうまく教えることができない、箒も感覚派特有の擬音語を使って一夏にISを教えていたから箒は何とかなる。

一夏は実践と理論を教えないといけない。

「頼む！」

「……（断れない……阿修羅は相変わらずに笑ってるし、ああー）  
わかったよ」

二人の顔が明るくなる。

すると疑問形で話す人が近寄ってきた。  
口の端を吊り上げながら……。

「真央ちゃんでもいいかな？」

「出来れば呼び捨てか、《君》で」

「真央ちゃん？、剣道部のコーチしてくれないかな？ その人も一緒に？」

「まあ、いいですけど」

「おい、真央！ 俺を巻き込むな！」

「だまらっしゃい！ 私と阿修羅は運命共同体……即ち私あるところに阿修羅あり！ 阿修羅あるところに私ありだ！」

「変な理屈つくるな！」

阿修羅との言い合いに周りの女子が騒ぎ出す。

「運命共同体ってことは付き合ってるの？」

「ああ、私の可愛い真央さんが……」

「私が神崎さんの初めての女に！」

聞こえない聞こえない。何も聞こえない。



「それじゃあ明日からよろしくね？」

「あ、はい」

「何故、部長と真央は親しいのだ？」

「部長だったんだ……あの人」

私って結構失礼だね。

それにしても髪が長いと邪魔だなあ、鈴花に言って切ってもらおうか。

「じゃあ、やるか」

「おう！ どんとこい！」

「覚悟は出来ている！」

「お二人さん死ぬなよ」

阿修羅が不吉なことを言ったが、意味がわからない顔をしている――夏と箒に指導を始めた。

30分後

「一夏！ 風牙絶咬をなめてるのか？ もっと早く！」

「お、おうー！」

「箒！ もう少し脱力して、力を入れすぎないようにして遠くの壁の向こうに穴をあける感じ」

「こ、こっか！？」

「そう、よく出来ました。しばらくその感じを忘れないように練習して」

「了解だ！」

「いいいいいいかああ！ 心を静めて、真つすぐ見て、脱力、あのドアの向こうに壁がある……それを突き破る感じで」

「心を静める、真つすぐ、脱力、突き破る……ハッ！」

「よしよし、一夏は箒の倍言えばできるっ」と

「メモしないでー！」

「じゃ、少し休憩」

一夏と箒はタオルで汗を拭きにいった。  
後から阿修羅が近づいて話し掛ける。

「真央の指導、キツイだろ」

「ん？ 誰？」

「真央の知人の阿修羅だ。織斑一夏、篠ノ之箒」

「まあ確かにキツイけど、強くなれるならどつってことないぞ」

「うむ、真央の説明はわかりやすい」

一夏と箒は満足そうだったが、真央の指導はこんなものじゃないが  
今は言わないのがいいだろう。

「一夏、技を覚えるのと強くなるのは違う。真央は技は教えてるが  
剣術は教えていない」

「でも技を覚えて出来るようになれば」

「確かに覚える前より強くなるな」

「何がいいんだ？」

阿修羅は目を閉じ、深呼吸したあと真央の方をチラ見する。  
真央は天井を見つめてポーツとしていた。  
視線を一夏達に戻す。

「真央を守る気があるか？」

「当たり前だ。真央だけじゃなくて俺に関わる人全員守りたい」

「私もだ。力を見誤らず尚且つ大切な人達を守りたい」

「だが真央に技を習ってるだけじゃ、真央を守れない。逆に真央に守られる」

一夏と箒の表情に怒りが見えた。

「やってみなきゃわかんねえだろ！」

「そつだ！ 私達をなめるな！」

「ほう……、なら俺と勝負しろ。真央は俺より若干強い」

「望むところだ！」

火花が散らしていると手刀で一刀両断される。

「阿修羅、余計なことだったでしょ」

「強くなりたいたならそのままじゃだめだったな」

阿修羅は竹刀をとり、中央まで歩く。

一夏と箒はあとをつけ、阿修羅が振り返り構えると二人も構える。

「二人同時でこい」

「なめるな！」

箒が最初に動き竹刀を振りかぶる、阿修羅は防ごうとはせず胴に突きを放つ。

箒は紙一重でかわすが、手を竹刀で叩かれ竹刀を落とす。

それを見た一夏が阿修羅の後ろに周り振りかぶるが回し切りで胴を叩かれる。

その間に箒は竹刀を拾い構える。

「二人がかりでこつも圧倒されるとは」

「一夏は胴叩かれたからリタイアね」

真央に一夏を連れてかれる。

正直いてもよかった。

「はあ！」

「ふん」

箒は攻め続けるが、阿修羅は一步も引かないで受けつづける。

「ハアハア……」

「これで終わりだ」

阿修羅は振りかぶり、思いつ切り振り下ろす。

パアアン

「……………」

が箒には当たらなかった。

「……………真央」

「阿修羅……お前防具をつけてない奴に思いつ切り振り下ろしたら危ないだろ」

真央が阿修羅と箒の前に立って受け止めていた。そんなことより阿修羅は真央の口調が元に戻ってることに顔をしかめた。

「すまん。一夏、箒……俺は真央を怒らしたみたいだ。剣道場が使えなくなる前に鈴花と真夏を呼んできてくれないか？」

「待つてる！すぐに行ってくる！」

一夏と箒は真央が怒ったと聞いた瞬間に顔が青ざめ一目散に走っていった。

「阿修羅覚悟は？」

「出来てないがやる時はやる」

次の瞬間、真央と阿修羅の竹刀がぶつかり合う。

「えっ、真央（うち）が!?!」

一夏と篤の報告を聞いた鈴花と真夏は3階だというのに何の迷いもなく飛び降りた。

「あの二人……どこがおかしいんじゃない？」

「真央も阿修羅も異常だがな」

一夏と篤は歩きながら剣道場に戻っていくことにした。

「鈴うち！ まおっちが怒るのって何時ぶりかな？」

「ええっと怒りかけた時は前にあったけど。怒ったのは3年前のあの時ぶり」

走りながらそんな会話をしている二人は気づかない。

陸上部が膝をついて悔しそうに地面を叩いていることに。

余談だが鈴花と真夏はとても足が速い（真央のことになると）

「ふーん。織斑一夏、神崎真央……私はどっちにつこうかしら」



水色の髪をした女子が不適な笑みをうかべながら扇子を閉じた。

第36話「阿修羅」(後書き)

阿「危なかった……後少しで剣道場に穴が空くところだった」

鈴花「気をつけてくださいよ、阿修羅さん」

一&箒「怒った真央を止められる鈴花も怖いが、やり合える奴も怖い……」

真央「ゲフツ……(吐血)」

真夏「みんな止血手伝ってよ！このままじゃまおっちが昇天しちゃうー！」

## キャラ紹介(前書き)

いまさらって感じですね  
すみません

## キャラ紹介

かんざき  
神崎 真央

性別 男

16才

### 「容姿」

腰より少し上までである真っ黒い髪で、瞳も黒。なぜかくびねらしきものがある。不健康な食生活でだいぶ痩せている。

### 「性格」

基本めんどくさがりだがやらなければいけないことはキチンとする、隠れ真面目っ子。けっこう大雑把でできとぅ。

身長 162.5

体重 36

### 「概要」

赤ん坊のころにナノマシンを移植され、かなり高い身体能力と反射神経、空間認識力を手に入れている。

ナノマシンが細胞と異常なまでにくっつき、第二の人格「阿修羅」が生まれる。

阿修羅と力を合わせると右目が赤くなり、IS操縦能力が格段とあがるが本人はまったく気づいていない。

現在、朝昼を抜いているため体重減少中左目がエメラルドに光ると全体の能力が倍以上になる。

鈴花と真夏には甘い。

あまくさ  
天草 すずか  
鈴花

性別 女

16才

「容姿」

腰まである黒い髪で、瞳は紫色。

スタイル抜群で、美少女という言葉がお似合い。

美白。

「性格」

おとなしくとても優しい。

大人びた感じでしっかり者。

お世話焼きでお人よし。

身長 166

体重 42

「概要」

真央に滅法甘く、頼まれたことは大抵きいてしまう。そこを真夏につけこまれ、よくからかわれたりする。

赤ん坊の頃、真央と同系列のナノマシンを移植されており、真央と同じくらいの能力を持っているがいつもは隠している。

真央が危険にさらされるとリミッターが外れ守るが真央が暴走した

ときは容赦なく潰すなど冷たいところもある。

真央大好きっ子で真夏のお姉ちゃんみたいな存在だ。

一夏達からは「最終防衛ライン」「最後の砦」などと思われていたりする。

坂井 真夏

性格 女

15才

「容姿」

ピンク色の髪でセミロング（しょっちゅう長さを変えるが主にセミロング）

瞳は青ですこし中性的な顔つき

「性格」

元気、とにかく元気

天真爛漫

嘘つくのが下手

身長160

体重40

「概要」

真央大好きっ子&鈴花大好きっ子。鈴花を姉みたいに接している。

真央の身に危険を感じると狂戦士<sup>バーサーカー</sup>になる。

IS学園には委員会を脅して入学しているのは誰にも知られていない。

クアンタの待機状態のポンコツによく餌付けしているため、鈴花の次に懐かれている。

キャラ紹介（後書き）

だいたいこんな感じ  
少しはしょったけど



### 第37話「稽古と計画」

パン！ パン！

「はぁ！ てぁ！」

「箒、もっと集中しろ。お前はこんなもんじゃない」

パシィン！

箒は竹刀を弾き飛ばされた。

悔しそくに歯ぎしりするが自分を落ち着かせるため深呼吸する。

一夏と箒は阿修羅にたたきのめされてから、阿修羅と真央に稽古をつけてもらっていた。

「そつだ、それでいい。頭に血が上ってはいいい判断ができないからな」

「ああ、わかっているんだが……」

「じゃ、休憩な」

箒は汗を拭きながら、阿修羅はそのまま真央と一夏の稽古を見ている。

「それぞれ、瞬突！ 潜身脚！ 裂震虎砲！ 抜碎竜斬！」

「うおおおお！ ちょっ！ま、死ぬうう！」

裂震虎砲まで避けたか、成長してる。なかなか飲み込みがはやいな。真央も嬉しそうでなによりだ。

「はあ……はあ……、真央の技で1番つよいのってなんだ？」

「みたい？」

「「見せてくれ！」」

「それじゃあ行くよ」

阿修羅が用意したダミーに向かって構える。

「終わらせてやる！」

そついうとダミーに向かってダッシュする。

「遠慮はしない！ 決めてやる！」

ダミーに打撃を数回加えて吹き飛ばす。

「斬空刃！ 無塵衝！」

ダミーを通りすぎたと思えば無数の光がダミーを切り刻んだ。おそらくあの光は真央がダミーを切った証拠だろう。あまりにも早過ぎて光になったか

「……………」

「ん？ どしたの？」

啞然としている一夏と箒を真央は不思議そうに見ていた。阿修羅は呆れながら真央に近寄る。

「何秘奥義だしてんだよ……………」

「え？ 私のお気に入りの技の一つで威力もあるから」

「やり過ぎだ。自重しろ」

「えー、じゃあ魔王炎撃波！」

真央が振る直前で竹刀が炎を纏う。

「裂空刃！」

真央が乱舞するとボロボロになって倒れていたダミーがさらに切り刻まれた。

「こんなかな？」

「俺達に出来るのか？」

「ISだったら出来るだろうな」

一夏は顔を引きつらせた。それもそのはず、基本生身で出来ないことをしているんだ。

まあ、体への負担もあるんだが真央は気にしないからな。すると真央が尻餅をついた。

「大丈夫か？ 無茶しすぎだぞ」

「あはは、男は無茶してなんぼだよ」

真央にあきれていると鈴花が剣道場の扉をあけてはいつてきたのを見る。

口の端を吊り上げ、剣道部の指導にむかった。

真央は自分もやらないといけないなと思ったらしく、無理やり立ち上がるうとするが抱き寄せられて鈴花の膝の上で大人しくしている。

「まったく……バカップルが」

そうして阿修羅は剣道部員を真央譲りのスパルタ精神で扱いた。

稽古が終わって部屋でくつろいでいると、ふとあることを思い出した。

「もうすぐ真夏の誕生日じゃん」

すっかり忘れてた。

鈴花の誕生日は4月1日、そして自分の誕生日は6月2………なんに  
いだけか？

まあいいや、真夏の誕生日は確か8月20日だったはず。

「うーん、明後日か……」

時計をみると2時だった。

別に今から出掛けてプレゼントを買ってもいいのだけど、どうも今  
一体がうまく動かない。

「はあ……秘奥義出すんじゃないかった。反動デカすぎだよ」

携帯を取り出し一夏に電話をかける。

『どうしたんだ？ 真央からかけて来るなんて珍しいな』

「ちょっと頼みたいことがあってね。鈴花いないし、一夏に頼んだ  
ほうがいいと思って」

『そうか、で何すればいいんだ？』

「外に連れ出してくんない？」

『……………』

というわけで来ました。  
駅の裏側にあるお店にね

「買い物ならそういつてくれればいいのに」

「却下されると思った」

「にしてもいろいろあるんだな、鈴花にプレゼントか？」

そういえば一夏は知らないんだったな。

まあ知っててもそう思うけど。

「違うよ。もうすぐ真夏の誕生日なんだ、だから誕生日プレゼント  
買いにね」

「誕生日いつなんだ？」

「20日、明後日だよ」

「ちかつ！ 何で言ってくれなかったんだよ」

「お前も自分の誕生日を教えたのか？ 鈴や箒はともかく他は知らないだろ」

「そういえばそうだな」

こいつはどこまで鈍いんだ。教えたらあの子達大喜びするぞ？  
鈴や箒は少し残念そうになるかもだけど

「うーん、真夏は髪飾り……でもズボラだからなあ」

「ならこのブレスレットはどうだ？ ピンク色のダイヤが並んで埋め込まれてるやつ（ズボラってお前が言うなよ）」

「あつそれいいね」

無事誕生日プレゼントを購入し、IS学園に戻っていく。

あとはどう渡すか……だ。

悩ましいね〜普通じゃあつまらないから忘れてるフリして最後に渡すとかかな？

よし、それでいこう！



### 第38話「暴走」

ぬう……オハヨ

今日も元気ないね。はい、元気ありません。

夏休みが終わり、もうすぐ文化祭ですがクラスの出し物が『ご奉仕喫茶』に決まり執事服着れると思ったのに『神崎さんはメイドさんだよ!』『神崎真央は正義だ!』『抱きまくらVerメイドが手に入る!』なんてことを言っていた。  
シャルに頼み込んで執事服を2つ借りて来るように頼み込んだ。  
期待はできないけどやらないよりましだ。

「で、あんなことがあったのに俺に訓練付き合えとはいいい度胸だなあ」

「そこを何とかお願いしますわ」

ただいまセシリアにフレキシブル偏向射撃の訓練に付き合ってくれと頼まれ、何だかんだアリーナに来ていた。  
口調も変わるくらい不機嫌だった。

「まあいいや、とにかく撃って見なよ。当たらない的になるから」

そういつて足元のポンコツを拾い上げてクアンタを展開する。

「(クアンタルビオンになるには一定の条件が必要なのかな?)」

「それでは行きますわよ」

ドビュンドビュンドビュン

回避行動をとりながらセシリアのブルーティアーズから送られてくる現在の状態を見る。

「(特に変化なし……偏向射撃って明鏡止水みたいな感じかな? だったらよっぽど集中しなきゃいけないんじゃない?)」

「くっ! ほんとに当たらないのですわね」

クアンタの性能嘗めてもらっては困るんだな、全身装甲ではない普通のISを展開してるのと同じくらいしか装甲出てないけどね。本気でやったら人死んじゃうし、ポンコツ自体にリミッターが掛かっている。

「偏向射撃をしようとするときってどんな感じ?」

「レーザーが曲がってるのをイメージしてますわ」

「今度は心を静めてやってみて」

「はい、わかりましたわ」

ドビュン

ステータスに変化があった。ほんの少しだけ……  
ということは……明鏡止水的な感じでいいのかな？

「セシリア、明鏡止水って知ってる？」

「いえ……それはなんですの？」

「知らないならいいや。心に水面を思い浮かべて、流れも何も無い水面だよ」

セシリアは目を閉じた、イメージし始めたみたいだ。  
こういうときって素直だよな、努力家だしいい子だ。

「そうしたらそこに青い雫が落ちる。水面に落ちた雫は静かに波紋を広げる」

「……………」

セシリアはライフルを下に向けたまま撃つとレーザーがカーブし、私の方に向かってきた。私は軽く避けると後ろで訓練していた鈴に

当たった。

「何すんのよ！ セシリア！」

「あれ？ 爆発してない……まさか」

「よかったね。見事に曲がって私のところに飛んできたよ。避けたら鈴に当たったけど」

おお、セシリアがとても嬉しそうな顔してる。

こつこつ時の顔ってみんな可愛いよね。

一夏の奴羨ましいなあ、自分を思ってくれる人がたくさんいて……。

「真央さんありがとうございます！」

「無視すんじゃないわよ！」

「なんですの？ 鈴さん。今お話し中なんですけれど」

「人に攻撃当てといてそういうこというのね……今日こそ白黒つけてやるわ！」

「望むところですわ！」

怒り心頭の鈴に余裕の表情のセシリア。  
まあ避けた私に原因があるんだけどね。

いつの間にか鈴花と真夏も打鉄借りて模擬戦してるし、シャルと夏と篝とラウラは何だか険しい顔してるよ。

「真夏！ あんたあたしと組みなさいよ！」

「鈴花さん、私と組んでいただけます？」

おいおい、そいつら巻き込むなよ。怪我させたら君達のISSのコア破壊するよ？

「いいよ！ リンリン」

「その呼び方やめなさいよ」

「わかりました。がんばりましょう」

「よろしくお願いしますわ」

そうして鈴&真夏対セシリア&鈴花の対決が始まった。

私はクアンタを展開したままで見る。

その方がよくみえる。

鈴花が二刀流で真夏と鈴を引き付けてる間にセシリアがビットを飛ばし攻撃している。

たまに偏向射撃が出るところを見るとあまり使いこなせてないみたいだ。

「セシリア！ あんたレーザーが曲がるって卑怯よ！」

「ふふふ、鈴さん。真央さんは『卑怯汚いは敗者の戯言』と言っていたのをお忘れですか？」

「まおっちの言いそうな言葉だね！ 真夏は『卑怯は正義だ！』っていったたのきいたよ」

「私は『負ける卑怯は真の卑怯ではない』って聞いた」

「どんだけよ！ あいつ」

鈴がそういうとアリーナのバリアを貫いてビームがとんでくる、鈴花と真夏に直撃。

アリーナの壁に激突した。

土煙が晴れると頭から血を流し気絶した鈴花と真夏が横たわっているのが見えた。

クロス      コロスコロスコロスコロスコロスコ

ロスクロス

「ぶち殺す！」

ビームが飛んできた方を見るといたのは…天使みたいなISだった。

「お前えええ！」

「エルメ様の命により、貴様を連行する。抵抗するなら殺す」

「こっちの台詞だ！」

クアンタのブーストを吹かして一気に近寄る。

相手は全身装甲なので表情はわからない。

クアンタから情報が送られてくる『ウイングガンダムゼロ』

「エンドレスワルツVerか」

「死ね」

バスターライフルに向けてうってくるが急上昇してかわす、GNソード？を展開し接近すると相手もビームサーベルを腰から抜き取り接近してくる。

刃を交え、火花が散る。

ソードビットを展開し、相手の動きを制限する。

「お前は殺す。鈴花と真夏に手を出した罰だ」

「ISは兵器だ。殺すために作られたんだぞ」

「あの人はそんなことのためにISを作ったんじゃない」

距離を取るとバスターライフルを左右に向けて光りが収束していくのが見えた、GNソード？ライフルモードにして牽制射撃をする。

「死ね死ね死ね死ね死ねええええええ！」

GNソードをもう一本展開し突っ込む。

左手の方をGNバスターソードにして切り掛かる。  
ビームサーベルで受け止められる。

「くっ！」

「死ねよ……とつとと死ね！」

トランザムを起動させ、本気で殺しにかかる。

「もうすぐだ！ 来い白式！」

俺達は鈴花と坂井さんを先生に預けて真央のいるアリーナに戻ってきた。



セシリアと鈴は付き添わせた。

「……?!?!?……」

そこには赤く光ってるクアンタと装甲の所々碎け散っている敵がいた。

データを見るとウイングガンダムと言っらしい

「くそがあ!」

ウイングガンダムがクアンタに向けてバスターライフルを構えると横からきたソードビットに切り裂かれ爆発する。

ビームサーベルを抜き取り、接近するがクアンタのスピードについていけず、蹴り飛ばされ壁に激突したところでクアンタに首を捕まれる。

「真央! もうやめろ!」

「それ以上やると死ぬぞ!」

「先生達に引き渡そう! もう抵抗できないよその人」

俺と篤、シャルが必死に真央を止めようと説得する。

「……何言ってるの。苦しめて苦しめて殺すんだ……簡単に殺さない」

「殺したら貴様もタダでは済まないぞ！」

ラウラの言葉も受け流し、真央はソードビットをウイングの両腕の二の腕と両足の太ももに刺す。

「ああああああっ！」

ソードビットを戻し、武器も量子変換して仕舞う。

思い留まったと思いいSを解除したら、今度は真央が敵を殴りつけていた。

ポロポロの装甲が砕け、顔も見えるくらいになった。

「アハハハハハハ！　ハハハハハハハ！」

ガン、ドン

「ぐあ、う、ああ！」

真央が投げ飛ばすと、敵のISが強制解除された。

刺された傷はISが止血したみたいで血は止まっているが、かなり

のダメージを受けたみたいでピクリとも動かない。  
その彼女を俺は緊急展開し瞬時加速で拾い上げると、箒達がISを  
装備した状態で真央と俺の間に入った。

「どけよ、よこせよ、そいつ殺さなきゃ収まらないんだよ！」

真央がそういつた瞬間、横から突進され抱き抱えていた人を奪い取  
られた。

そのISは全身装甲でアリーナのバリアに穴が空いているところから  
外に出て姿を消した。  
するとアリーナのバリアが治った。

「逃がさない！」

真央は高度を上げていく

「行かせるか！」

ラウラがレールガンを撃つと真央に直撃した。  
爆煙からIS解除された真央と待機状態のポンコツが真つ逆さまで  
落ちていく。  
箒が真央をシャルがポンコツをキャッチした。

「真央大丈夫か!？」

「慌てるな、一夏。気絶しているだけだ」

「よかった……」

取り合えず真央を保健室に連れていったら、頭に包帯を巻いている  
鈴花や坂井さんにどうしたのか問い詰められた。

「うう……」

「目が覚めたか」

目を開けると白い天井と隣に織斑先生がいた。  
とても面倒そうな顔をしていたが原因はわかっているのでもいつも以  
上に申し訳ない。

「……処分は？」

「3週間の謹慎と専用機没収、無期限IS使用禁止。文化祭には出れんな」

「……へー、侵入者を始末しそこねただけで随分重いな」

まあどうでもいい。あいつをやり損ねたのは私だ。

「そこが問題なんだ。敵のISのコアが砕けていた。コアはこの世界に決まった数しかなく、どの国も喉から手が出るほど欲しいものだ」

「それを破壊した私は悪ですか。なるほど……腐った世界になっただ。くだらない」

そついい立ち上がり保健室から出ていく。

部屋に戻る前に職員室に行き、あるものを貰ってた。

### 第39話「会長と1stコンタクト」

あれから2週間たった。

あれから何も食べていないし、何も飲んでない。

誰とも関わってないし、会おうとも思わない。

一夏達がドアをノックしてきても鍵を開けようとしなない。

強攻策に出られたらまずいので机をドアに押し当てて、ベッドをその後ろに移動させた。

ポンコツは連れてかれたみたいだ……あれ？ 右目にコンタクトが入ってる。

「没収のし忘れか」

コンコン

「神崎、出てこい」

織斑先生の声、調度いい渡してしまおう。

ドアが開けれるくらいのスペースを作り開ける。

「貴様、IS隠し持ってるな？」

「はい」

コンタクトをとって織斑先生に渡す。

すると後ろにいた黒服の男に殴られドアから一歩出たところから部屋の真ん中辺りまでぶっ飛ばされ、ドアが勢いよく閉められる。

「そうかい、そんなに俺を敵に回したいか」

ドアのまえのスペースを完全に無くし、シャワールームに猫の抱きまくらを抱えて閉じこもる。

ちなみに阿修羅は何かするんじゃないかってことになり、人格を私のなかに戻された。

(ねむ……)

『真央、何か食え』

(食って何になるんだよ)

『こんなとこ鈴花にみられでもしたら……』

(くるわけないだろ)

そついうと猫の抱きまくらを力いっぱい抱きしめ、意識を手放した。

鈴花 Side

「千冬姉！ ポンコツをIS委員会に渡すって正気かよ！」

「織斑先生と呼べ。私ではどうにもできん……束が作ったISを解体して技術がほしいんだろ」

真央が謹慎になってから一夏くん達はずっとイライラしてる。真央は確かにやり過ぎた。

けどあれは正当防衛になるしISを没収して使用を禁止、それでのISをよこせってただ技術が欲しいとしか聞こえない。それに真央の部屋に言っても返事は帰ってこない、ドアは開かない、何故かISを展開出来ないようにジャミングが掛かってる。

「……真央」

「あの……とても言いにくいのですが」

「どうしたんですか？ 山田先生」

とても控えめに挙手しながら前に出てきた。

「謹慎を言い渡された日に職員室にいる先生に退学の書類を貰って



いったのを見たんですけど……」

「「「「「」」」」」」

……いけない。みんな爆発寸前だ。

織斑先生も手を握りしめてるし、何だか2組の方からも殺気が……

……。私は立ち上がりゆっくり教室から出ていく、寮に向かって歩く。

(その前にポンちゃんを回収しなきゃ)

「手伝うよ。鈴っち」

「今回は東さんも参戦かなあー、久しぶりに頭にきちゃった!」

真夏が2組のドアをぶちやぶって東さんはどこからともなく現れた。

「東さんはIS委員会の方を頼みます」

「あいあいさー」

そついうと窓から飛び降りた。  
相変わらず無茶苦茶な人だ。

「さて、地下だね」

「そう、IS学園 地下特別区画」

織斑先生からスツた真央のコンタクトをつけ、ラファエルを起動させる。

真夏は打鉄をとりに行って行った。

「待て！」

ビクッ

織斑先生の威圧感で私も真夏も動きが止まる。  
ゆっくり近づいてくる織斑先生をじっと見つめる。

「ポンコツの方は私が責任を持って神崎に届ける。お前達は神崎のところにいってやれ……あいつはお前達に怪我させた奴をみすみす逃がしたことに腹をたてている」

『IS使用禁止はどうにもならんがな』と付け加えてから山田先生にクラスを任せ、歩いてどこかへ行ってしまった。  
あまりにも意外な言葉で驚きを隠せなかったが、真央のことが心配ですぐに寮に走って行った。

「……………え？」

部屋の前にくると扉が消し飛んでいて、中も荒れ果てていた。恐る恐る入ってみると、ベッドの上で真央が楯無先輩に寄り添いながら寝ていた。

「あら、鈴花ちゃんに真夏ちゃん。真央ちゃんはもう大丈夫よ、でも貴女達の怪我をずっと気にしていたみたいよこの子」

「そうですか、すみません」

「まおっちの退学届けは？」

「ああ、あれね。あれは……………燃やしちゃった」

「……ありがとうございます！」

やっちゃった みたいな感じで言う楯無先輩にお礼を言うと真央が起きた。

「にゅう……………」

「……（可愛い……………襲いたい）……」

眠そうに起き上がる真央を襲いたい衝動を抑えてキスをした。

「ん……」

「あー！ ずるい真夏も！」

真夏も真央にキスをした。外野から見れば百合だけど真央は列記とした男だから平気なのだ。

「いきなり何すんの」

「「スキンシップ&愛情表現」」

「楯無先輩とは違う反応だ。はあこの学園にいる理由が無くなったから辞めようとしたのに燃やしやがって」

「怒らないでよ。そのかわり私の初めてあげるんだから」

「「え!?!」」

初めてってあれのこと？男と女が交わるあれ!？  
真央がそんなことしてるなんて……。

「勘違いさせるような言い方しないでください」

「私は気持ち良かったよ？」

「「……真央」」

「違う！ この人がいきなりキスしてきただけで鈴花達が想像して  
ることはしてない！」

「捨てるの！？ もう用済みなのね……しくしく」

「ややこしくしないでくださいよ！ 楯無先輩！」

もうお仕置きしかないよね……。

私好みの真央に調教しなきゃだめね……フッフフ。

第39話「会長と1stコソタクト」(後書き)

楯無「真央ちゃんが一撃でやられるなんて……」

真夏「鈴っち……まおっち2週間前から何も食べてないんだよ?」

鈴花「あっ! ご、ごめんね真央!」

真央「(楯無先輩……いつか復讐してやる)」

## 第40話「謹慎明け」

「真央、今日から学校行けるね！」

「元気ですなあ、鈴花は。俺は行かないよ」

真央の口調はアリーナ襲撃の時から元に戻ってしまった。  
神風学園で『英雄』と言われた真央に戻ってしまったのが残念だ。

「ねえ、口調戻さない？」

「いいんだよ、愛想よくしてもいいみがない」

真央はこうなったら頑固だから何しても無駄だろう。  
まだ私が怪我した時のこと怒ってるのかな？ あんまり自分自身を責めないでほしいな。

「せめて学校いこ？ みんな心配してるよ？」

「敵に教わることなんかない。ポンコツおいで」

「…え？」

後ろを振り向くとクロゼットを開けて出てくる妙に見覚えがある夕又キが出てきた。確かまだ教師達が管理しているはずのものだった。

「なんでポンちゃんが？」

「コイツは自分の意志で動くんだけ。俺のどこに来てもおかしくない」

「いつから？」

「一週間前……お前達が文化祭で浮かれてるときにこいつがここにきた」

有り得る……ポンちゃんはビーム出せるし、ISだし……。  
そつえば一夏くんがポンちゃんに助けってもらったって言うてたっけ……あの時か

「平気なの？ 怒られたりしない？」

「すると思っよ」

「残念だが怒りはしない」

「「！？」」

入口の方を見ると織斑先生が立っていた。まあその後ろに黒服の男



がいるのは気にしない。

いつの間にか楯無先輩がポンちゃんを抱いてベッドに腰掛けてるのも気にしない。あの人は真央曰く『イレギュラー』だからね

「何の用？」

「神崎すまなかった」

織斑先生が真央に謝り頭を下げた。

私も真央も黒服の男も驚いていたが、先輩だけはクスクスと笑っていた。

真央は謝られるのに馴れてない……だから謝られたらどうしていいのかわからなくなってオドオドします、これは小さい頃から変わってないようでオドオドしました。

「え、えっと……その……だ、大丈夫ですよ。大丈夫ですから頭上げてください！」

「IS学園は神崎とポンコツを保護、協力する方針だ」

「な、なぜですか？」

束さんかな？ やり過ぎてないみたいでよかった。

正直心配だったんだよね、IS委員会本部を吹き飛ばさないかって思い過ぎだったみたいだ。

「東がIS委員会を半分吹き飛ばしたんだ。『真央ちゃんに手を出してタダで済むと思ってるじゃないよね?』って言いながらな」

「恐ろしい人ですね」

……ごめんね、真央。それきつと私のせい。

やっぱり東さんに頼む時はやり過ぎないように言うべきだね。すると天井から東さんが降りてきた。

「でー、なんで委員会の犬が真央ちゃんの部屋にいるのかなー?」

「神崎真央とそのISを回収するためだ、力づくでもな!」

織斑先生に邪魔されないように窓際に立って黒服の男は銃を真央に向ける。

真央は気にせずベッドに寝転んだ。

「あんださあ、隙だらけだよ?」

「面白いくらい隙だらけね」

「ああ倒してくださいって言うてるような物だな」

真央、楯無先輩、織斑先生が手厳しい指摘をすると男の表情が険し

くなる。

パン!

パン

「この子を傷ものにしないでくれる？ 私のお気に入りなの」

「くっ！」

楯無先輩がISの部分展開で銃弾を防ぐと男は苦い顔をしたが、これくらいは予想出来ていただろう。

しばらくするとドアが吹き飛び異様な空気を纏った鈴と真夏が現れた。

「ねえ…今の銃声なに？まおっちを狙ったのかな？ 殺すしかないのかな？」

「真央に手を出すとはいい度胸じゃない、ウサ晴らしにでもなってもらいませよ真夏」

「私も入れてよ……」

さて、真央に手を出したくそつたれをミンチにしますかな

鈴花と鈴と真夏にボコされ拘束された男をIS委員会に連れていき、命令をくだした委員をクビにさせた。

「ねえ、真央ちゃん」

「何ですか？ 楯無先輩」

「いつもそんな感じで寝てるの？」

「レイが無駄なこと教えたみたいで、たぶんレイが帰ってくるまでこのままですね」

「ふーん、ストッパーの役目も担ってるのね」

まあ、アメリカは昨日侵入者が入って警戒体勢が厳しくなったからレイもまだ帰れないといってたけどね。ご苦労様です

「……………略奪愛もいいわね」

「そうですね……………って、え？」

「なんでもないわ、気にしにないで」

笑顔だけど、どこか黒いものを感じる。  
略奪って何を略奪する気なんだろう・・・なんか寒気がする。もう  
寝よう、きつと疲れてるんだ。

「ふふふ、真央ちゃん・・・あなたは私好みに調教してあげる」  
「

真央の寝顔は予想以上に可愛かった。  
こんな子を見つけてほっとく人がいるわけがない、いたとしてもそ  
れはどこかおかしい人なんだでしょう。  
同性でも性別を忘れてしまってくらい・・・一夏くんは大丈夫なのか  
しら

「ふふふ、ゾクゾクしちゃう・・・」

真央の頬にキスし、首筋をなめる。

「……んっ！……」

「鈴花ちゃんて舐めにくいわね……。まあいいわ、続きは夜で」

まあほんとは略奪なんてしないけど、真央ちゃんの注意を引くには言ったほうがいいような気がした。

変な風に勘違いされてるけど真央ちゃんだから仕方ないわね。

真央から体を離し静かに部屋を出て自分の教室に向かう。

「真央ちゃんエネルギーチャージ完了したことだし、今日も頑張りますかな。今度はちゃんと守ってあげるんだよ阿修羅」

「わかつている」

「真央ちゃんはもういつ感情が爆発してもおかしくない……」

「あいつの暴走はやつらを起動させてしまつからな」

「あれが起動したらどうなるの？」

この話を聞かれるとまずいから生徒会室に入る。

あのISのことを聞いたときは驚いた。機体名は決まっていらないけど、危険性は尋常じゃないのは阿修羅の話聞いたときにわかった。

鈴花ちゃんがナノマシンの提供さえしてなければ、一度感情を吐き出させるんだけど……

「あれは操縦者はいらなからな、完全に破壊するまで破壊と殺戮を繰り返す。おまけに何個かの核を動力にしてるから半永久的に動き続けるし、エネルギー切れもしない。最強最悪完全破壊兵器になる。」

「世界が一致団結すれば・・・」

「無理だ。今あるISがいくら束になっても勝てない・・・一撃で存在自体消される程の火力だ。運よくエネルギー切れまで追い込んだとしても装甲が厚いからな」

「ならどうすればいいの？ 私達はただ殺されるのを待てばいいの！？」

「・・・方法は、ある」

言いづらそうに答える阿修羅につめよる。  
どんな犠牲を払ってもいい、人類を守るためならなんでも

「それは・・・クアンタルビオンの制御装置ミレターをはずし、完全覚醒した真央を前面に押し出せば倒せる。もうひとつは・・・」

「もうひとつは！？」

「・・・覚悟はあるのか？」

「人類の未来より大切なものはない」

そう、せめてこの学園の生徒だけでも守らないといけない。

あのISは人が乗ってる状態はただのISと同じ、真央ちゃんが暴走したときは違い私でもたおせるが暴走したときは一瞬で消される。

それは何としてもさけなければならない。

「2つ目はあのISが完全に起動する前に

」

「……え？」

「よく考えるんだな。俺は真央の体に意識を戻して真央に溶け込む。もしものときのために」

そついい阿修羅は生徒会室を出ていった。

私は阿修羅のいったことが頭の中をグルグル回っていた。

真央を殺すことだ

「（どうして……他にないの？ どっちにしる真央ちゃんは……）」

窓の外を見ながら考える。真央を殺すか、世界が勝てない相手と戦わせるか……、



「（…死ぬ…遅かれ早かれ死ぬ…生き残る確率がないに等しい）  
」

下唇を噛み締めながら他に方法がないかと考え込んだ。

第40話「謹慎明け」（後書き）

女生徒「……生徒会室の前ですごくいいこと聞いちゃった」

??「何を聞いたの？」

女生徒「え？ あなたは？」

??「私？ 私は真紀、それで何を聞いたの？」

女生徒「神崎くんが感情を爆発させるとなんかすごいISを起動して、破壊の限りを尽くす。それを止めるには神崎くんを殺すかしな  
いとだめって」

真紀「ふーん、ありがと。じゃ」

女生徒「あっはい（何だか神崎くんに似てる…）」

真紀「（マスコミにリークさせるか……楽しみだよ真央）」

第41話「決別」(前書き)

訳のわからない展開にしたのは申し訳ない

でも後悔や反省はしておりません!!

## 第41話「決別」

『ニユースをお伝えします：なんと！ IS学園1年生神崎真央が各国が協力して研究しているISで世界を破滅に追いやる危険があるとのことです！すでにIS学園には身柄引き渡しを要請しているようです』

夜のIS学園が一気に騒がしくなった。まあ仕方ないよね、なんか「あのテレビ局潰れる」とか聞こえてくるし・・・  
私は鈴花と真夏と一緒に夕食を食べていた。

「真央、これなんだろうね」

「そうだね」

1年寮の学食では騒ぎが沈静化してきた。講義の電話をしに大半の生徒が消えたからだ。  
よく知ってる人がいてくれてよかったよ。

「ねえ、真央……」

弱々しい声の方を見ると鈴、セシリア、シャル、ラウラその他学年

問わず代表候補生がいた。  
嫌な予感がする、せめて一夏や筈がいたらよかったのになあ。

「私、真央の身柄を確保するように国から言われてるの……だから」

「大人しく捕まれって？無理だね。他もそうなの？」

みんな黙って頷く、すると楯無とその妹がいないことに気がついた。  
確か妹さんは代表候補生だったような……あの二人はどうしたんだ  
ろ？

「まつ、見に覚えのないことを償う気はないし、捕まってやる理由  
もないし」

そついいお盆を返し、部屋に戻ろうとすると発砲音とともに少し前  
の床の表面が爆ぜた。  
神風学園では日常的だった光景だ、威嚇というより注意を引くため  
に撃ったって感じだな。

「……俺と本気でやるつもりなのか？」

候補生らを睨みつけると2年の先輩が拘束させられた鈴花と真夏を  
床に転がし、銃を突き付けた。

あの二人が易々と拘束されるなんて珍しいと思いつながら先輩に視線

を戻した。

「この二人がどうなってもいいなら部屋に戻ればいい」

「真央！ 戻って逃げて！」

「真夏は平気！何の心配もないから逃げてまおっち！」

「黙ってる」

ドガドガ

「ぐっ……」

「イタ……」

2年の先輩が蹴りを入れた瞬間、殺意が沸いた。

明確な殺意……候補生に対する、世界に対する殺意……殺してやる  
うか

「ちょ、あんだ！やりすぎでしょ！」

「これくらいしないと神崎は動かない、手段を選んでる余裕なんて  
ない」

「お前      ぐっ……」

『真央、悪いがお前を暴走させるわけにはいかない』

「阿修羅…お前は鈴花達に理不尽な暴力を振るった奴を許せっつてい  
うのか!？」

『お前が暴走すると取り返しのつかないことになる、少し眠る』

「くっ（睡魔が………阿修羅め、いつか……）」

意識を失いそのまま倒れる。

それを担ぎ、鈴花と真夏を置いて候補生は次々と食堂を後にする。

「やめて！ 真央をつれてかないで！ かえしてよ！」

「くそ！ これほどけよ！くそくそまおっち！」

鈴花と真夏の前に鈴と1組代表候補生が並んでシャルとセシリアが  
拘束をといた。

4人を睨みながら鈴花と真夏は立ち上がった。

「ご、ごめ「裏切り者」…鈴花」

「鈴花！ 僕たちもやりたくなかったけど「言い訳なんて聞きたく  
ない」…真夏………」

「お前達はもう仲間じゃない………これで真央が死んだらお前達が殺

したのと同じだ！」

「「「「……っ！」「」」」

いつもとは違う鈴花と真夏を見て4人は本気で怒ってるのがわかった。

それほど二人には真央の存在が大きく絶対的だった。

「もう……もう二度と真央に関わらないで」

真夏がそついうと鈴花と真夏は食堂を出ようとした。

「どうして？」

「真央の部屋、明日助けに行くから準備と東さんに連絡しに」

「まおつちを悪者にした奴に容赦はしない……殺してやる」

食堂を出ていく二人をもう止めることはできなく4人は俯く。  
すると一夏と篤が近づいてきた。

「代表候補生で国のいうことに逆らえなかったんだろ？」

「でもあたしは……守ろうって決めた人を傷つけた……お姉ちゃん



みたいに接してた人を傷つけた……」

「「「……………」」」

鈴はその場で泣き出してしまい、一先ず解散し一夏が鈴を部屋まで送っていった。

「髪の毛で十分よね？」

「ああ！ これでこのISが起動する……………その名も『ゴッド』世界を纏め上げる唯一無二のISだ！」

「完成したら教えて」

「ああ！ わかってるよ真紀さん」

真紀と呼ばれた女性は研究室を後にする。

「ふふふ、真央……………私のオリジナル……………そして最愛の人……………」

そのままある部屋に入るとそこに腰までであった髪を肩より少し長いくらいに切られた真央が寝かされていた。

髪が切り揃えられているのは真紀が丁寧に切ったからだ。

「（はぁ…可愛い、真央はもう私だけのもの…Mとスコールとかいう人の条件で好きにしていって言うてたから、真央は私のもの…誰にも渡さない）」

部屋の鍵をかけてドアの前に棚を置き、真央にキスをし眠りについた。

『真央ちゃんはIS委員会の施設にいないよ？ ポンコツの反応もないし』

「そうですね…何とか探してください！」

「その必要はないわ。真央ちゃんは貴女がアメリカに行った時に行った施設にいる」

楯無さんが音もなく現れてそう断言した。

『ほんとみたいだね〜、こっちもその施設から真央ちゃんのナノマシンの反応でたよ。でもおかしいんだよね〜』

「どうしたんですか？」

『ナノマシンの反応が2つあって2つとも同じなんだよね、今同じところにいるけど……調べてみるね！ばいびー』

通信が切れ、私は肩の力を抜く。

行ったことのある施設ならだいたいのことはわかる。

楯無さんはさっきの人達に混ざってなかったのが気になる。

「ごめんなさい」

「えっ？」

「私と阿修羅が話してるところを誰かに聞かれて……こんなことに」

楯無さんも阿修羅さんと話したんだ……だとしたらあの選択も迫られたのかな……

だとしたらどんな選択したんだろう。

「私が注意を怠らなければ……こんなことには……」

「楯無さんのせいじゃないです。私も力がなかったから真央を連れてかれたんです」

「真夏も……だけどさつき専用機が届いたから戦える！」

「私も助けに行っている？」

「もちろんです」

「会長さんがいれば心強いです」

真央がいるのはアメリカ……もしかすると福音も出てくるかもしれない。軍用ISも出てくるはず  
助け出した後は東さんと合流して匿ってもらっしかない。

「明日に向けてもう寝ましよう」

「はい」

「りょうかい！」

部屋の電気をけしベッドに入り眠りについた。

ここはどこなんだろう……夢？ 少し違う心地好い……福音の時に一夏と話したあの空間に似ている。

空はエメラルド、下は水面みたいな感じだ。水面に立ってるなんて俺はいつから忍者になったんだろう？

「ねえねえ、君は何のために戦ってたの？」

「ん？」

声のする方を見ると髪の毛を短くした俺が立っていた。いつからそこにいたのか疑問だけど気にしたら負けだろう。

「んーっと、初めは大切な人達を守りたかったからかな」

「それで今も守りたい？」

「それは変わらないかな、鈴達も代表候補生だから仕方なかったんだろ」

「ふーん、さすが武装集団の集まる神風学園を変えた男だね」

「過去の話した」

あの時の神風学園は危険だった……銃、刀、爆弾なんて持ってたり前だった。それで脅迫とかしてたから叩き潰していったら学園が敵になって本気で捻り潰したら大人しくなっただけのこと。その後からファンクラブやら真央に仕える部とか何やらで変態学園になったけど。

「力がほしい？」

「いいよ、力なんて十分持ってる」

「あのISが起動するかもしれないのに？」

「……いい、束さんにお前のリミッターを外して貰えば」

「気づいてたんだ……真央僕はね、君を失いたくないんだ」

「……………」

「リミッターをはずしたらどうなるかわかってるでしょ？」

リミッターを外せば今まで3倍以上の性能を手に入れられる上にエネルギー切れがない。

だけど体に負担が大きい、決着がつくまえに俺が壊れるだろう。

「君は勝って生きて帰ってこれることが出来るの？」

「お前は俺とどれくらい長くいるの？ 出来る出来ないじゃない…  
…やるかやらないかだ」

「そうだったね、真央はそういう人だったね。わかったよ、出来るだけサポートしてあげる」

そういうと俺似の子供がスッと消えた。

コイツとこうして話すのは初めてだったな、普段は思考を読ませてたからなんだか新鮮だ。

「無茶させて悪いな……………ポンコツ」

そっ払い、目を閉じた。

## 第42話「神始動」

．．．とある研究所．．．

「ん．．．？　ここは？」

目を覚ましてあたりを見渡すと、横に一卵性の双子なんじゃないかと思うくらいそっくりな子が寝ていた。

兄弟なんていなかったはず．．．まさかクローン？

「ていうのは置いていてっと、（阿修羅、出て来い）」

「．．．．．（あれ？　阿修羅を感じない．．．）」

なんでだ？　いつもなら阿修羅の人格を常に感じられるのに、今は何も感じない．．．。

あいつ、余計なことした拳句にどっかいきやがったな。

「阿修羅はあなたと融合、一つになったのよ」

「えっ？」



後ろを振り向くと目をこすりながら体を起こしているそっくりさんがこつちをみていた。

「一つ・・・ねえ、本来の形になったのか。で君は誰？俺と同じ感じがするんだけど」

「私は真紀。あなたの遺伝子配列を元に作られ、あなたのナノマシンを模したものを入れられた存在よ。クローンみたいなものね」

「なんで俺に似せたんだ？」

「最強最悪のIS『ゴッド』の破壊キーマスターである貴方に対抗するための存在ね」

「それがあのISの名前か・・・」

厄介だなあ、ゼウスとか動いてくれてないかな・・・エルメに対抗できるのはアイツくらいだろう。鈴花や真夏達じゃ瞬殺されるかもしれないし楯無先輩ならいけるか、精神状態によるけど（鈴花と真夏限定）

「はぁ・・・俺がここにいてってことはゴッドは起動するってことか」

「そついうことになるね」

ムジャー

『真紀さん、完成したぞ！ いつでも起動できるぞ』

「今いく」

ピッ

「じゃ、少し出て行くけど大人しくしててね」

そういうと部屋から出て行った。

大人しくしてろってISもないのに暴れるわけないでしょ、見た感じ真紀と一緒にいれば安全みたいだし。

「ふう、ポンコツーいるんだろ？ 出て来なよ」

天井の空気溝からクルリと降りてくる狸を受け止める。

どこから来たのか教えてほしいくらいだ……っていつても俺は空気溝を通れるサイズじゃないし。

「で、現状報告してくれないかな？」

「ポン！」

ポンコツはうなずいてモニターを出してIS学園、鈴花達の様子な

どを流した。  
それを黙って見た。

「これで動かせるのね」

「ああ、あとは君のナノマシンに反応して動く。性能をフルで出せるようにしてある、計画は今日の夜だ」

「わかったわ。でも・・・」

「わかってる、彼は君に任せる」

そういうと研究員が出て行く、真紀はゴッドを見上げる。

「私の真央を傷つける全てのものを壊す」

あの時私に生きる希望をくれた、モルモット実験台になつていた私を救い出してくれた真央を今度は私が守る・・・そのための力を今手に入れた。

「ふふふ、まずはIS委員会？ それともIS学園？」

真紀は笑顔でつぶやく、その笑顔は狂気に満ちていた。

「大体わかった。でも鈴花達がここに来るのをやめさせて、束さんのところにいかせてISの強化と訓練するように言ってもらえる?」

ポンコツは首を横にふって拒否する。

「なんで? 通信できないの?」

ポンコツはまたモニターを出して砲撃体勢の真夏とビームを圧縮している鈴花といつでも突撃できるようにしている楯無先輩が映っていた。

まさか・・・ね。

「ねえ、まさかとは思っけど・・・これってここの上空?」

清しい笑顔でうなづくポンコツを見て背中に冷や汗がドッと流れる。

下手したら俺にも被害がでるのわかってるのかな?

「あー、どうす「ドオオオオン！」・・・選択の余地なしか」

荒っぽいのが悪いとはいわないけど、ちゃんと別働隊がいるんだよね？

いなかったら半分以上無意味だよ？  
そうモタモタ頭の中でおちゃらけてるとドアが吹き飛んだ。

「真央、大丈夫？」

「真紀か、どいつもこいつもド派手なことが好きだね」

「あら、あなたと私は何も変わらないよ？ 性別が違うだけで」

うーん、ここに鈴花が「真央大丈夫！？」そうそう、そんな感じできたら混乱するんじゃないの？  
あの子意外にハプニングに弱いからなあ。

「真央が・・・二人？」

「あれ？ 鈴花思ったより早い」

「その髪が短いほうが真央？」

目を丸くして、聞いてくる。予想通りの反応だ。

「ええ、そうよ。殺されるより髪の毛をわたしたほうがいいと思っ  
て」

「っ！ 真央早くいこ、束さんに匿ってもらうことになってるから」

鈴花が俺の手を引いて部屋を出ようとすると思いと真紀が通路をふさぐ。  
殺気を放ちながら、鈴花を睨みつけているが攻撃してくる様子はな  
い。  
少しの間、にらみ合っていたが天井が崩れ落ち楯無先輩が現れた。

「鈴花ちゃん！ 離脱するわよ！」

「はい！」

「ケホツケホツ！ 真央！」

真紀から感情が伝わってくる。悲しい、辛い、切ない、怒り、苦し  
み、表情だけでは読み取れない部分まで頭に流れてくる。  
さすがに考えてることはわからないけど。

「まおっち平気？」

「うん、って真夏はいつから専用機持ちになったの？」

「昨日だよ」

昨日か・・・最近だなあ。きつと24時間たつてないよ？

「お前ら動くな！」

後ろからドスがきいた聞きなれた声があった、できればここで出会いたくなかった人物・・・織斑千冬だ。  
ホントにここで会いたくなかった。

「天草、坂井、楯無、神崎、直ちにIS学園に戻れ。さもなければ敵とみなす」

「あんなとこ」待つて鈴花ちゃん「えっ？」

「囲まれてる、ここは素直に言うこと聞いたほうがいいみたい」

周りを見ると、ISを纏った教師があたりを包囲していた。  
逃げるのは骨が折れるかもしれない、ていうか逃げれる確率なんてないに等しい。

「わかりました・・・」

「よろしい、ついて来い」

鈴花達は仕方なさそうについていき学園への帰路に着いた。  
それを真紀は遠くでみていた。

「（あいつらこりもせず真央を傷つけるつもりなの？ だとしたら作戦開始したときに真央を助け出すしかないか）」

「真紀、作戦はIS学園の襲撃し壊滅的な被害を与えることよ」

「スコール……」

「それができたら貴女は自由にゴッドをあげる、私達はゴッドの発展機をもらう……貴女も私も利益がある」

「わかってる……」

「それと神崎くんはあなたのこと眼中にないみたいよ？ 嘘だと思っ  
たら貴女のとくいな方法で確かめなさい」

そういうとスコールは施設の中に入っていった。真紀は何とも言えない不安を抱いた。

（嘘だよ……真央）



学園に戻ると鈴花達は謹慎処分で俺はIS学園の地下特別区画の檻に入れられた。なんでもゴツドはメディアにリークされたみたいで破壊キーである俺は最重要人物になっていた。

「いくらなんでも檻ってなんだよ？ 悪いことした覚えはないぞ？」

正直、ストレスが溜まっていた。溜まりすぎていて持ってこられる飯を食べる気にもならない。

山田先生が持つてくると和むけど、これは扱いがひどすぎる。

「おい、飯だ。感謝しろ」

「うるせえよ、とつとと失せる」

偉そうにしてくる教師が大半だからストレスがたまる。

「ふん、お前みたいな屑に食事を持ってきてやるなんて虫唾がはしる」

「なら持ってこなくていいよ」

「屑は屑だな、天草達もはじめはいい生徒だったが、お前とかかわって屑になった」

「なんだと？」

「もう一度いつてやろう、お前も天草達も屑だ」

「なあ、鈴。真央が帰ってきたっていつてたぞ」

「・・・うん、わかった」

「鈴・・・真央もわかってくれてるって、な？」

「・・・一夏、ありがとう・・・」

食堂で一夏が鈴をなぐさめてる。真央が連れてかれてからずっと元気がない。

シャルたちも罪悪感で胸がいつぱいになっていた。

一夏はそんなみんなの姿を見ていたくなかった。

「（真央どこにいるんだ？ IS学園の敷地内にいるのは間違いないんだが……）」

ドオオオオン！

「爆発！？ 敵襲か？」

「一夏、鈴！」

「箒にシャル、ラウラ、セシリア！」

「地下のほうからだ！ いくぞ！」

「ああ、わかった」

煙の中、真央がクアンタルビオンを展開して立っている。その手には教師の首をつかんでいた。

「頭に乗リやがって……いつかい死ぬか？」

「ガッ！……グウ」

教師を放り投げ、天井を突き破り外に出るとISを纏った教師と代表候補生がいた。  
楯無より弱ければ相手にならない。

「死ねよ」

GNソードVライフルモードで正確に撃っていく。  
ハイパーセンサーで鈴花達を探すとどうやら一緒にいるみたいだった。

そこが戦闘に巻き込まれないようにしながら攻撃する。

「ちっ！ ちょこまかと」

「お前達は俺に勝てないよ」

回避ルートが開いたので無理やりとおり、太平洋に出た。  
すると目の前から通常の5倍くらいの大きさの全身装甲のISがとんでくるのが見えた。

そのISは俺の前で止まる。

「真央、なんで私のそばにいてくれないの？」

「真紀か、ていうことはそれがゴッド」

「私のものにならない真央なんていない」

ゴッドの後ろにライフルビットを30基以上展開し、両手にバスターライフルを握ってかまえた。

追っ手がくる前に終わらせないとおけない気がした。

GNソードを両手に展開したら、ライフルビットが攻撃してきた。羽を広げ、なんとかかわしていく。

「狸を通してみてたよ・・・鈴花って子とかを特別視してた、いくら傷つけられてもその子達を傷つけないようにしてた」

「それがどうした!」

ビームをビットに向けて撃つがまったくあたらない。

俺は真紀がバスターライフルも撃ってるのにどうして30基以上のビットをここまで正確にあやつれることに疑問を持っていた。

しかも威力がハンパなく、絶対防御ですら操縦者を守るか疑問なところだ。

「あなたは髪の毛をきられたあと、IS委員会に引き渡され死刑になるところを私が掛け合って助けたの。貴方が私のそばにいてくれればいいって思ってた」

「それはありがとう、無茶苦茶な理由で死にたくないからホントに感謝してるよ」

「でも貴方は私から離れた」

追加でビットを10基展開される。

こっちもソードビットを展開し、ビットをいくつか落とすと砲撃が止んだ。

「そっか、あの子達を殺せばいいのか」

そっいつて真紀は学園に向かう。

追いかけるがなかなか追いつかない。ビームを撃って牽制するが機体に当たったら弾かれた。

「（鈴花達は殺させない！ こいつは危険だ）」

「射程範囲内・・・校舎ロックオン」

真紀は引き金を引いた。ビームが校舎に当たりその部分が爆ぜた。主に機械だからいろいろまずい・・・なんとしてもとめない

「ポンコツ！ リミッター外せ、このままじゃ何もかも失う！」

ISから「拒否」の表示が出る、こんなときに・・・

「ふふふ、見てて真央・・・今度は人が消える姿を見せてあげる」

狂気に満ちた笑顔を浮かべ、エネルギーをチャージし始めた。

「リミッターを外せポンコツ・・・俺が死ぬと思ってるのか？ なら俺はお前と約束するよ、死なないって・・・だから外して」

《リミッター解除、GNドライブ起動 全身装甲》

表示がでた瞬間、全身が装甲に覆われ力がわいてくるのがわかった。あとは俺次第・・・大丈夫やれる！

「やめる！」

バスターライフルを一つ切り裂き、ビームを撃つがかわされる。また大量にビットを展開されるが攻撃が全部見える。

「なんでっ邪魔するの!!」

「傷つけられたくない人がいるからだよ！」

「真央を傷つける人がいるとこに碌な奴がいるわけない！」

「それは単なる思い込みだ！」

GNソードでビットを切り裂く、性能が全面的に向上してるからビットの動きについていけるようになった。

ゴッドは高出力ビームサーベルを抜いて近づいてくるのを迎え撃つ。GNソードとビームサーベルがぶつかり合い、火花が散る。

「うるさい！ うるさいうるさいうるさいうるさい！」

「なんでお前は俺にそこまで依存してるんだ？」

「たった一人の家族みたいな人だもん・・・血はつながってないけど・・・」

「・・・っ！」

砲撃が激しくなる、感情に素直だなあ。

なんとかよけながら反撃するがまったく当たらない。

ポンコツから送られてきたデータによると本体には対ビームコーティングされていた。

「わかってよ・・・なんでわかってくれないの・・・」

「わかんないよ、俺は人に無理に理解を求めたりしたことがないからね」



たぶんないはず……

少しずつ学園から離れていく、ビットの1/10を減らしたがまだまだたくさんある。

相手も俺もエネルギー切れがないからいつ終わるのかわからない。

「お前なんかいらぬ……消えろ！」

ビームサーベルを両手に持ち一気に距離をつめられる。

急上昇してそれをかわすがビットの攻撃が激しくなる。

まだビットは50基あるから仕方ないと言えばしかたない。

一撃でもくらえばくわつた場所が消し飛ばす可能性があるから当たる訳にはいかない。

「消えろ消えろ消えろ消えろ！」

「くつ、まだ死ぬわけにはいかないんだよ！」

そのとき目の色がエメラルドに変わった。

第43話「半分覚醒？」（前書き）

悪いとは思ってる

けど引き返せなかった

### 第43話「半分覚醒？」

「（なんだろう・・・わかる、ビットの動きはもちろん相手の動き、感情が手に取るように・・・）」

真央はハイパーセンサーの反応より早く反応できることに驚いていた。

今まではハイパーセンサーの反応した瞬間に回避行動などをとっていたから、ついに人間離れたかともで思っくらいだった。ビットの動きを先読みして切り裂いていく。

「くっ！ その程度で私を倒せると思うなあ！」

「思っぢゃいなよ！」

IS学園からだいぶ離れたところで一旦止まる。ビットが真央を囲み、ゴッドもバスターライフルを構える。

「真央、なんでいつもあっち行ったりこっち行ったりしてるの？」

「いろいろな視点からいろんなものを見たいんだ」

「・・・最終警告、私のところに来て」

「無理かな、今の真紀は皆を殺しそうだし」

「そう、残念」

そついいバスターライフルを撃つ、真央は軽くよけビットを一基切り落とし包囲から抜け出す。

片方のGNソードをライフルモードにし、ビット掃討に移った。

「真央！」

声のするほうを見ると一夏がいつものメンツを率いてこっちに近づいてきていた。

一撃くらったらただでは済まないのを知っている真央は焦った。

「一夏！？ 来るな！ 学園に戻れ！」

「お前をおいて戻れるか！？」

「そつだよ、僕達を少しは頼つてよ」

「そうですね。水臭いですわよ？」

「こいつが、学園に攻撃してきた命知らずは」

「ふん、叩きのめすだけだ」

そんなこといつてるんじゃないと睨みつけながら確実にビットを落とすとしていく。

残り約10くらいだろう、でも一夏達と一緒に戦うなら全部落としたい。

「くっ、一撃くらったら死ぬかもしれないんだぞ！ 福音のときは比べ物にならないほど危険なんだ」

「だったら「足手まといはいらない！」っ！」

「お前！ 助けにきたのにそんないいかたはないだろう」

「いいから消えろ！ それ以上ここに近づくな！」

一夏達が学園に戻っていくのを確認すると、真央はソードビットを出しゴッドに攻撃を仕掛け真央本人はビットの破壊に専念する。真紀はどこか嬉しそうだった。

「ふふふ、大切な仲間を簡単に切り捨てるなんて」

「あいつらを死なせたくないからね」

「きつとその優しさに気づいてないわよ？」

「それでいい、気づいてもらおうとも思わない」

そういいながら最後の一基を落とす。

これで万が一あいつらが戻ってきてても大丈夫だ。

真紀の方をみるとソードビットを落とし終わったところだった。

お互い向き合って真央はGNソード、真紀は高出力ビームサーベルを構えた。

そして一気に距離をつめて武器と想いをぶつけ合う。

「私はあなたが傷つくのが嫌なのに！ どうして傷つける奴らを消しちゃいけないの!?!」

「俺もできれば傷つきたくない、でも他の人が傷つくのはもっと嫌なんだ！」

「どうしてあんな奴らを、あんな奴らのために戦うの!?!」

「それは違う。俺は俺のためにやってるんだ、誰かのためとかじゃない。俺が守りたいって勝手に思ったから守ってるんだ！」

「意味わかんない、偽善だよ」

「偽善だっていい、俺は俺の本能の赴くままに動いてるだけだ！」

一度距離をとる、暗闇に包まれてGNドライブの緑色の粒子の光とゴッドのスラスターとビームサーベルの光だけしかない。

ふと、疑問に思った。――こいつが本当に阿修羅が恐れていたISか？――

「夏サイド

「織斑くん、これを運んでください」

「あっはい」

IS学園の校舎の瓦礫の片付けを手伝っていた。  
打ち抜かれたのは最上階の教室一つだけだったから修復に時間はないからいらしい。  
なぜか束さんも協力してくれているから明日には元通りだろう。

「……………」

「夏、まだ真央のことを気にしてるのか？」

「真央は大丈夫なのか？ あのISからなんだか嫌な感じがした」

「あっそれ僕も感じた。すごい殺意となんだか悲しい感じ」

「……………はあ」

箒とシャルの前でため息をつくのって初めて・・・じゃないな。  
とにかく真央が心配だ、あいつはどこか危なっかしいところがあるけど  
ど案外うまくいくから心配しても無駄なんだろうけど心配だ。

「なら行って来い」

「千冬姉、でも・・・」

「今のお前がいても邪魔なだけだ」

「白式の追加装甲つけといたよー！でもあの攻撃に耐えられるのは一回だけ」

「ありがとうございます！」

白式を展開するとごつくなっていて追加ブースターもついていた。  
一夏は勢いよく真央のところに飛んでいく。



「一つ聞いていいか？ その機体の改良版みたいなのってあるの？」

「あるわよ、ここで私がへましてISが敵の手に渡ったり私が捕まったとしても平気なように」

「（それが本命か・・・脅威を与えてそれ以上のものを持つてるといえば何もできない）」

「私には初めから何もなかった・・・あなたとは違って！」

振るわれるビームサーベルをGNソードで受け止めると激しい光と耳障りな高い音が鳴り響く。

徐々に押され始め弾かれ、ゴッドはバスターライフルを撃つ。

真央はなんとかかわし、ライフルモードで反撃するが簡単に回避される。

「私は貴方と瓜二つって知って・・・貴方だけが私の生きる希望だった」

「.....」

「でも、もうなにもない」

「あるだろ」

「貴方に拒絶されて、私は何にすがればいいの？」

バスターライフルをうつてくるが真央はかわし続ける。  
武器を捨て、シールドエネルギーを全てスラスターにまわした。

「武器をとれ！ 私を倒して見せる！」

ゴツドの猛攻を回避し続ける。

ただひたすら黙って回避する真央に真紀は苛立ちを隠せなかった。  
何故攻撃してこないのか、何故黙ったままなのか理解できなかった。

「……希望がなきゃ生きないの？」

「……っ！」

真紀は真央の普段の声では想像できないくらいドスのきいた声に驚き黙る。

全身装甲で表情はわからないが怒ってるのを感じられた。

「……自分のために生きろよ、その過程で希望を見つけるよ。これからだって見つかるかもしれないだろ……なのにお前はもう希望は見つかりませんって諦めてるような言い方して」

「何が悪いの」

「諦めるのが悪い」

真央は>マルタくを発射体勢に移した。  
それを見た真紀は距離を取ってバスターライフルを構えた。  
緊張が走つてるところに通信が入った。

「真央！ 加勢するぞ」

「一夏！？」

「束さんに装甲を追加してもらったから一発は耐えられるらしい」

一夏でもビット無しのゴツドの攻撃は避けられるだろうから1発耐えられるだけでも十分だろう。

「邪魔をするなー！」

「「っ！？」」

放たれたビームをかわして体勢を整えると次弾発射準備をしていた。  
目標は一夏だったが大丈夫だと思った真央は助けにはいかなかった。

「死ね！」

「うおっ！」

予想通り一夏は間一髪で避け、すぐ雪片を構え接近戦をしかけた。真央は一夏を援護するためにビームを撃ちながら接近していった。

「消える！」

ビームサーベルを横に薙ぎ払い、雪片でガードした一夏は吹っ飛んだ。

そこでバスターライフルを一夏に向けて撃ち、直撃した。

「一夏！」

「くそっ！ 大丈夫だ！」

「ふん、これで終わりだ」

一夏に向かってバスターライフルからまたビームが放たれた。

「（一夏に当たる！？）」

真央は一夏と真紀の間に入りGNフィールドを張った。

「真央！？」

「真央どいて！」

「どけるかよ！……っ！」

ドオオオン

GNフィールドをいとも簡単に破られてビームに当たった。

「真央！ 真央大丈夫か！？」

「……ああ、何とか」

煙りが晴れると、頭と腹と左腕の装甲が砕けていて頭から血が出ていて、左の二の腕から15？下は大火傷を負っていた。

「……あっ……ああ！……ああ……」

「どうしたんだ？ あのIS」

「一夏は一旦IS学園に戻って」

「ああ、わかった」

一夏は言われた通りIS学園に戻っていく。

全身装甲から通常のISに戻し、今だに取り乱してる真紀を見なが

らゆっくり近づいていく。

「真紀……全身装甲を」といて

「……………」

真紀は無言で全身装甲をといた。

真紀は唇を噛み締めながら泣いていた。

真央は右手で抱き寄せ、左手で撫でた。

「…………ごめんなさい…………私…真央を…………」

「いいよ、これくらい」

「よくない！ 私は真央を傷つける人は許さないって言うっておきながら…………真央に怪我させた」

「だれにもそういう時がある」

「私なんて…………死んじゃえばんぐう」

真紀にキスをして言葉を遮る。自分にキスしてるようで変な感じはしていたが今の真央には関係ない。

「死んでいいものはない、真紀も人間だから失敗の一つや二つある」

「…………でも、でも！」

「過ぎたこと言っても仕方ないでしょ？ 生きる希望が欲しいなら俺がなる。愛が欲しいなら俺があげる。寂しいならそばにいる」

「…………私…真央の友達…………全面否定したのに？」

「これからどう変わるかが重要なんだよ。真紀はどうしたい？」

「…………うく…………ひつく…………真央と…………ぐす…………一緒にいたい」

「なら一緒にいようか」

真紀はISを解除して、真央に思いっきり抱き着いて泣いた。それを黙って頭を撫でて気が済むまで待った。

「落ち着いた？」

「…………うん」

「じゃあ一度学園に戻っていい？ 真紀に紹介したい人達がいるか」

「わかったよ、お兄ちゃん」

了承を得たところでIS学園に向かって飛ぶ。

『お兄ちゃん』ってのはきつと俺がベースに作られたからだろう。

「……お兄ちゃん、紹介する人って……」

「真紀や俺に危害を加える人じゃないよ。むしろ守ってくれる」

真紀は安心した様な顔をしているのを見ると、不安だったのだろう。そのころ朝日が昇って来ていた。

「朝だね」

「寝損ねちゃったね」

「「ぶっ！ あはははは！」「」

何がおかしいのかわからないけど、何故か笑えた。

こういうのもいいなって思えたのは感謝するべきか否か

少しするとIS学園につき着地しISを解除する。

すると一夏といつもの一夏ハーレムズも駆け寄ってきた。



「真央大丈夫……夫？」

「……えっ!?!?」

隣に立って手を繋いでる真紀に気づき動きが止まる。

みんなビツクリ顔である意味ギャグだった。

その様子を見て、変に思ったのだろう山田先生と織斑先生が歩み寄ってきた。

「どうしたんで………すか」

「………はぁ」

山田先生もビツクリしていて織斑先生だけため息ついていた。

しかも東さんは嬉しそうにウサミミをピコピコさせてるし、携帯がブルブルふるえてるし。

「面倒だから簡潔に紹介するね。この子は真紀っていうんだ」

「……えっと、真紀っていいいます。よろしくです………」

少しの間、沈黙が流れる。

段々鈴の顔が緩んでいくのは気のせいで、東さんは息を荒げてるのも気のせい。

「……はあ!?」「……」

「じゃ鈴花のどこ行くからまたねー」

何かいいたげにしてるみんなを置いて、鈴花達がいる部屋を目指す。

「……あの」

「ん?」

声のするほうを見ると水色の髪をした楯無先輩に似てなくもない子がいた。

「……腕……治療しないでいいの?」

「あとでもらうよ。心配してくれてありがとう」

そういつて寮に入る。

因みに撃ち抜かれた教室は無事に修復された、もちろんデータも。あと両目の色は元通りというか、阿修羅と融合ってというか一つになったから赤になった。

「えーっと……あつここだ」

ドアノブをひねってドアをあけると臨戦体勢の鈴花、真夏、楯無先輩がいた。何故か織斑先生と東さんもいた。

「神崎、すべて話せ」

「……はい」

「説明中しばらくお待ちください」

「というわけです」

「はあ、面倒なことをしてくれたな」

「「すみません」」

真紀と一緒に謝ったら複雑そうな顔をされた。素直に謝られるのって実は苦手なの？

「同じ顔で……シユールだね」

「そうですね……東さん」

「まおっちが二人なら愛でられる時間も二倍？」

変なことを考えてる3人は放っておくとして、真紀はこれからどうなるんだろう。

ゴッドの操縦者でIS学園を強襲した犯人だ、ただではすまない。

「真紀と言ったな。お前は今日から神崎真紀としてIS学園に入学してもらおう」

「えっ？」

「神崎と同じクラスにしてやるから安心しろ。机は用意できんがな」

「は、はい！」

真紀が嬉しそうに返事をする。

そんなに嬉しいのか……てか甘すぎないか？ いいの？ 委員会の人達に知られたら大問題だよ？

「委員会はこの学園に手出しできないようにしたから平気だよ」

「東さんは強引ですねって真紀なにしてるの？」

ディスプレイだしてすごいスピードでキーを打っている真紀に聞いた。

「お兄ちゃんと私の戦闘を少し変えて、アメリカとフランスとドイツ、イタリア共同開発のISが暴走して東博士が直々に止めて、その発展機が亡国企業が持つてるって」

「なんでそんなこと」

「それが私になる条件だから」

「そっついディスプレイを消し体を預けてくる。  
暖かいなこいつ」

「真央！ お兄ちゃんってなに!？」

「まおっちはそっという趣味だったの?」

「お姉さん少し引いたわ」

「さっき説明したよね!？ ちゃんとしたよ!」

「今日は遅れるなよ神崎兄。神崎妹が寂しい思いするからな」

「そんな言い方ずるい気がします。  
まあいいか」

#### 第44話「お兄っ子」

「えー、昨日は色々と怖い思いをしたと思いますが気持ち切り替えて行きましょう。それでは転校生を紹介します、入ってきてください」

朝、山田先生が元気よくマシンガントークを披露している。

「すみません、遅れました」

「」「……………」

「えっ？ なに？」

「」「空気読めー！」「」

「えええええ！？」

クラス全員が転校生が入ってくるものだとばかり思っていたので、タイミング悪く入ってきた真央に怒鳴り付ける。

真央はいじけながら一夏のとなりの自分の席について左隣りの鈴花に慰められていた。

「コホン…では気を取り直して入ってきてください」

パシユ

トコトコ

「……えっ!?!」

みんなが真央にそっくりな真紀を見て目をまるくする。

二度目の一夏達もまるくしているのを見て真央はニヤニヤしていた。

「…か、神崎真紀です。趣味は運動で、甘いものが好きです。苦いものは苦手です」

少し緊張してるのか上目遣いで少し顔が赤い。

しかも控え目な感じで女の子っぽい、真央とは大違いだ。

「当たり前だろ。俺は男だ」

「……嘘だ!」 (鈴花以外クラス全員)

「あっ、それと」

何か思い出したかのように少し表情が柔らかくなる。

そして満面の笑みで一言

「お兄ちゃんを傷つける奴は私が制裁しますので、よろしくお願  
い  
します」

真紀が爆弾を投下した瞬間、視線が俺に集まった。

「まさかこの子神崎さんの妹？」

「双子！？ どっちかと結婚すればどっちかが妹に！？」

「いい！ すごいいい！」

聞こえない聞こえない。

何も聞こえてないですよー、織斑先生はやくきてー！

「静かにしろ！ 馬鹿者」



天使きたー！ー！

「神崎妹、お前の席は用意するのに時間が掛かるから……」

織斑先生が何かを考えながらこっちを見てくる。  
なんだろう？ 顔になにかついてるのかな？

「……そうだな、神崎兄の膝の上でいいか」

「へ？」

「ありがとうございます！」

「え？」

真紀がトコトコとやって来て当たり前のように膝の上に座る。案外……というよりだいぶ軽い  
鈴花からの視線が痛かったけど気にしない。けど休み時間に機嫌はとるよ？ 嫌われたくないし。

「ていうか、あの織斑先生？」

「ではホームルームを始める」

無視ですか、俺はこの「その子抱かせて」っていう視線を耐えなければいけないのですね。

「お兄ちゃん大丈夫？ 重くない？」

「大丈夫だよ、すごぶる軽くていつまでも乗っけられる」

「ならよかった」

そう言って嬉しそうに抱き着いてくる。

織斑先生は気にせず、後ろからは何とも言えない視線が、左隣りからは羨ましそうな微笑ましそうな視線がくる。

ホームルームが終わり織斑先生が出ていくと一夏や箒達がよってきた。

「真央双子なのか？」

「いや、この子は俺の遺伝子配列を元に作られたんだ」

「……………えっ!？」

一夏達が真紀を見ると真紀は笑顔で肯定した。  
すると皆さんが暗い顔をした。

「いいんだよ、私は作られた結果、お兄ちゃんと一緒にいれるんだ

もん！幸せだよ」

「真央にそっくりなだけあってポジティブね。椅子持ってきたわよ」

「ありがとう、鈴」

鈴が持ってきた椅子を自分の椅子を少しずらして隣にくっつける形で置いた。

なぜか見慣れたクッションが置いてあった。

「……鈴？ このクッションって」

「真央がよく屋上で枕に使ってたクッションよ」

だよね……どこから持ってきたんだろ。ポンコツに量子変換してもらって出してただけだな。  
ポンコツは足元で寝てるし。

「お兄ちゃんのクッションもらい！」

ポフッ

「いいかんじだね……おけつにやさしいよ？」

「でしょ？」

机に突っ伏した真紀を撫でようとしたら先に誰かに撫でられた。

「鈴花か……びっくりした」

「ふふふ、可愛いね。真央みたいで」

「うにゃあ……」

気持ち良さそうに目を細めて奇っ怪な声をだす真紀を見て、何だか不安になってきた。

「……俺ってこんなだったの？」

「」「」「うん」「」（クラス一同）

「……女の子っていわれても仕方ないよね、これじゃあ」

「真央は真央のいいところがあるからそのままです」

「鈴花がそういうなら！」

嬉しいねえ、鈴花は天使だよ。

入口付近で写真撮ってる真夏はどうしたんだろう？ 目がいつてる  
んだけど大丈夫かな？

「しっかしすごいわね。髪の毛の長さや目の色以外全部一緒」

「クローンみたいだな」

「あっ、そうだ！ お兄ちゃん。東からこれ届いてるよ」

そういいながら猫耳を渡して来る。

真紀には悪気はないのはわかってる……すべてはあのウサミミがいけないのもわかってる。

「……えーっとこれをどうしろと？」

「つけて これつけるとお兄ちゃんが人を殺せる距離がわかるんだって」

「知りたくないけど知っておくか」

俺が猫耳をつけると真紀はパソコンを起動してIS学園のマップを出していた。

「ねえ真紀、なんで真っ赤なのよ？」

鈴も気になっていたのかっていうより皆気になってたよね……真っ赤なの。

俺もビックリでしたよ？ まさかこれが人を殺せる距離なんて言わないよね。

「……………皆お兄ちゃんを怒らせないほうがいいよ……………IS学園をオ  
ーバーしてる」

「……………」

おおっ、ビックリ顔に唾然顔、引き顔に納得顔を一気に見れる日が  
来ようとは！

「今はこんなだから小さく収まってるけど、怒ったら……………」

「真央、怒っちゃダメだよ？」

「そこでそれを言う鈴花って大物ね」

「わかったよ」

「え！？ わかっちゃうの！？？」

今日の鈴のツッコミは冴えてるな。

これは弄ったら楽しいかもしれないけど、たまにはシャルやラウラ  
を弄りたいんだよね。

「でもそんな気分じゃないんだよなあ……………」

「どうしたの？」

鈴花は優しいなあ、涙が出てきそうだよ。

「…………お兄ちゃん」

「ん？ なづぐ！」

唇を唇でふさがれ、ご丁寧に舌までいれて来てくれています。  
まあ自分が自分にキスしてるみたいで何だか変な気持ちになった。

「…………お兄ちゃんは私のものなんだからね？」

そう顔を赤くしながら言ってきた真紀にドキッとしたのは内緒

## 予告

「お兄ちゃん大好き！」

デレ真紀

「あなたは私のものよ？わかってるの？」

ヤミ真紀

「真央はわたさないもん！」

真央の騎士（自称）鈴花

「神崎真央は共有財産である！」

意味不明な真夏

「じゃあこうしましょ？真央ちゃんの部屋争奪戦IS総合トーナメントで優勝したものが同室になって他の人より少し有利になる」



ややこしくする学園最強

「」「上等!」「」

IS学園、生徒&教師を巻き込むドタバタトーナメント開催……敗者復活戦あり

どじおおおん!

「邪魔を……」

「するなよ……」

「」の……」

「」「無人けーわいえす!」「」

このとき……生徒は教師を超える。  
鬼神ちふーゆ降臨

「死ぬ覚悟は?」

「「「できてません!」「」」

「打鉄で専用機を圧倒するなんて……真紀のISは制限かけたとはいえ最強ランクだと思っただけだなア」

真央苦笑い

トーナメントの行方はどうなるのか？

「「「私が!」「」」

「真夏が!」

「「「絶対勝つ!」「」」」

新章「神崎真央を手に入れろ!」お楽しみに

予告（後書き）

真央「これやった意味ね」

鈴花「どうやら時間稼ぎみたいだよ？　思うようにいってないみたいだね」

真紀「仕方ないよ、だいぶ原作から離れたもん」

真央「まっ、予告みたいな感じになるみたいだからいつか。でさ無人けーわいえすってなに？」

楯無「無人で空気読めないIS……略して無人けーわいえす」

真央「くだらねえ……」

## 第45話「戦争よ！」

こんにちはー

「お兄ちゃん！ どういうこと!?!」

「まてまて、今画面の向こうの友達に挨拶するところなんだけど」

「今まで私以外の女と寝てたなんて!」

「スルーですか、まあ落ち着け」

そのままベッドに押し倒され、真紀に馬乗りされる。  
いろいろ見えてるけど言わないでおこう……

「真央？ あなたは私のもの……わかってる?」

ナイフを首に当てられてそう言われるとヤンデレだとすぐく思っつ。  
ヤミ真紀だ。

「私の物にならないなら……」

俺の周りにビットがたくさん展開される。これは恐ろしい、IS展

開いて戦ってた時とは比べものにならないくらい怖いわ。

「よしよし、変なことしてないから平気だよ？ 心配してくれてありがとう」

「え、えへへへおにーいちゃん！」

いろいろ違うけど、結果的に真紀がデレ真紀になったのでまあいいとする。

デレ真紀はくつついて離れないのが特徴なのだ。

おまけに同じ顔なので鈴花や真夏、楯無先輩から奇っ怪な視線を送られないという特典付き。

とくにいいことはない。だけど無用な争いはさけられる。  
ガガ……

「？」

『あー、1年1組 神崎真央くん。至急生徒会室に来なさい、さもなくば貴方の入浴写真をバラまきます』

ダッ！

生徒会室に向かって猛ダッシュ、素晴らしいスタートをきれたと思う。

ちなみに鈴花の本気モードと同じくらいのスピード（100メートル8秒くらい）で走れる。

「行かせないわよ！ 真央ちゃんの哀れもない姿のために！」

「神崎さんの入浴みたい！」

「ここはおさんぞ〜！」

女子数名が目の前に立ち塞がれる……しかし突然鼻血を噴き出して倒れ、ある人は発狂していた。後ろを振り向くと、真紀が照れながら制服を着崩していた。

「ありがとう！ 用が終わったら助けにいくよ！」

そういつとまた走り出す。

階段のどこに行くかと武装集団が縄と鞭と蠟燭を鞆にしまって木刀を構えた。

「（……捕まったら終わる）」

全身から冷や汗が出る。

誰か助けしてくれないかと思うが誰も来そうな気配がしない。今世紀最大のピンチなんじゃないか

「だがしかし！ ここで引くわけにはいかない！」

「行かせない！」

「命にかえても！」

木刀が振り上げられると同時に相手の懐に入るが、何か焦げたような臭いがしたので抜き様に見てみると木刀が根本から焼き切られていた。

「真央！ はやくいきな」

「鈴花、ありがとう」

そういつて階段を下りていく。

俺は何も見えていない…鈴花の右手に握りしめられていたビームサーベルなんて知らない。

「ていやあああ！」

「な！」

上からメリケンサックを構えて飛び降りてくる人をダストシールドにけりこむ。

すると後ろから竹刀をもった、いかにもやばそうな人が来た。

「……覚悟」

「真夏ビーム！」

「……む」

……素晴らしい、真夏が容赦無く撃ち放ったビームを竹刀で防ぎきった。

どうやったら竹刀でそこまで出来るのか教えてほしい……。

「真夏……死ぬなよ」

「地獄で会おうぜ！」

これで3大守護神が消えた。

真紀、鈴花、真夏……どれもこれも相当な実力者だからそう簡単にやられはしない……と思う。

「いくぞ！ 我が友のために！」

生徒会室に思いっきり入るとクラッカーがなった。

「おめでとー」



「えっ？ ……へ？」

「真央のためのパーティーをやるんだってさ」

妙に聞き慣れた声の方を見ると、クラスメイトの織斑一夏ことシスコンがいた。

「…まあ何もいうまい。真央はこのパーティーに関して何か聞いているか？」

「いや、何も」

楯無先輩の方を向くと放送を繋げて大きく息を吸っていた。嫌な予感しかしない。

『えー、全校生徒の皆さん。生徒会長の楯無です。最近神崎真央の所有権は誰のものかと言う投書が多数送られて来ていたので -  
- - 』

「おかしいだろ！！ 所有権？ 人にそんなものあるかあ！」

「落ち着け真央！」

これが落ち着いていられるか！ 俺は誰のものになっちゃうの？ ヤミ真紀が出てくるよ？

『そこで神崎真央の相部屋争奪IS総合トーナメントを開催します！ 所有権とかはどうにもならないので真央ちゃんを奪い取っちゃってください。誰でも参加OK、訓練機か専用機でのバトルです。真央ちゃんに対する愛が最も強い人が優勝することができるのです！』

下の階からすごい歓声が聞こえる。  
やめてほしいんだけど……。

『キャノンボールファストの肩慣らしに如何でしょうか？ 参加希望紙は生徒会室の前と職員室の前に置いてあります。真央ちゃんに回収される前に参加したい人は取っておいてね』

ふう、と息を吐く楯無先輩を睨みつつ、じゃれてくるのほほんさんの頭を撫でながら生徒会室から脱出できるように足に力を入れておく。

「まあ真央ちゃん、怒らないでね……生徒会室の前にはもう人だけりが出来るから」

「もうだめだ！」

## 第46話「開催」

ここはアリーナゼロ、この大会のために私……じゃなくて俺と真紀がフル稼動して作り上げたアリーナ……表向きにはこうなってるが、作ったのは束さんと俺と真紀と織斑先生だ。

あのときは辛かった……私……じゃなくて俺と真紀は常にコキ使われてフルマラソンにでた方が楽だった。

ちなみにさっきから言い直してるところがあるのは昨日……

『真央さん！？ 女の子なのにそんな汚い言葉遣いではいけませんわ！』

『えー、別によくない？ ねえ一夏』

『なんで俺にふるんだよ……まあ真央〓俺つてのが最初に定着したし、いいんじゃないか？』

『ほれみる！』

『いけませんわ！』

『まあわかったからオチケツ、俺は部屋でゴロゴロするから』

『何もわかってませんわ！ こうなったら実力行使ですわ！』

てな感じでお説教＋言葉遣い講座が始まって大変だった。  
今、楯無先輩（笑）が壇上に上がって挨拶してる所なのだがとても暇だ。

「でその頭にタヌキ乗っけてる子、（笑）を外しなさい」

ばれちった

「まあいいわ、これよりIS総大をはじめます！」

はい、素晴らしい歓声……俺は気が重い。

俺が優勝しなければ誰かに所有権が渡ってしまう……間違っても楯無先輩には渡したくない。

「それじゃあ最初は5人組になってトーナメント形式ね」

といいながら鈴花、真夏、真紀、一夏が集まる。

「あれ？ 一夏？」

「ん？ ああ俺も強くなりたいからな、参加させてもらった」

何とも一夏らしい理由なんだ。

この子は優等生ですか？ほら見てよ、いつもの5人がこっちを睨んでるよ？

「「「「「（叩き潰す）「「「「「

「こわいこわい……」

「最初はどこと？」

「3年と2年の専用機持ちがいるとこね」

「ふーん、真紀いける？」

「やれるよ」

「任せた」

鈴花達はいろいろ知ってるから何も言わない、一夏も真紀の実力とISの性能を直で味わってるので苦笑い。

言うまでもないが俺達のチームが危険度MAXで優勝候補筆頭だ。

『それでは1回戦はじめます』



そういうと真央とやり合ったとき並の数のビットを正確に操って攻撃していく。

「うわ、1発で半分以上削られてる!？」

「化け物かよ！」

もう既に訓練機の3人は落ちて、残り専用機持ちしかない。  
2対500+ みたいな構図

真紀はバスターライフルを2丁構えてビットの攻撃を何とかかわしてる先輩に向けて放つ。

「これはチートだろおおお！」

先輩の断末魔が真紀へのいちゃもんか……確かに真紀には勝てない。

「えー。真紀ちゃんに1人だけ勝てる人がいるのでチート扱いにはしません」

会長ありがとうございます。

あとその1人って誰ですか？ 是非とも教えていただきたい。

「真央でしょ」

「まおっちだね」

「真央だな」

口を揃えて言わないで貰いたい。勝てないからね、抑えられたとしても勝てないから、真紀が俺のこと嫌いだったら真っ先に消されるから。

そうしてる間に試合は終わり、真紀が帰ってきた。

「ねえ、真央。この学園の専用機持ちってこの程度なの？」

専用機持つてるみなさんがカチンとくる言葉を軽々と口にする真紀に尊敬の眼差しを送った。

ちなみに今の真紀はノーマルモードです。

「真紀は強いね、学園トップ狙えるよ？」

「狙えるだけ、真央には勝てないから」

「いやいや、勝てるでしょ。普通に簡単に一瞬で」



そういつとむつと顔をしかめたが、理由がわからず首を傾げる。  
するとため息を吐かれた。

「……？」

「私があなたに攻撃できるわけないでしょ？」

「なんで？」

「愛してるから」

なるほどね、鈴花達が顔を真っ赤にして言う言葉を、普通に真顔であたかも当然のように言っただよ。  
すごいすごい

「まあ……ありがと」

「う、うん」

時間差で顔をピンク色に染めた。  
案外可愛いと思ってしまっ自分がいた。そんなやりとりを見ていた  
2人+ は暖かい眼差しを向けていた。

「（真央が真央に愛してるって言うてるみたい……私に言ってくれれば部屋に連れ込んで私のものにするのに……）」

「（まおっちとまきっち可愛いなあ、どっちもほしいや……調教して真夏なしでは生きられないようにするしかないか……）」

「（一卵性の双子みたいだな、仲がいいのは良いことだ。尊も見習うべきだな）」

本当に暖かい眼差しなのか判断はみなさんにお任せしよう。

## 第47話「ふざけてみた」

### 《二日目》

『昼休みが終わり次第、準準決勝をはじめます』

アナウンスがなり、皆思い思いに散っていった。  
ちなみに昨日の午後から一対一でのバトルになり、鈴花と真夏は同士討ちでドローになった。

そのおかげで俺は皆より対戦してないんだけどね。

「あー、次の対戦は更識簪？さんとか」

「勝つてよね、それで決勝で私にわざと負けて」

「なぜに？俺は自分の所有権を自分の物にするために勝たなきゃいけないんだけど」

「私をいじめるの？」

「いじめないよ、少しは真面目にやらないと怒られちゃうから」

真紀はこんな感じで、元気が有り余ってるからいいんだけど、お隣の二人がよろしくない。

ドローになつてからずっと落ち込んでるのだ、もう少し隠せないのかと思うくらいだけどそんなことをいつたら生きて朝日を拝めないかもしれない。

「・・・真央と真紀ちゃん独り占めできるチャンスだったのに」

「・・・夢の関係が築けるチャンスだったのに」

「・・・そろそろ、あの二人どうにかしない？」

「ほっとくのが一番だと思うんだけどなあ」

どうしたらいいのかね、一夏はあの五人に捕まってるから聞けないし。

ていうか最近、あの五人に変な目で見られるんだけど何かしたっけ？

「・・・」

「・・・ばか」

「へ？」

「「なんで・・・なんで慰めてくれないの!?!」」

「ええええええええ!」

なんかすごく理不尽なこと言われたよ？いいの？こんなんで、確かにほっといたのは悪かったけど自力で立ち直る強さを持つてるの知ってるからいいかなって・・・てか自力で立ち直れ。

「そんなに冷たいなんて知らなかった！一夜をともした仲なのに！」

「確かにしたけど、その表現は誤解を生むから控えて！」

「裸見せ合った仲なのに！」

「小さいころ、一緒に風呂入っただけです！真紀さん、ビットしまってください！やましいことはしてません！」

俺の周りをビットで埋め尽くされると、さすがに怖すぎる。

IS展開しても無事ではすまなさそうな感じだし、ポンコツは今寝てるし。

いつものように押し倒されて、馬乗りされる。

「ねえ、真央・・・あなた・・・私というものがありません」

「すみませんでした！そして全員写メとるのやめろ！」

「丁度いい、ここで見せ付けておく必要がある」

「何するつもりですか、真紀さん！？だから写メとるのやめろ！」

くそ、鈴花も真夏も顔赤くしてジーンと見てるだけだし、周りも助けしてくれる人はいないみたいだ。  
きつと明日は、部屋から出たら変な眼差しを向けられるに違いない。そんなことを考えて約五分、気づいたら真紀のお仕置き&見せつけが終わっていた。

「次、浮気したら・・・(ポツ)」

「なに！？なんで顔赤くするの？何するつもりなの、これ貞操の危機なんじゃないの？」

「「「女の子に言わせないの！！」「」」

俺はここで怒られる理由がわからなかった。

『これより準準決勝をはじめます』

アナウンスがなると皆観客席に向かっていった。  
次は俺と簪さんと隣のアリーナで楯無先輩と一夏だったな。  
がんばれ一夏、きつと勝てるぞ。将来

「……………あつ、君はあの時の」

「……………久しぶり」

「簪さんだっけ？君も参加してたんだね」

「……………うん。……………あと……………さんいらない」

「ああ、わかったよ。それじゃあ早速やろうつか」

「……………うん。……………負けない」

GNソードと近接ブレードがぶつかり合って火花が散る。

そのころ

「……………楯無さん、強すぎる」

「これも愛の力」

開始五分でボコボコにされ、試合を終わらせていた。  
学園最強は伊達じゃなかった。

「強いね、簪」

「……あなたほどじゃない」

「俺は異常だから」

そついいながらソードビットを飛ばして地道にエネルギーを削っていく。

汚いかも知れないけど、これから先は強敵揃いだから余力を残しておきたい。

鈴、ラウラ、箒、シャル、セシリアのチームに当たったときは嬉しかったね、面倒な相手を一気に消せるんだから。

「そろそろだと思っただけどなあ」

「……まだいける」

そついいながら接近してくる簪を地面に叩き落とす。

接近では負ける気がしない。というより負けられない。

「さてさて、終わらせますかな」

「……」



起き上がるつとする簪を踏みつけてから、急上昇してビームを乱射する。  
なぜか、砂煙がまっけてもどこにいるのかわかるから狙い撃ちなんて楽勝だ。  
しばらくするとブザーがなった。

『勝者、神崎真央。続けて神崎真央対更識楯無の試合をします』

「まじか、余力残しといてよかった」

「安心するのはまだはやいわよ？なんせ簪ちゃんを踏み台にした罪は重いわよ……」

今日の楯無先輩は危険だ。本気でいこう。  
目に光がやどってない時の対処なんて簡単ではない、むしろ命掛けで行かなきゃ行けないことナンバー1だからね。

「あのう……」

「許してあげないわよ？」

モウダメダ、これはやられた方がすんなりと解決すると一夏に教わったけど、事情が事情なわけで負けれないのですよ。  
あとで簪に謝っておかなきゃいけないね。

「おとなしくやられなさい！」

「すみません！自分の所有権がかかっているので負けるわけには行かないんです！」

ガトリングをくるくると避けながらビームで反撃する。

楯無先輩も軽くかわしてるけど、別に当たらなくてもいいんだよね。

「逃げてばかりで・・・男らしくないわよ！」

「男として俺を見たことがありますか!？」

「ないわ！」

「ならいいじゃないですか!というかないのかよ、少しは男として見てくれてもいいじゃないですか!」

「嫁にもらっていいってこと?」

「せめて婿として!」

「そ、そんなあ・・・」

顔を赤くしてモジモジし始めた楯無先輩をみて勝ちを確信した。  
一気に距離をつめてGNソードにビームを纏わせて乱舞する。



これで決勝はおれと真紀に決まったわけなのですが・・・さっき裏で賭けをしていたのを見つけて、覗いて見たら真紀が賭つに賭ける人が多かったのが少しショックだった。もう少し、応援してくれてもいいじゃんか・・・まっ負ける気ないけどね。

・・・死なない程度でがんばろう。

「さあ、真央。お仕置き時間だよ」

「・・・・・・・・お手柔らかにお願いします。真紀先生」

「・・・・・・・・無理」

・・・・・・・・鬼だ。いきなりビットを軽く50基展開してきた。クアンタルビオンの機動性を利用して、何とかかわし続ける。ちなみに俺も真紀も本気じゃない、本気でしたら何て言われるかわかったもんじゃない。最近の教師は頭が固すぎる。もう少し柔軟な思考を持ったほうがいい、教師に限らず皆。

「・・・・・・・・これはさすがにきつい」

「ふふふ、いつまでそうしてられるかな？」

「鬼ですね!？」

怖すぎる、四方八方から飛んでくるビームをかわし続けるのは結構  
疲れる。というかスリルありすぎ、アトラクションにするにはハ  
ドすぎるから、少しレベル下げないといけないな。  
アトラクションにする気ないけど、誰がやるんだよ、こんな罰ゲ  
ムみたいなの。

「ええい！消えろ」

「！！？」

GNソードVを両手に展開して、ビットを落としていく。  
これだけの量のビットってどこから来るんだろう・・・まさか自己  
生成？

「勘がいいね。そのとおりだよ」

「マジですか・・・」

勝てる気がしなくなってきた。もう降参しようかな・・・次から次  
へと出てくるビットを相手してたらキリがないよ。  
まだ生きていたいし。

「もう降参する？」

「うーん、真紀の愛がほしいなあ」 質問に答えない人

「えっ私の・・・？／＼」

「出来ればミルクティーを口移しで」 さりげなく物をねだる人

「うう・・・こんなところでいうのは卑怯だよ／＼」

「江ノ島いきたい」 人の話を聞かない人

真紀が顔を赤くしながらモジモジし始めたら、シャッター音が凄まじい勢いで鳴り出した。

その隙にビットを出来るだけ落としていく、真紀はああいう状態になってもセシリアよりうまくビットを扱えるから厄介なのだ。

セシリアに目を向けると顔を引きつらせていた。

「・・・どうしよう。ここは一線を超えるべきか」

「（何てことを考えてるんだろうか・・・別に一線超えなくてもいいんじゃないかな？まあ個人的な意見だから無視してくれて構わないけどさ。・・・これで69基めつと」

順調にビットを落としていくが、真紀の思考が正常に戻りつつあるのを感じて、巢越す焦る。

本格的に戦闘が始まったら不利になるのは俺のほうだ。

なんとかビットだけでも全滅させておきたいのだが、なかなか落とされてくれない。

「いつも下手糞とやってればこつもなるか」

『真央さん？何か言いましたか？私、聞き取れませんでしたわ』

「すみませんでした。調子のつてました、ごめんじゅ」

『謝られてる気がしないのですが』

謝まる気ないからね、そう聞こえて当然だね。

「真央！貴方に勝って全てを手に入れる！」

「なんでそんな物騒な考えに行き着いた！？もう少し温厚に行こうよー」

「黙りなさい！静かにしなさい！やられなさい！」

「むちゃくちゃだー！」

「私のものになりなさい！」

「本音きたよー！」

『よんだ〜？』

「呼んでない！こんな状況でのほんさんを呼ぶなんて自殺行為なんてしないー！」

『しっしっねっいっ!』

すみませんでした。

「「「「・・・真央」「」」」

「は、はい」

鈴花、真夏、真紀、楯無さんの声がやたらと迫力があり、少し・・・いや、ここは正直に言う。

かなり気圧されて、今すぐにも逃げ出したいくらいです。

「・・・死ぬ覚悟・・・DEKITA?」

「・・・あは、あははははは!」

みんな・・・生きていたら、また明日会おう。



## 第48話「だんだんリターンズ」

先週の大会は真紀やら色んな人の暴走でなくなった。

ていうか全員俺が落とすした。

最後の真紀との一騎打ちは『なんで気づいてくれないの？』って少し落ち込み気味で言ったら動きが止まった。

その隙に必殺を叩き込んであげた。

「いや、真央はまだいいだろ。俺なんか瞬殺されたんだぞ？」

「よくそこまで勝ち残れたよね」

「ていうか、なんで一夏や真央は俺の部屋でくつろいでるんだ？授業はどうした？」

そう、今日は平日でしかも朝9時……

「ふふふ、今日は無理矢理休みにしたのだよ」

「というか弾こそ学校はいいのか？」

そついうと弾は一夏の肩に腕を回した。

「（バカ！お前達（主に真央）が来たのにいけるかよ！）」

「（流石だな親友！）」

ガツシリと握手を交わす二人を『何してんの？』みたいな視線を送ってる蘭に抱かれながら怠ける。

「平和だねえ……………」

「そうだな」

一夏も遠い目をして外を眺める。  
いろいろあったもんねえ……………展開がめちゃくちゃだったし、何がしたかったんだろうね。

「そついえば、よく真紀や鈴花達がついて来なかったな」

「……………寝てる間に抜け出してきたから」

「……………ああ」

折檻は免れない。

そのあと真紀に性的お仕置きされて、便乗した鈴花と真夏に襲われて、会長さんに弱み握られて……………ああ……帰りたくない。

「諦める」

「そういえばいつまでここにいれるんだ？」

「明日キャノンボールファストだから夕方までかな？」

「多分な。閉めだしくらうのは嫌だからな」

「そうか」

どこか寂しそうにつぶやく弾を見て罪悪感を感じた。

……………ん？待てよ？

「ねえ一夏。明日一夏の誕生日だよね？」

「ああ、そうだぞ？」

「弾も来るんだよね？」

「ああ、もちろん」

「明日も会えるんじゃないか！ラッキーだね」

「ラッキー？」

「ラッキーでしょ？」

「ら、ラッキーだな……ああ、ラッキーだ」

弾がラッキーをずっと繰り返し返してるんだけど、どうしたの？ 蘭も蘭で一夏のこと見つめたままだし。困った兄妹だ。

「ふあゝ」

「なんだ？真央寝てないのか？」

「鈴花とポンコツの話に付き合わされてね……鈴花がここにいない  
本当の理由その1だね」

「寝てるのか」

ああ、やべ……ほんとに眠い……

どうも一夏です

最近空気になりかけていて少し心配だったので、今日は俺視点

で話をする機会が出来てテンション上がってます。そういえば篤達が出番少なすぎって言ってたな、何とかしてもらおうか。

「……………」

「って真央ほんとに寝たのか!？」

「静かに」

「すみません。だから睨まないください。ていうか真央の睡眠を邪魔したらどうなるかは、目の前で実演してくれたことがあるのでわかってます。」

「ねえ、お兄。このままこの子飼っちゃだめかな？」

「無理だな。俺は笑顔で自由に動き回ってる真央が見ていたい」

「そっか。そっだよな」

「というかそんなことしたら、黙ってない人が3人ほどいるんだけど」

「確実に動くのは3人だろう。鈴は動くかどうかわからない。というか真央って女なんだよな？」

ぷにぷに

「ほっぺ柔らかい……」

「うにうに」

微笑ましい光景だ。

真央がほっぺを突かれて意味のわからない言葉を発している。見てて癒される。目の保養というものなのだろうか？

グーーーー

「……お腹へったみたい」

「みたいてなんだよ。自分のことだろ？」

「照れ隠し？」

「……何故疑問形？」

真央は『えへへ』と笑いながら、ごまかしながら蘭に昼ご飯をねだる。

「確かにお昼時ですね。下に降りて食べましょうか」

「やつほーいーいーいーいー」

ここでふと気がついたことがあった。

真央が弾の部屋に置いていった携帯が光っていたのを………おそろしく鈴花や真夏とかだろうけど、すぐくプレッシャーを感じる。帰ったら大変そうだな。

「なあー夏」

「なんだ？弾」

「真央の携帯から妙なプレッシャーを感じるだけど」

「おれもだ」

真央に一応言っておくか。

蘭ちゃんと一緒に下に降りて席につくと、おじさんがご飯を持ってきてくれた。

ありがたやありがたや。

「……いえ。私達にとって真央さんが来てくれると色々嬉しいですから」

「そうかい？そういつてもらえると嬉しいね！」

周りを見ると人がいっぱいだった。そういえば前に来たときの翌日にテレビ放送されてたよね。  
もう有名店になってしまったのか……五反田食堂よ。

「かなり真央さんのおかげですけどね」

「ふーん。ん？テレビ局の人が来てるみたいだよ？」

ご飯を食べながら、外でカメラに向かって話し掛ける痛いお兄さんに視線を向けた。

テレビでは思わないけど、撮っているとみると非常に痛いよねこれ。

「失礼ですから！それすごく失礼ですから！」

「いやはやお嬢さん、お口にあつたかい？」

「話反らされた!？」



しかし、カメラ目線でカメラに向かって喋ってる人ってかなり面白よね。  
きつと笑ったままだ。

「……そういえば蘭ちゃん、一夏へのアプローチは？」

接客しながら小声でそんなことを聞くと、顔を真っ赤にして俯いた。厨房の一夏をみるかぎり余裕はなさそうな感じはするけど、手が4本に見えるくらい早く動かしてるよ？

「……まああとで」

「蘭ちゃん乙女だねえ。どっかの誰かさん達とは大違いだ」

「??？」

真央さんの後ろに、真央さんに似てる子と髪が長くて綺麗な黒の子とピンク色の髪をした子が見える……疲れてるのかな？  
でも真央さんのおかげで、いつもより人が多いから休めないし。

「……ん？」

「どっしたんですか？真央さん」

「一夏のやつ、神崎特製オムライス作ってる」

「神崎特製？」

真央はどこか懐かしそうな顔をしていた。

お兄がこんな顔したら親父臭いっていつて蹴ってるけど、真央さんは可愛いなあ……ほしいよう……。

「真央、蘭。オムライス出来たから食べてくれ」

「ほーい」

「あ、はい」

皿を受け取り、席につくと顔の温度が急上昇した。

「（どうしようどうしよう！一夏さんの手作りオムライス勿体ないよう……ずっと飾っておきたいくらい……）」

「うまうま！いい感じで甘くてうま！」

「えっ？甘いんですか？」

「そうだよ？神崎特製オムライスは甘くてカロリーオフで美肌効果抜群なのだ！」

胸を張って自慢する真央を見ていると撫でたくなかった。  
店の中の人も外の人もそう思ったらしく、全員握りこぶしを作ってブルブル震えていた。

私はオムライスに視線を戻し、恐る恐る口に入れてみた。

「あつ、美味しい……」

「でしょ？わかってくれる人少なくて困ってたんだよね」

真央の笑顔が一層輝き、カメラが真央を映し続けてるくらい可愛い。  
omotikaeriしていいかな？でも嫌われたくないし、ああ  
愛でたい！！

「おい。真央、携帯がプレッシャーを放ってるぞ」

一夏の言葉を聞いた瞬間、真央の顔がブルーハワイ並に真っ青になった。

なんでそこまで脅えているのかは、学園生活を知らない私には知る余地がなかった。

「あわわわわ！……どうしようどうしよう！今日こそ初めてとられちゃうよー！」

「そうなるのわかっててどうして出てきたんだよ」

「一日中寝てるんじゃないかって思うくらい、ぐっすり寝てたんだもん！」

両手をパタパタしながら、取り乱す真央は親鳥と逸れた小鳥みたいな感じだった。

しばらくすると真央の動きが止まった。

店のなかには冷たい空気が漂っていた、一夏さんもお兄も冷や汗かいて臨戦態勢だした。ただ事じゃない。

次の瞬間、真央さんの姿が消えた。

「「「逃がさない！！！」」」

「ぐえっ！」

消えたと思ったら、後ろで取り押さえられていた。しかも美少女三人に。

「真央！一人で浮気とはなかなかね」

「まおつちのお嫁さんは真夏だよ？」

「真央？私以外見れなくしなきゃいけないみたいね。今日は最後までね」

「ちがっ！ヘルプ！ヘルプー夏ー！」

「えっ」

「」「」「（ギロツ）」「」

「いってらっしゃい」

「じらぎりもの……！」

そっぴい残し、姿が消えた。

IS学園って超人のたまり場なのかな？

第49話「これだから人は」

「浮気……」

「してないよ……鈴花」

「すすっちだけにいうの!？」

「むう、そういわれると」

「真央……私以外の女を見ないで」

ヤミ真紀&鈴花&真夏の相手をしながら、弾の家に引き返していく。正直、連れ戻されかけるとは思わなかったけど話したら理解してくれたからよかった。  
無駄な争いはさけるべきだよね!

「そついえばさあ……きゃっ!」

「鈴花!？」

鈴花の方を向くと、懐かしい人とハンカチで口と鼻を抑えられて何かをかがさせられてる鈴花がいた。

「……エルメ」

「あら、覚えていてくれたの？嬉しいわね」

敵意むき出しの笑顔をむけてくるエルメに、殺気むき出しの笑顔を返す。

真夏は臨戦態勢になっていて怒りむき出し、真紀は真央の大事な人その1を担いでるエルメの逃げ道を一つずつ潰している。もちろんバレないように……。

「鈴花を返してもらおうか」

「いいわよ？でも一つだけ言うこと聞いてくれるなら」

「……内容による」

「ふふふ、そういふと思ったわ。この子の身柄は明日引き渡す。そのときに何してほしいか言っわ」

「いますぐ返せ」

「無理、じゃね」

エルメはISを展開して飛翔する。それとほぼ同時で真紀がISを展開し、追撃し始めるがもう一機ISが来た。

「援軍？……！……あれは……」

「真紀！援護するよ」

「真央こいつは私が！鈴花を頼んだよ」

「了解」

ゴツドの面影のあるISを真紀に任せて、エルメを追う。  
スピードではクアンタが一番速いので徐々に距離が縮んでいくが、  
太陽を背にしてこちらに突っ込んできたISに遮られる。

「……邪魔すんなよ」

「邪魔なのはお前だ。神崎真央」

「……サイレントゼフィルス……イギリスのISか……雑魚に用はない」

「ほう。なら試してみろ！」

刃を交え、サイレントゼフィルスに蹴りと拳とゼロ距離ビームを5  
回ずつやる。

「ぐう！」



クアンタの機動性を利用して、相手に反撃する余地を与えない。  
今ギリギリで鈴花の位置がわかるところなのだ。

「死ねよ」

GNソードVを両手にもって乱舞しまくる。

ライフルをぶった切り、ビットをぶった切り、武器になりつるところを破壊する。

そして地面にたたき付ける。

「さあ、死んでくれ」

GNソードVをバスターソードにして、操縦者の首に突き付ける。

「……さようなら。雑魚」

「だめええ!!」

ドッ

突き刺そうとした瞬間、真夏が泣きそうになりながら抱き着いてきた。

その姿はボロボロで真紀の援護にいったは良いものの、返り討ちに

あつたのだろう。

「ダメだよお……殺しちゃ……人殺しなんてまおっちに似合わないよお……」

「真夏……」

鈴花の位置はもうわからなくなっていたので、今すぐ邪魔したこいつを殺してやりたい。そんな思いが頭いっぱいだった。

ドオオオン！！

「くっ！真央、逃げるよ！」

「なんで……！」

真紀のISの装甲はほとんど碎け散っていた。

それなのに相手は傷一つついていなかった。

歯を食いしばり、その場からISを展開し逃げる。

「真紀、あいつは？」

「たぶん……ゴッドの発展機。いろいろカスタマイズや改良、強化してるから強い」

「……………鈴花に手を出したら殺す」

「まおっち、まきっち…明日だね」

明日、言つこと聞けば鈴花が帰ってくる。  
鈴花のためなら……………。

翌日、キャノンボールファスト

「さて、いつ来るのかね」

「消してやりたい……………」

「すすすっち……………」



怒り狂ってる真央はほって置いて、真紀が事情説明する。  
一夏達の表情は真剣なものから怒りに変わっていった。

「くそ！あのとぎついでいってれば……」

「鈴花達についていけばこんなことには……」

後悔する一夏と鈴に真紀は優しく微笑んで「大丈夫」と肩に手を置いた。

シャルロットとラウラ、セシリア、箒は周りを警戒し始めた。

「……もうすぐ始まるよ」

「……………(ビクッ!)……………」

「何びくついてんの、いつ来るかわかんないから警戒しとけよ」

全員がスタートラインに立つと見計らったかの様なタイミングでブザーがなった。

真っ先に飛び出したのが真夏だった。

その後ろに真央、またその後ろに真紀。一列50メートル間隔で飛んでいた。

「なんで真央達は武器を展開してないの？」

「ん？シャルロットは私達に落とされたいの？」

「すみませんでした！」

戦闘しながら会話しているシャルロットに感心しつつ、自分達が確実にフォローしあえる距離を保つ。

真央と真紀は500メートル間隔でも平気なのだが、真夏は近接スปีド特化なので50メートルにしないと間に合わないのだ。

「……来る」

「えっ！？どこ？」

「まだ来てないよ？真夏。もうすぐ来る」

真央の言葉で全員が戦闘をやめた。

一夏達はラウラの指示でフォーメーションを組み、持ち場についていた。

真央達は横一列になって先頭を飛ぶ。

「……………来た！セシリアの方だ」

「了解ですわ！」

セシリアが上にライフルを構え、撃つと何も無いところで弾かれた。

しばらくするとISを纏った人が3人いた。

「やはり貴方は危険ね。神崎真央」

「どなたでしようかね？」

「スコールとでもいっておきましょうか……。鈴花ちゃんは返すわ」

そういつて鈴花を投げ渡して来る。

真央はキャッチすると鈴花のナノマシンと共鳴し、異常がないかを確認する。

「大丈夫よ。何もしていないから、ただ昨日から私達を警戒してここに来るまで寝なかつただけ」

「なるほどね。それで何すればいいわけ？」

「そうね。貴方が私達の仲間になるか、その大事な仲間を私達に殺されるか」

「あんたらの仲間になる気はない」

「そうじゃあ死んでもらうわ。エム！」

エムと呼ばれたサイレントゼフィルスの操縦者は、ビットを展開し攻撃を始めた。

その攻撃をソードビットで防ぎ、後ろに一発も通さない。

「くだらない。真央ミサイル発射！」

そっぴいながら全力で下がる。

巻き込まれたくないから、痛いのは勘弁してほしいから、もう二度とくらいたくない攻撃トップ10に入るから

「怖じけづいたか！」

「馬鹿だな、君」

「なっ!?!」

上空からやってきたゼウスを驚いた表情で見るエムはすぐ回避行動に移ろうとしたが、間に合わず凶太いビームに飲まれた。

「カハッ！」

「はい一人脱落」

落ちていくエムを見ながらそっぴいとうとゼウスがため息をはいた。

「真央、なんでごっぴいいう状況を作れるんだ？」



「あいつらが鈴花をさらっていったのが悪い」

「まあ彼女は真央のことを信じて、できることをやっていたぞ？」

「見てたんだ」

「ああ、監視役といれかわって見守ってた」

「なら助け出せよ」的な目でゼウスを睨みつけ、GNソードVをライフルモードにしてエルメに向かって撃つ。

エルメはホルスタービットで防ぎ、改良されたライフルで反撃してきた。

「……ルンルン」

「かわさなくていいのか？」

「無意味だよ？」

ビームが当たる直前にシザービットがビームを掻き消した。

エルメの方にもシザービットがいつてるみたいで回避に専念していた。

「真央ごめんね。私のせいで……」

「気にしなくていいと思うよ？鈴花」

「あの人は私が「真夏もやる！」…じゃあ真夏と一緒にやるから」

「了解」

鈴花と真夏を見送ってからスコールの方に向き直り、クアンタをモードアルビオンにする。

真紀もビットを少し展開し、バスターライフルを両手にもった。

ゼウスは一夏達に避難の手伝いをするようにいつている

「さてスコールさんとやら、お手合わせ願いたいねえ」

「昨日みたいにはいかないよ、土砂降り」

「ふふふ楽しみね」

瞬時加速で一気に距離を詰めて、ソードを振るがヒラリと避けられてしまい、ライフルを向けられるが真紀のビットで妨害し撃たさない。

「なかなかの連携ね。さすがオリジナルとレプリカ」

「な！？この……！！」

「俺と真紀は自称双子だああああ！！」

この時シャルロットがツッコミを我慢していたのは誰も知らない。スコールはビットを展開し、真紀に攻撃を始めた。そのビットをソードビットで少しずつ破壊していきながら、スコールへの攻撃の手を緩めない。

「当たらないねえ」

「ゴツドの発展機よ？まあ改造とかしてるからいろいろ変わってるけどね」

「なるほど、それが発展機か」

ゼウスはリポーンズキャノンに変形し、砲撃し始めた。主に次から次へと出てくるビットを落としているのだが、なかなか砲撃のせいで近づけない。

「ま、強引に行くしかないでしょ！」

「いくよー！」

真紀がツインバスターライフルでスコールに攻撃する、おまけに今出てるビットのほとんどを消す。スコールにはあたらなかったが、ファインプレーだと思う。

「エネルギー大丈夫？」

「大丈夫よ？いざとなったらリミッター外すし」

「恐ろしいな」

「エネルギー切れがないゼウスは何も言えないと思うよ？」

「おしゃべりしてていいのかしら？」

またビットを大量に出してきた。  
主にビット重視で戦闘再開する。

「どづしたの？そんなんじゃ落ちないわよ！？」

「くう」

鈴花達もエルメのビットは全て落とせたが本体にはダメージを与えられていなかった。  
いくら攻撃しても、読まれているかのようにかわされる。

「むう！これならどうだ！」

真夏は無数のミサイルを発射し、その間からビームを撃つ。  
エルメはライフルを拡散モードにして乱射しビームはかわしていった。

「もらった！」

後ろに回り込んでいた鈴花がソードで切り掛かるが、かわされ蹴り飛ばされる。  
ビームを撃たれないようにシザービットで牽制する。

「しぶといわね。そろそろ死んでくれると嬉しいんだけど」

「私も貴様らがとつと潰れてくれると嬉しいんだがな！」

「なっ！？があ！」

織斑先生が打鉄に乗って近接ブレードでエルメのサバーニヤをたたき落とした。すかさず鈴花と真夏は追撃する。

「ふはははは！ジンテクスは滅びぬ！」

そっぴいエルメは自爆した。

「ジン……テクス？」

ドガアアアアン

「！！！？」

「あらあら、この程度？つまらないわね」

「あははは……真紀とゼウスがここまで簡単に……」

スコールの背後には巨大なISが立っていた。アリーナの天井より30メートルくらい小さいが十分すぎる大きさだ。

「真央くん。貴方はいつ落ちるの?」

「さあ?落とされるまで落ちないよ?」

展開されたビットを落としてつつ、スコールに接近していくが巨大なISに尽く遮られる。

面倒だから巨大なISから倒そうと、攻撃を加えてもエネルギー切れとかないんじゃないかと思いやめた。

「ほら、どうしたの?」

「近づけないのですが……」

「貴方の得意なのは接近戦でしょ?なら来てみなさい」

「真央!」

「鈴花、そっちは終わった?」

「うん。織斑先生のおかげで……自爆されたけど」

「そうか」

鈴花はサバーニヤにシフトチェンジして、ビットを展開した。  
やる気みたいだ。

「何人来ようと無駄」

「そうかい！」

力をフルで活用し、直撃コースの攻撃をできるだけ小さい動きで回避していく。

鈴花のアシストもあってどんどん距離をつめていくが、近づけば近づくだけ攻撃が増してくる。

「ちっ！」

「真央！僕も手伝うよ」

「私もだ！」

「私と紅椿だってやってやる！」

「私もですわ！」

「あたしだって！一夏はエネルギーフルチャージしといて！」

「おう！」





真央と鈴花はそのビームに直撃する。  
その煙りから真夏が飛び出し、スラスターと腰のビームサーベルのホルダーを切り付けた。

「くっ！落ちていく？嫌なところ切り付けてくれたわね」

「まおつちに手を出した罰だよ」

「!?!」

スコールの腕と脚をシザービットで固定する。

「天草鈴花……しぶとい女ね……気持ち悪い」

「なんだって？」

煙りの中からハルトを纏って出てきたのは鈴花ではなく、真央だった……その表情は怒りに染まっていて狂気が滲み出ていた。

「死ぬ覚悟は？」

そっぴいなながらスコールに組み付く。

「そうやってどうするつもり？自爆でもするの？」

「さあー？」

「ふふふ、その綺麗な顔を傷つけない……」

「へえー」

煙りがいきなり晴れて鈴花がクアンタを纏ってトランザムしている姿が現れた。

GNバスターソードも構えている、その体勢が何を意味するのかはだいたいの人が理解できる。

「ちっ！こんなところでええ！」

「私の真央に触れないで！！」

そっつい引き金を引く。

真央とスコールに向かっていく。

「話さない！このままでは貴方もタダでは済まないわ！！」

「知らないよ。俺の鈴花を馬鹿にした糞野郎は痛い目をみればいい」

そのままビームに飲み込まれる。

「がああああ!!!」

「うっぐう！まだあだあ」

ドオオオン！

二人のISが大爆発し、スコールはもう一つISを持っていたみたいで展開したが真央は落下しはじめる。

「真央！」

鈴花が真央を受け止め、状態を確認するがすでに意識はなくズタボロだった。

「真央！真央目を覚まして!!！」

「天草！神崎をつれて早くここから逃げろ」

「真央、真央があ……………起きて……………まおお……………」

巨大IS「ジントクス」は制御を失ったように暴れはじめた。アリーナのバリアに高出力のレーザーやビームを撃ちまくっているが、何故か壊れない。

『ハロハロ』 東さんだよ！今アリーナのバリアを強化したから、10倍くらいに！こつちからサポートするけど限界があるからみんな頑張つて！あとエネルギーを散布してるから皆のエネルギーは切れないと思うよ？』

「十分すぎるな」

「じゃあ俺はやつと役に立てるのか」

「いくぞ、一夏」

「ああ、千冬姉」

一夏と千冬は戦線に復帰し、シャルロット達と一緒にジントクスを止めにいった。

「く、この命綺麗に散らせる時がきたか」

ゼウスはISを展開し、ジントクスの後ろから接近していった。それに気づいた幕とセシリアは出来るだけ注意を引こうと、攻撃を激しくする。

「こつちだ！」

「こつちですわ！」

ジンテクスは体にある無数の砲門からビームを出し、胸にある大きな砲門からは高出力のビームをだす。  
狭いアリーナでは最悪極まりない相手だった。

「一夏！」

「千冬姉！」

「裂空刃！」

ほぼ同時にジンテクスの脚を切り落とすと体勢が崩れた。  
その隙を見逃さずにシャルロットとラウラ、セシリアが砲門に向けて猛攻撃をする。

「壊れるおおお！」

「いくよりヴァイブ、乱れ撃つ！」

「狙い撃ちますわあ！」

「いくぞ鈴！」

「わかってるわよ！」

「虎牙波斬 アギト！」

すかさずに箒と鈴のコンビネーションアタックが決まったが、砲門が多少潰れただけで大したダメージにはならなかった。

「どんだけ硬いのよ！」

「これではこちらが持たないかもしれんな」

「箒さん、冗談に聞こえませんか」

「僕も……でも真央や真紀、鈴花に真夏がいたら何とかなるんじゃないかって思うんだよね」

「ああ、私も思うな。あいつらは何だかんだ強い」

「じゃあ俺達ができることは真央が復活するまで持ちこたえること、倒せたら倒す。これだけだな」

「弟が少し後ろ向きなのは許しがたいが妥当だろう」

「それじゃあいきますか！！」

「真央……真央……」

「まおっち……ごめんね。まおっち……」

鈴花と真夏は真央を抱いて泣いていた。

もう戦闘なんて頭には無く、真央をこんなにしてしまった自分を責めていた。

「……うう……まおお……ごめんね……」

「……な……で」

「「えっ？」」

「なんで……泣いてんの？……なか……ないで……よ」

真央が鈴花の頬に手を添えながらそう言うと、鈴花と真夏は安心してよさげな表情になり、真央に笑顔を見せた。

「その顔……見せるの早いよ？一夏達が頑張ってるんだから」



「真央いくの？」

「うん」

「今度こそ死んじやうかもしれないんだよ!？」

「それでも……他の人が死ぬのを見たくないし……鈴花や真夏を置いてどこにもいけないよ」

「でも……まおつち」

真央は足元にいる狸に目をやり、脚で引き寄せお腹で抱き抱える。

「ポンコツいけるよね？」

「ぼん!」

「真央、帰ってきてね」

「わかってるよ」

「まおつち!真夏も手伝うよ!」

「じゃあいごうか」

クアンタアルピオンを展開し、ジンテクスに向かう。そのとき真紀が隣に並んできた。

「大丈夫？」

「いけるよ！」

「じゃあファイヤー！」

リミッターを外したゴツドのツインバスターライフルから放たれたビームは、ジンテクス右目の辺りを貫いた。

「真央！真紀に真夏…来てくれたか！」

「ただいまラウラ」

「遅いぞ！」

真紀はさっそくビットを出せるだけだして攻撃を始めた。

真央もGNソードヴァイフルモードにして接近しながら乱射する。

「すごいな」

千冬は思わず驚きの声を出した。

ジンテクスのスラスターからビットが射出されたのを確認すると、真央と真紀以外はビットの破壊に専念した。

「真央右！」

「あいよ！真紀左」

「おーけー」

ビットからの攻撃をお互いに知らせて回避する。  
すると赤いビームが目の前のビットを破壊するのが見えた。

「ゼウスか！」

「真央、ジントクスはコアを破壊しないと止まらない！私はコアを露出させる……お前はコアまで行き破壊しろ！」

「なっ！」

ゼウスはジントクスの鳩尾をビームサーベルでクロスに切り付けて、最大出力でビームを浴びせた。

しかしジントクスの装甲をあと一歩のところまで削れたが、火力がたりなくてコアがまだ隠れたままだった。

ゼウスはジントクスに組み付いて淡くひかりだす。

「ゼウスお前！」

「これは死ではない！私達が生きるための………！」

キーーーーー

甲高い音と共に大爆発を起こし、ゼウスは跡形もなく散った。

しかしコアを露出させることには成功したが、攻撃が一層激しさを増した。

「いくぞ！」

羽を広げ、全速力でコアに向かって飛翔する。

リミッター外し、GNバスターソードを握って距離を詰めていく。

「真央！受け取れ！」

「一夏？これ雪片」

「役に立つぜ？」

「サンキュー」

ジンテクスの攻撃が当たっても、怯まず直進し続ける。  
すると真紀が目の前に割って入ってきた。

「私が盾になる！」

「でもボロボロだろ！」

「今の私はこれしかできない！」

ジントクスの攻撃でどんどん装甲を砕かれていく真紀の背中を見つづ、ソードビットで出来るだけビームを相殺していく。

「……真央、好きだよ」

「真紀？何いきなり……」「ドォゴォオン！」「……ちっ、真夏！真紀を拾って！」

「わかってる！」

生命反応があるかを確認してから、憎しみの籠った目で睨む。体からは赤いオーラ……狂気が漏れ、異様な雰囲気を出していた。

「ここできえろ」

スコールがブレードを振りかぶった瞬間に真央は雪片を振るって腹を少し切る。

スコールは腹を抑えながらエムを担ぎ、侵入してきたと思われる地面の穴から逃げ出した。

「トランザム」

トランザムを起動させ、ライザーソードでビット大量に破壊する。

「これで！」

雪片をコアに突き付け、さらにその上からGNバスターソードを突き刺す。

「はぁぁぁぁぁぁ！」

ライザーソードでコアを跡形もなく消し、そのまま上に傾けて完全に機能を停止するまえにジントクスは真央を抱え込んだ。

「まずい！あのままでは爆発にまきこまれるぞ！」

「……いや……真央……早く出てきて……」

鈴花の願いは虚しく、真央を抱え込んだままジントクスは爆発した。

「……うっ」

あれ？生きてるや……………おかしいな。  
あのパターンは死ぬパターンじゃなかった？死亡フラグもちゃんと  
立てたよね？

この世は不思議いっぱいだ。

「……お……………ま」

ああ、誰かが何かいつてるや……この声鈴花に似てない？

真夏は真紀を任せたから医務室に行ってるはず、当分は鈴花と二人つきりかあ……久しぶりだなあ。

なかなか二人つきりになる機会なんてなかったもんね……同じ部屋の時は甘えっぱなしだったなあ。

「真央！」

ああやっぱり鈴花だ……そんな泣きそうな顔しないでよ、俺は無事だからさ。

「……うう……真央……真央」

「す……ずか……痛いよ」

「バカ……心配ばかりかけて！」

「へへへ、ごめんね」

「もうー！」

そう……その少し嬉しそうで少し悲しそうで少し怒った顔、可愛いなあ 鈴花は……。

誰にも渡したくないなあ……。



「真央頑張ったね……ゼウスさんは残念だったけど」

「あいつのおかげでこの程度で済んだんだよ。MVPはあいつだな」

「ふふふ……はははは」

やっと笑ってくれた。

やっぱり笑顔が一番可愛いよ……鈴花…。

あー眠くなってきた。

「……」

「ん？」

鈴花どこみてるんだろ……あ、鉄の棒が刺さってる。

もしかして鈴花はわざと明るく振る舞ってるのか？いやもしかなくともそうだろう。

馬鹿なやつ……

「ねえ真央。明日一緒にいてくれない？」

「いいよ。それくらいなら」

鈴花……泣きそう……助からないと思ってるのかな？

馬鹿なやつ……この神崎真央さんがこの程度でやられるわけない……  
だろ。

「そ、それでキスとか……ギュツとか……グスツ……いっぱい……  
いっぱい」

「うん……大丈夫。俺は鈴花のことが……大好きだから……」

「私も大好き！真央のこと大好き！だから……だから！」

嬉しいなあ……こんなに思われてるんだ。

幸せものだ、大好きな鈴花に大好きって言われて……もっと一緒に  
…………いたい……。

「……真央？……真央！？やだ目を開けて！開けてよ！！」

大丈夫だよ……まだ意識はある…………から、ほら手を握ってるで  
しょ？

まったく……心……配性だなあ。

「そうだ！今日の夕食は私が食べさせてあげる、そのあと真夏と私  
と真央で仲良く寝よう！」

うん、いいね。

そういえば……会長さ………んは生徒の避……難で忙しか……ったの  
かな？

もう……

「ミルクティーもあるよ！きっと楽しいよ……だから返事して！」

ごめ……もう……

気力が……あはは、鈴花……大す………き

「真央？手を握ってよ………なんで力無く地面に落ちるの？ねえ……  
真央、真央………真央おお！」

## 第50話「愛(i)」

あれから3ヶ月……私は今でも真央を失う悲しさ、寂しさ、辛さを鮮明に思い出せる。

私は本気でこの世の誰よりも、真央を愛していたってことがわかる。あの日、大泣きしたなあ……真央が目をつむって……返事がなくなっ……私の手から真央の手がずり落ちて……悲しくて嫌で離れたくなくて……。

「何回想に浸ってんの？ 鈴花」

……今もこうして空気読めなくて、まったくもう……。ナレーシヨンあとは任せたよ

「3ヶ月前のこと思い出してたの」

「すずっちはトラウマみたいなものになったもんね」

「私は真央を信じてたけどね！」

真紀が胸を張って自信満々で言うが、真夏の話に寄れば俺がズタボロで生死の境をさ迷ってるのを見た瞬間にへたれこんで毎日泣いていたって聞いた。

「まあ俺は運だけはいいからね」

「」「嘘だ！」「」

おもいつきり否定されました。

「ポンコツがああ場で真央のところを駆け付けて、鉄の棒の邪魔な部分を切って応急処置してなかったら死んでたんだからね！わかつてるの！？まおっち」

「わ、わかつてるよ？」

「そもそも！なんで脱出できなくなるほどエネルギー使ってるの！？もしものこと考えなさいよ！」

「そんな余裕なかったんだよ……」

実際、雪片の旦那に「一夏じゃないと嫌だ！」的な感じで周りとう俺のエネルギーを取ってったんだから仕方ない。

おまけにトランザムとライザーソード使ったわけだし、エネルギーが残ってる方がすごいと思うよ？

ていうかポンコツ相変わらずすごいな……。

「ポン！」

頭の上で誇らしげに鳴き声をあげるポンコツは、写真に撮って廊下

に張り出したいくらい素晴らしいドヤ顔だった。  
そして重い……誰だ！こいつに餌付けしまくったやつは！？  
頭に乗っける俺の身にもなれ！

「はやく、教室いこ！」

「はいはいー」

鈴花、真夏、真紀と並んで廊下を歩く。  
いつもの風景でいつもとは少し違う雰囲気、普通で極々当たり前な  
日常なんだけど少し違う日常。

「おっ、おはよう真央」

と一夏が言った

「あんたら、またイチャついてー。そのうち刺されるわよ？」

「今日も元気そうで何よりだ」

と篤と鈴が言った

「ねえ真央。近接戦闘を教えてよ！織斑先生が『神崎は私より強い』

って言ってたからさ」

「私にビットの制御の方も教えて下さると嬉しいのですが」

とシャルとセシリアが言った

「ふむ……人気者だな。ラーメン一緒に食べないか？」

とラウラが言った。

全て神崎真央に向かって言われた言葉だ。  
それを真央は……

「そのうちね」

「「「またか!!」「」」

真央の言葉で一気に噴火した3人は真央に詰め寄った。  
もちろん抗議するために……それと真央の体調を確認するため

「なんでいつもいつも『そのうちね』なの!?!少しは僕らの相手してよ!」

「10分でもいいですから少し指導してくださいませんか!？」

「私とのラーメンは嫌なのか!？嫌じゃないだろう?嬉しいだろう?」

「落ち着いてよ。第一俺がISに乗ったら鈴花が今にも泣きそうな顔するからあまり乗りたくないの!それと目を覚まして1週間も立ってないのにラーメンはきついよ」

そう真央が目を覚ましたのは5日前、食事制限がかかっているのだ。目を覚ました時、鈴花や真夏、真紀が精神的に危険な状態だったのを見て急いで癒して普通の状態に戻した。

ちなみに鈴花や真夏、真紀はそんなことを無視して、真央の好物を食べさせているのは本人達以外誰も知らない。

「だからそのうちね」

窓から気持ちいい風が入る



『 ？？ 人とは違つ者が人とわかりあう……これは進歩だ。なあ阿修羅』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8918s/>

---

IS &lt;インフィニット・ストラトス&gt; 異常

2011年11月5日13時22分発行